

第4回 SGRAチャイナ・フォーラム

世界的課題に向けて いま若者ができること

— Table For Two —

■ フォーラムの趣旨

開発途上国の飢餓と先進国の肥満や生活習慣病に同時に取り組む、TABLE FOR TWOという日本発の社会貢献運動の創始者、近藤正晃ジェームスさんにご講演いただきます。TABLE FOR TWOとは、先進国の食卓に出される健康的な食事が、開発途上国の学校給食に生まれ変わることを意味します。2007年に始められた活動ですが、協力企業はどんどん増え、たくさんの日本のメディアにとりあげられています。日中同時通訳付き。SGRAは、民間人による社会公益活動を、北京をはじめとする中国各地の大学等で紹介するフォーラムを開催していきたいと思っています。

SGRAとは

SGRAは、世界各国から渡日し長い留学生活を経て日本の大学院から博士号を取得した知日派外国人研究者が中心となって、個人や組織がグローバル化にたちむかうための方針や戦略をたてる時に役立つような研究、問題解決の提言を行い、その成果をフォーラム、レポート、ホームページ等の方法で、広く社会に発信しています。研究テーマごとに、多分野多国籍の研究者が研究チームを編成し、広汎な知恵とネットワークを結集して、多面的なデータから分析・考察して研究を行います。SGRAは、ある一定の専門家ではなく、広く社会全般を対象に、幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動を狙いとしています。良き地球市民の実現に貢献することがSGRAの基本的な目標です。詳細はホームページ（www.aisf.or.jp/sgra/）をご覧ください。

SGRAかわらばん

SGRA フォーラム等のお知らせと、世界各地からのSGRA会員のエッセイを、毎週水曜日に電子メールで配信しています。SGRAかわらばんは、どなたにも無料で購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録していただけます。
<http://www.aisf.or.jp/sgra/>

世界的課題に向けて いま若者ができること

— Table For Two —

日 時	2009年9月16日(水)午後4時～6時	2009年9月17日(木)午後6時～8時
会 場	北京外国語大学日本学研究センター 三階多功能庁	上海財経大学梯一教室（国定路777号）
主 催	関口グローバル研究会(SGRA)	
協 力	特定非営利活動法人TABLE FOR TWO International	
協 賛	国際交流基金北京日本文化センター、(財)渥美国際交流奨学財団	

講演

4

近藤正晃 ジェームス 特定非営利活動法人TABLE FOR TWO International 共同代表理事

講演要旨

世界には60億人以上の人々が暮らしていますが、10億人が飢餓、10億人が肥満などの生活習慣病で苦しんでいます。世界の死亡と病気の原因は、1位が肥満、2位が飢餓です。戦争、事故、感染症を大きく上回る人類の課題です。この飢餓と肥満の同時解消に取り組もうと立ち上がったのがTABLE FOR TWO(TFT)です。TFTに参加する企業食堂、レストラン、ホテルなどで健康的な食事をとると、開発途上国で飢餓に苦しむ子供に学校給食が1食寄付されます。1人で食べていても、世界の誰かと2人で食べている。それでTFTという名前をつけました。日常の中で、世界とのつながりを感じられる。小さな一歩で、お互いに救われる。そんな運動です。社会起業家のキャリアに興味がある方、食や健康に興味がある方、TFTを中国で広げることに興味がある方。幅広い方々との議論を楽しみにしています。

質疑応答 ————— 23

北京 23 上海 31

アンケート ————— 36

あとがき ————— 40

講演



世界的課題に向けて いま若者ができること

—TABLE FOR TWO—

講師 近藤正晃ジェームス

(特定非営利活動法人TABLE FOR TWO International 共同代表理事)

こんにちは。皆さんとお話ができる機会ができて、大変幸せに思っています。

TABLE FOR TWOの話に入る前に、私がなぜこういう活動に興味を持ったかというお話をします。ちょうど皆さんぐらいの年に、私はアメリカのブラウン大学に留学していて、先生から「世界には食料がいっぱい余っているけれど、たくさん人の飢餓の人がいます」という話を聞きました。それで、それを何とか解決できないか考えたのです。

今大学4年生の方は就職を考えていらっしゃると思いますが、私もどこに就職しようか、いろいろな方に相談をしました。そして、経営コンサルティングという仕事があると聞きました。「それは一体何なのですか」と聞くと、何かの問題があったときにそれを解決する仕事で、マネジメントということをする会社だということでした。

私は、先ほどの、飢餓と食料余剰が同時に起きているのはすごく重要な問題だと思っていたので、自分もそういう問題を解決できるようになりたいと思い、1990年に、マッキンゼーという会社に入り15年間勤めました。最初は、大体のお客さんは企業でした。例えば、アメリカの飲み物の会社が中国でオレンジジュースをもっと売りたいがどうすればいいかという商品の問題。あるいは、ある会社にはステレオの事業とCDの事業があるのだけれども、それらを世界にどういうふうに売っていけばいいかというより大きな事業の問題。もう少しすると、世界的な企業を今後どういうふうに経営していくかという企業全体の問題に取り組むようになりました。最初の6～7年はそういうことをやっていたのです。

ちょうどそのころ、アメリカのワシントンDCで、マッキンゼーが世界経済全体のことを考えるシンクタンクを作ったのです。アメリカのマサチューセッツ工科大学(MIT)からソローさんというノーベル賞を取った経済学の先生を、諮問委員長として招きました。このシンクタンクは面白くて、お金を取らない。どこ

かの国で新しい大統領や首相が誕生して、その人が本気で改革を進める意欲があれば、チームを1年間寄附します。コンサルティングというのは非常にフィーが高い仕事ですから、1年間大きなチームを寄附すると日本円で10億円、人民元で7000万元くらいの価値の寄付に値します。お金をもらわない代わりに結果の外部発表も自由にやらせてもらうというやり方でした。

最初はイギリスのブレアさんという人が1998年に首相になった時でした。私もそこに1年いて、今の首相、当時のブラウン財務大臣の元で、最初の国家予算策定につながる経済政策を作る仕事をお手伝いしました。その後エリツィン大統領からプーチン大統領に代わる直前のロシアに1年半行きました。ロシアのルーブル（通貨）がクラッシュをして経済が大変だったのです。そこで、どのように経済を立て直すことができるかという仕事をしました。その後も経済政策のチームの一員として、ポーランドや台湾などに行きました。2000年に日本に帰国しました。

どの国に行っても、医療の問題については、なかなか答えが出ない。先ほど申し上げたソローさんも、医療と教育はとても難しいもので、何が正しい政策目標成果なのかが分かりにくいと言っていました。例えば、自動車であれば非常に安くて品質が高いものを、少ない労働者と少ない設備でできれば、こんなにいいことはないと言っています。しかし、医療制度においては、中国でも今問題になっていると思いますが、いろいろな答えがあります。お金持ちの人が本当にいい医療が受けられることがすごくいいことなのか。そうではなくて、最高水準の医療が一部の人に提供されるよう、もっと広く平等に医療を提供できることがいいことなのか。あるいは、本当に貧しくて困っている人に集中して、その人だけを政策的に支援したらいいのか。これは国によって、あるいは時代によって答えがだいぶ変わり、それによって政策も違ってくるのです。医療がすごく難しいということを私も痛感しました。

そういうことを議論していたとき、東京大学で医療政策のセンターを立ち上げないかという話があったので、6年前に研究・教育グループを立ち上げました。しばらくして、日本医療政策機構という、日本全体で医療を考えるシンクタンクを設立することになりました。これは東京大学と慶応大学と京都大学といった大学、経済界や医学界の方にも入っていただいて、医療政策を考える政策提言集団です。

「TABLE FOR TWO」は、こうした医療政策の議論から生まれたものです。私が大学を卒業して、今年で20年目です。20年間、半分以上、政策の仕事をしてきましたが、この健康という問題は、政策ではなかなか良くならないと思うことがありました。

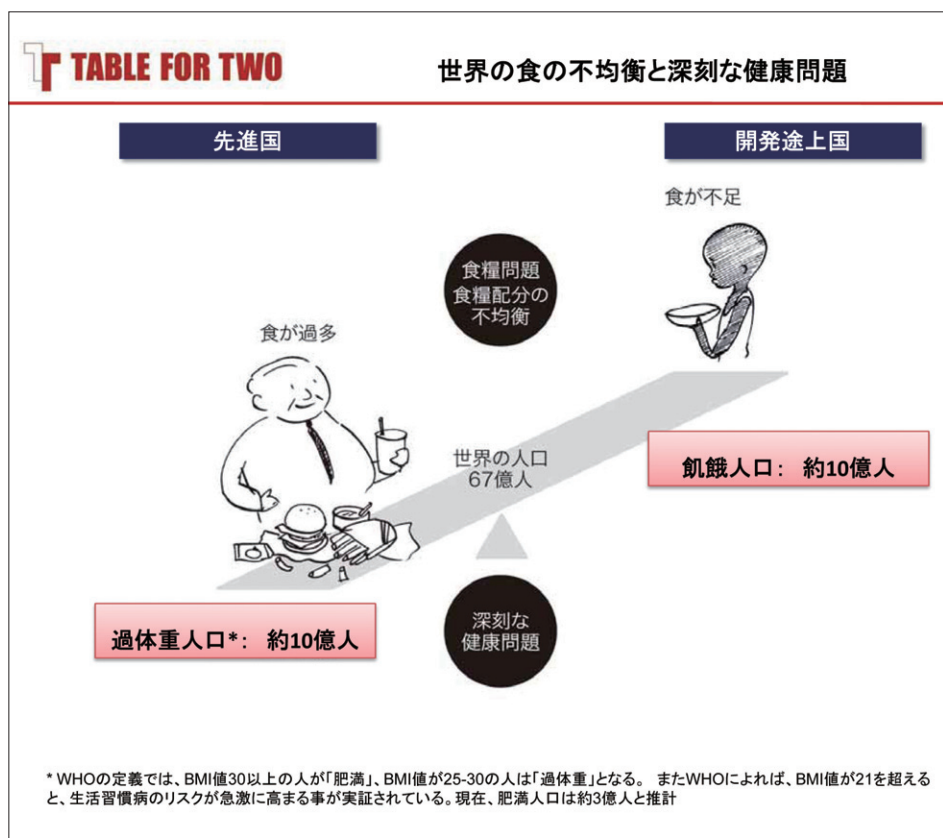
それは今、中国でも実は問題になっているのですが、肥満の問題です。肥満は実は世界の健康問題で一番大きな問題です。今、世界には67億人くらいの人が住んでいます。そのうち約10億人が肥満またそれに関係する生活習慣病で苦しんでいます。生活習慣病に対して、各国はいろいろな政策をだして改善する努力をしています。生活習慣病をどうやって治すかは、多分ここにいらっしゃる皆さんは全員よく知っていると思います。食べ過ぎないで運動すればいいだけなので

す。ですから政府は何十年も一生懸命ポスターを張って、「食べ過ぎはやめましょう」「ちゃんと運動しましょう」と言っています。私たちも皆知っているのですが、それが継続してできないのです。つまり、政府でできることには限界があって、もっと一人一人が社会の中で幅広く取り組まないと駄目だということをすごく強く感じていました。

それともう一つ、ダボス会議というものがあります。先週、大連でサマー・ダボス会議が開催されたので、私も行きました。ダボス会議は、世界の大きな問題を皆で議論する場所です。皆さんからすると全然若くないのですが、40歳以下の人が、毎年50～100名くらい、「ヤンググローバルリーダー」として選ばれています。5年ほど前に、たまたま私も選んでいただいて、健康グループのまとめ役をしました。

その健康グループが集まったときに、私は肥満と生活習慣病を何とかしたいということを非常に強く訴えたのですが、そこにアフリカから来たメンバーがいて、「あなたは肥満が大変だと言っているけれど、私たちは飢餓の問題をまず何とかしたい」と言うのです。肥満のグループは「いっぱい食事が出されても食べきれないで、残したらいいんじゃないか」「たくさん食べた後には、たくさん走ろう」など、食べ物を無駄にするようなことを言っている。何のためにそんなことをやっているか分からないですけれども、先進国ではそういうことがすごく多いのです。大きなハンバーガーを食べて、たくさんコカコーラを飲んだ後、2時間ぐらいひたすら走っている人がいるのですが、すごくエネルギーを無駄にしていると思います（笑）。

図1:世界の食の不均衡と深刻な健康問題

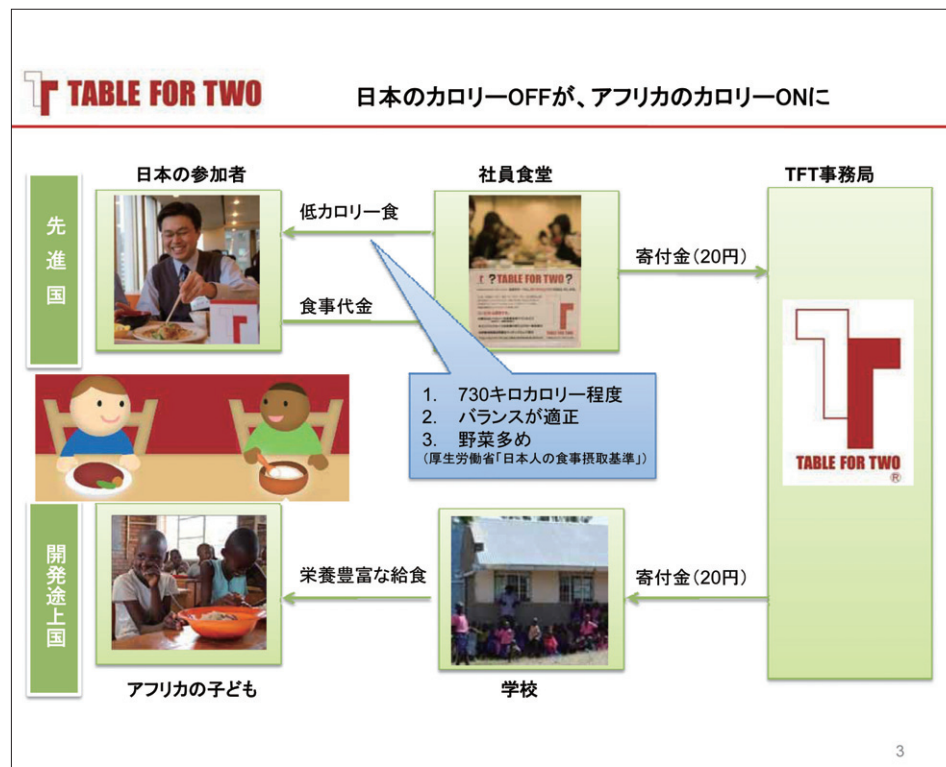


肥満は10億人と申し上げましたが、飢餓、栄養失調の人も実は10億人います(図1)。つまり、世界の人口は67億人で、10億人が肥満で、10億人が飢餓なのです。これは、まさに世界の矛盾を表しています。すごく栄養を取っている人も苦しんでいて、一方で、栄養が足りない人も苦しんでいる。両方とも合計すると20億人なので、世界のほぼ3人に1人が苦しんでいる。

これを何とか同時に解決できないのか。世界でこんなに大きい不平等、持てる人と、持たざる人がいるということについて、もうちょっと皆で考えて取り組むことができないか、ということで始めたのが「TABLE FOR TWO」です。

TABLE FOR TWOの仕組み

図2：日本のカロリー off が
アフリカのカロリー on に



すごくシンプルなプログラムです。図2には「先進国」と書いていますが、中国にもぜひ支部を開きたいと思っています。中国もたくさんお金持ちで太った人がいる国ですから(笑)。お金持ちで太った人には、ヘルシーな食事を食べてもらいます。会社の食堂、あるいは大学の食堂や街のレストラン、カフェで1食当たり730kcal以下のTABLE FOR TWOの食事を作ってもらいます。これぐらいでしたらそんなに太らないのです。

730kcal以下で、栄養のバランスが良く、かつ、野菜が多めのメニューを作ってもらい、これを社員食堂で注文した時に、食べる本人かその会社で、あるいは両方で、20円を寄附してもらいます。日本の社員食堂のメニューは一食当たり

400～600円くらいと比較的安価なので、20円を上乘せしてもそれ程大きな影響はない。メニューの献立の中から、カロリーの高いものを一つ取って材料費を抑える代わりに20円を乗せるということで誰でも参加しやすいようにしています。

「TABLE FOR TWO」はこの20円を集めて、それを、開発途上国の給食に寄附します。今はアフリカが多いのですが、小学校、中学校で食べるものがない子どもたちに、お昼ご飯を1食出します。それが、大体20円でできるのです。TABLE FOR TWOというのは「二人の食卓」、二人で一緒に食べるという意味です。TABLE FOR TWOの健康な食事を自分が食べると誰か他の人も一人健康的な食事を食べることができるようになるわけです。世界で食べられない子どもと二人で食べていることを想像しながら食べてくださいということで、「TABLE FOR TWO」という運動になっています。

先ほど通訳の方とお話ししたら、中国でTABLE FOR TWOというと、男性と女性がデートで食べるというもうちょっとセクシーな意味があるようですが、そういう意味ではありません。持てる人と、持たざる人と一緒に助け合いながら食べるという意味です。

これまでも、給食を寄附するプログラムはありました。自分たちはお金があるから、アフリカにお金をあげて、健康な食事を食べてもらいましょうというプログラムはいくつもありました。しかし、私たちがやりたかったのは、私たち自

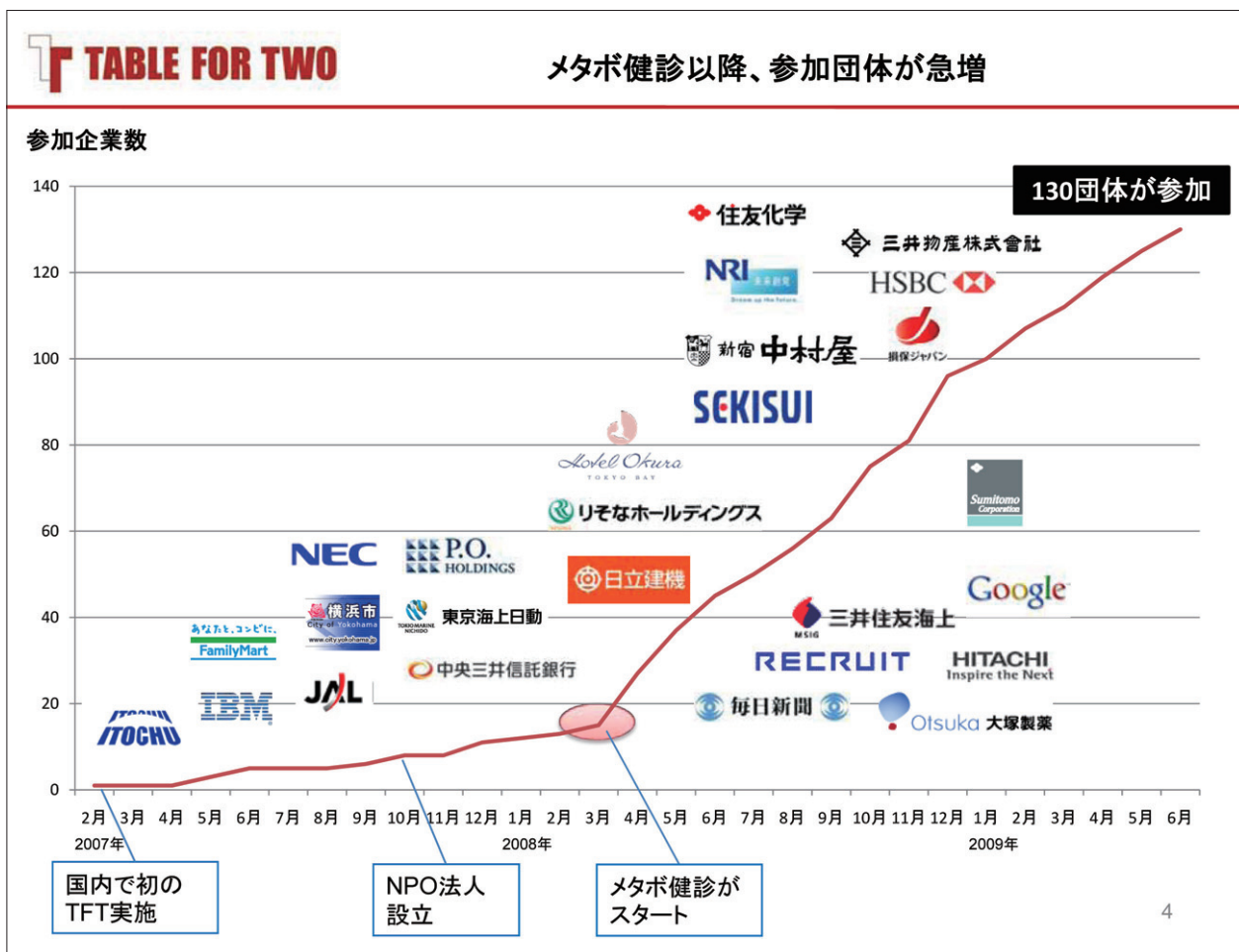


図3：メタボ検診以後、参加団体が急増

身にもメリットがあることでした。私たち自身が健康なものを食べれば非常にメリットがあるし、アフリカの飢餓も救うことができ、両方にとっていいことがある。持てる人も生活習慣病や肥満で苦しんでいるので、自分自身もきちっと管理して、ほかの人も一緒に幸せにしようという発想で運動をしています。

この運動を始めてすぐ、2007年2月頃、伊藤忠で最初のパイロットをさせていただきました。このチャートでは130ですが、昨日聞いたところ、この約2年間で160の企業が社員食堂でTABLE FOR TWOを食べる機会を提供しています。私としては、日本だけでも大企業1000社に入ってもらい、世界では1万社にしたいです。中国が参加してくれると、すぐに参加企業数1万社を達成できるのですけれども。例えばIBMやGoogleといった会社では全世界にオペレーションがあるので、企業のネットワークを利用し、世界に広げることを考えています。(図3)

図4：企業以外にも
官公庁、地方自治体、
大学、病院などでも実施



企業以外の分野でも導入してもらおうということで、日本政府の全部の省庁に入ってもらっています。中国はどうか分かりませんが、日本では政府がちゃんと取り組むと、それで安心する人もいるので、政府にも参加していただきます。地方自治体では、日本で2番目に大きい都市である横浜市でも導入しています。

それから病院です。病気になると健康なものを食べなくてはいけないのですが、病院のカフェテリアで不健康なものを出していることがよくあります。病院に来た方にはヘルシーなものを食べてもらおうということで参加していただいています。さらに五つぐらい増えているのですが、幾つかの大学の食堂でも導入しています。(図4)

「TABLE FOR TWO」は誰にでも気楽に参加できる活動です。皆がそれを食べなくてはいけないわけではないですし、ヘルシーなメニューを作るのはレストランにとってはそんなに難しくありません。また、日本あるいは世界の多くの企業

や団体にとっては、社会貢献をしているという意味もあります。お金をもうけるだけではなくて、社会のために何かやろうということですし、社員の方にも健康になってほしいということでもあります。

アメリカはもっと深刻で、非常に肥満の人が増えています。例えば面白いデータがあるのですが、ゼネラルモーターズの社員の医療費は、ゼネラルモーターズの自動車を造る鉄のコストよりも高いのです。ですから社員に健康になってもらうということは、ゼネラルモーターズが競争力を維持するために非常に重要だということです。そういう意味でもたくさんの企業に協力していただいているわけです。

20円という金額は国によって変えることができます。そんなに大きい負担ではなくできるようにするということが重要です。中国ではどうか分かりませんが、寄附したり何らかの社会貢献をしたりするのはお金持ちの人がすることだという認識がまだまだ日本では非常に強い。「あなたはなぜ寄附しないんですか。社会貢献しないんですか」という議論をすると「もっともっとお金持ちになったらたくさんします。でも、今は私がむしろ寄附してほしいくらいです」というような話が多いのです。しかし、20円を、週に1回とか、1カ月に1回とかでしたら、誰でも参加ができるし、何回でもできるということで広がっています。

TABLE FOR TWO

衆議院、参議院の食堂でもスタート！



図5：衆議院、参議院の食堂でもスタート！



大学生による「TABLE FOR TWO大学連合」

目的

活動内容

幹事

- ・ プログラムの普及
各大学の学生食堂へのTABLE FOR TWO導入
- ・ 学生の意識改革
世界の抱える食料問題、自分たちの健康、
開発途上国の現状について学生の意識を高める



- ・ 月に一度のミーティング : 学食への導入方法や告知方法などの相談、情報交換
- ・ 定期的なイベント開催 : 意識改革のための勉強会、講演会等を企画

- ・ 代表 浜中 吾郎 (千葉大)
- ・ 副代表 澤木 一真 (青山学院大)
中村 麻衣子 (専修大)
- ・ 書記 西内 祐介 (早稲田大)



(大学連合 ポスター案)

現在、約100名の学生が活動中

図6：大学生による「TABLE FOR TWO大学連合」

この活動は、日本の政治から独立した民間非営利の運動ですが、政治家の人たちにも応援していただいています。日本には自民党と民主党という二つの大きな政党がありますが、両政党にご参加いただき、自民党からは川口元外務大臣に参議院で代表を、民主党からは鳩山さんに衆議院で代表を務めていただきました。TABLE FOR TWOの代表が首相になったので、私としてはすごくハッピーです。

この方はアフリカのウガンダという国の大使ですが、アフリカの方々にも参画をいただいております。(図5)

日本の大学生による「TABLE FOR TWO 大学連盟」があって、学生さんから「うちの大学でもやろう」ということで、大学の食堂に導入して下さっています。また、学生の意識改革のためということで、勉強会をしています。短い映画を上映して、肥満の問題と飢餓の問題が世界でどういう大きい問題なのかということ伝えていただいたり、ミーティングをしたりしています。どこか一つの大学ではなくて、いろいろな大学から、ここには100名と書いてあるのですが、昨日確認したら、250名くらい、TABLE FOR TWOの学生連合に参加してくださっています。これも、これからどんどん広げていきたいと思います。(図6)

大切なのは、こういう社会的な活動を個人が頑張ってやろうということです。

政府にただ頼むのではなく、私たちができることをやっていこうということに対する共感、若い人であればあるほどずっと高いので、私はすごく期待しています。私より年下の方々に、世界の問題に対する何らかの新しい解決策を、自分たちで考えることをやっていただきたいです。もちろん中国でもぜひやっていただきたいと思います。

図7：
20円で届けられる
学校給食とは？

ウガンダ共和国
ルワンダ共和国
マラウイ共和国

3つの条件により、ウガンダ、ルワンダ、マラウイの3ヶ国に学校給食を届けています

1. 「深刻な貧困状況」
2. 「政情の安定」
3. 「給食事業の管理・報告体制の整備」

「ボショ」というトウモロコシの粉をお湯で練って作ったお餅のような主食に、豆や野菜の入った煮込みスープをかけた栄養価の高い温かい食事を提供しています。

ボショと大豆のスープ

ボショの原材料トウモロコシ

ルワンダの食事をする子供

では、集めた後にその20円はどういうところに行くのでしょうか。今、私たちが一番活動しているのは、アフリカのウガンダ、ルワンダ、マラウイという3カ国です。なぜこの3カ国でやっているかという、三つ理由があります。

一つは、深刻な貧困の問題がある、世界で最も貧しい国であるということ。二つ目に政情が安定しているということ。政情があまり安定していない国でやろうとすると、例えば軍隊がないと入っていけないとか、そもそも学校教育が全部止まっているようなところでは、きちんと責任を持って学校給食をお届けできないのです。三つ目に、給食事業をきちんと実施できる人がいて、かつ、きちっとレポートしてくれるパートナーが探せるところであること。20円をアフリカの給食のために寄附しているのに、それを誰かが取ってしまったとか、全然報告してくれないということになると、せっかくTABLE FOR TWOに参加している方がっかりされますから、この三つの基準で活動する国とパートナーを選んでいきます。

給食のメニューですが、例えば、ボショと豆と野菜が入ったスープです。ボショは、アフリカではすごくよく食べている主食で、とうもろこしの粉をマッシュドポテトのようにしたものです。栄養バランスからいっても非常にヘルシーなものです。この子たちの多くはこの1食しか食べないので、この食事を私たちが届けなければ、場合によっては何も食事がない日があるかもしれないのです。(図7)

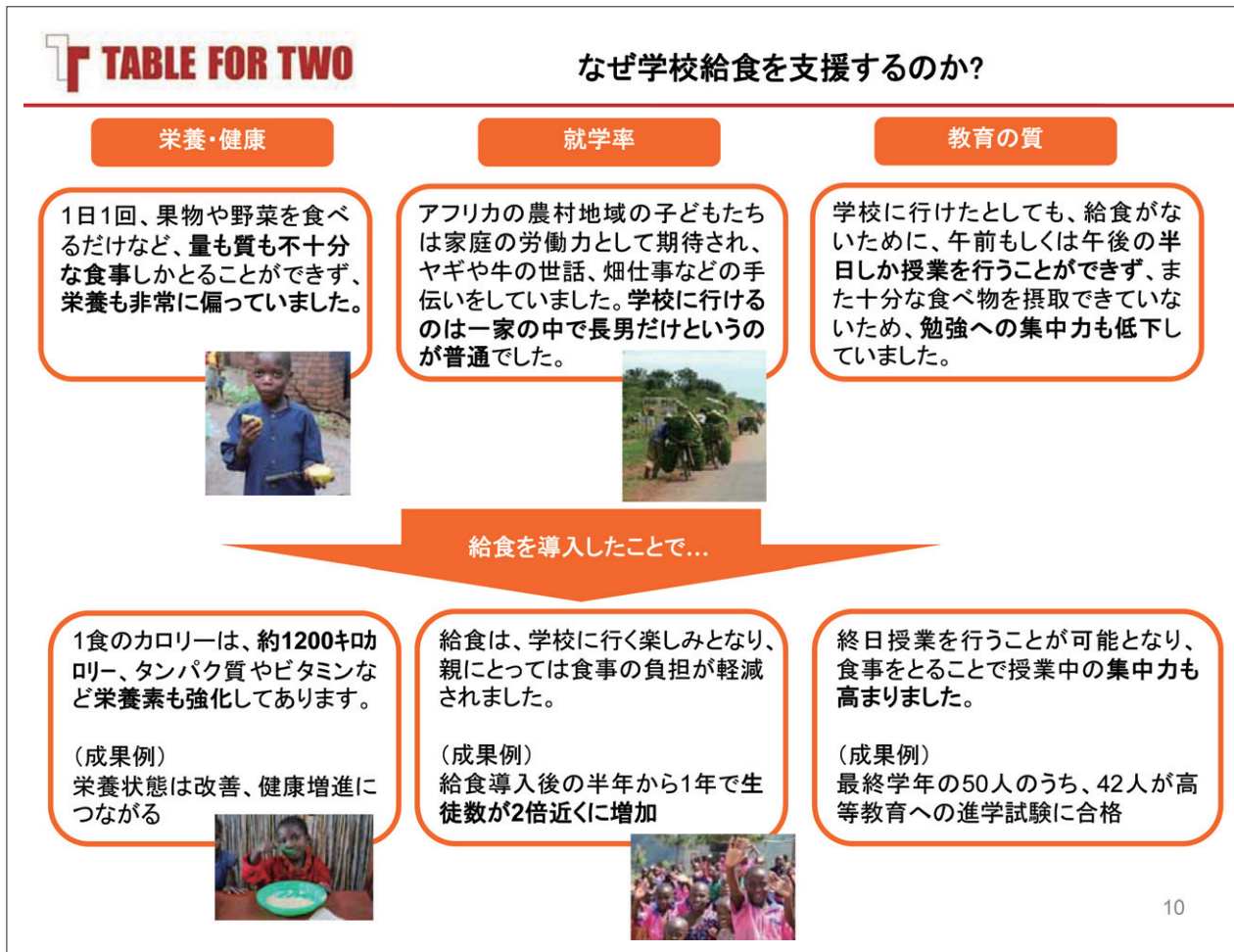


図8：なぜ学校給食を支援するのか？

世の中には10億人の栄養失調や飢餓の人がいますが、当然、お年寄りの方もいれば、大人もいるし、子どももいます。子どもに食事をあげるにしても、なぜ学校給食を出すのかということですが、三つ理由があります。

一つは直接的な理由です。子どもが栄養をちゃんと取らないと、後々になっても問題が残ってしまいます。小さいときにちゃんと栄養を取っていないと治らない病気があったり、いつになっても体が弱かったり、大きく育たなかったりするので、やはり子どもに対してちゃんと栄養と健康を守ってあげようというのが一つ目です。

二つ目に、私たちが支援している国は非常に貧しいので、家族全員で食べていくのが大変なのです。そうすると、お父さんもお母さんも本当は子どもを学校に行かせたくても、食べていくために子どもに畑で仕事をしてもらったり、家の手伝いをしてもらったりしようということになります。例えば、一番上の子だけは学校に行かせるけれども下の子は行かせないとか、男の子は行かせるけれども女の子は行かせないとか、そういう問題がありました。親からすると、子どもがただでおなかがいっぱいになってくれるのであれば、学校にちゃんと行かせようということになります。学校だけだったら行かせないけれど、子どもが健康になってくれるのだったら行かせようとなるわけです。

三つ目に、皆さんもお昼を全く食べないと、午後にはおなかがすいてしまって、あまり集中していられなくなりますよね。この子たちも学校給食をやるまでは、午後の授業はあまり参加しなかったり、きちんと勉強できなかったりしたのです。面白かったのは、最初、お昼をちゃんと出すようになったら、みんなお昼で帰ってしまったのです。本当は午後も学校があるのですが、給食を食べたいので、午前だけはいる。でもお昼で帰ってしまっていたので、その後、3時に甘いお茶を出してあげたら、3時までちゃんと残ってみんな勉強するようになりました。(図8)

このように、学校給食を出すと、栄養と健康を守れるだけではなく、皆がちゃんと学校に行き、かつ、ちゃんと勉強してくれるという三つもベネフィットがあるということで、まず学校給食という形で支援しようと決めました。

それでは、どういう形でやっているか説明します。こういうプロジェクトをやるときに、全部を自分でやろうとしてもなかなかうまくいきません。自分がすごく得意なこともあるけれども、自分が得意ではないこともあります。私たちが始めたとき、二つのことが非常に得意でした。一つは、世界には10億人の肥満の人と10億人の飢餓の人がいるといったような、グローバルな物の見方やコンセ

TABLE FOR TWO

20円の寄付金の流れは?



11

図9：20円の寄付金の流れは?

プトを作るということです。もう一つは、企業に幅広く参加してもらえるようなプログラムを考えて、企業にいろいろ相談に行くということです。私も事務局長の小暮もずっと民間企業にいたので、企業はどういうことをやったらやってくれるかということは得意だったのです。

しかし、アフリカで、あるいは今後はインドでもやりますが、世界のいろいろなところに食事をちゃんと届ける事業というのは、私たちは全く得意ではなかったのです。実際それをやるための物流や料理を作る人をたくさん抱えていたわけではありません。しかも世界中に必要なのです。そこで、パートナーを選びました。幾つかのパートナーがいますが、今一番大きいパートナーはMillennium Promiseです。学校給食を実際に世界で支給してくれるパートナーです。それから、コロンビア大学のTHE EARTH INSTITUTEという地球規模の問題を扱っている研究所が、どういう給食を出すべきなのかとか、世界のどこが本当に飢餓なのかといったいろいろなデータを集めてくれていて、ここがアカデミックなパートナーです。地域の開発と関連付ける組織として国連組織のUNDP（国連開発計画）と協力しています。この3団体とパートナーシップを組んで事業をしています。

それから、「20円で学校給食をアフリカで出せます」と言っていますが、コストはどうなっているのでしょうか。本当であれば、20円全部をその子どもの食事にあげたい、20円の食事を出してあげたいと思う方はすごく多いと思います。私たちも始めたときは、20円は全部アフリカの現地で使いたいと思って、実際にそうしていました。物を運んでくれる人やリサーチをしてくれる人など、いろいろな協力をしてくれる人たちも、最初は非常にいいことなのでお手伝いしようということでやっていたのですが、だんだん大きくなっていくと、たくさんの人が必要になって、無料では続けられなくなりました。TABLE FOR TWOという組織も、私は理事会の代表をしていて給料をもらっていませんが、そこにはスタッフがいて、その人たちはフルタイムでちゃんと働いています。最初はみんな「頑張ってやろう」と言っていたのですが、しばらくすると「私たちも食べていけないとやっていけない」ということになりました。そこで、そんな非常に高い給料ではないけれども、ちゃんと生活していける給料を出せるようにしなくてはいいけない。そうでないと本当の意味で拡大ができないということで、このパートナーシップの運営のために、20円の20%（4円）をオペレーティングコストとし、16円を本当の現地のコストとしています。実は4円ではまだ回っていないのです。ただ、もっと大きくなれば回ることが大体分かっており、今後これを15～10%に下げたいと思っています。TABLE FOR TWOは企業ではなくてNPOなのですが、経営として継続できる形を一生懸命考えています。（図9）

TABLE FOR TWOの事務局長（President）が前面に立って、ニュースレターを年に4回出しています。

本当にちゃんと給食を提供しているのか、この子たちは本当にもっと健康になったのか。実際に自分で行ってみると、やはりいろいろな問題が分かるのです。私もウガンダに行ってみました。非常に印象的だったのは、子どもたちが給食を食べた後のお皿の洗い方でした。水がたまっているところで何回も洗っているの

TABLE FOR TWO

四半期ごとに支援地域を視察、結果報告



図10：四半期ごとに支援地域を視察、結果報告

で、あまり清潔ではない。もっときれいに洗えないのかと思ったのです。

そうしたら、このプログラムを現地でやっている人が「じゃあ近藤さん、あなたがそれをきれいにするための水を持ってきてください」と言ったのです。私はよく分からなくて、「どこに水があるんですか？」と聞いたら、そこに行くのに山を40分間下りて行くのです。40分下りるのは楽なのですが、そこで皆で水をくんで、戻るときは2時間ぐらにかかるのです。それがないと、この丘の上の学校には水が来ない。料理を作るために水が必要だし、洗うためにも必要だから、どうやって水をその学校まで届けるのかという問題です。今、それをどうやって解決するかということを検討しています。

そのような状況を含めて、参加した方々にきちっと透明性がある形でご報告をしています。このニュースレターを参加しているレストランなど全部に貼っていただいています。20円のランチを食べている方がこれをちょっと見て、「自分が食べたランチの20円は、こういうふうに使われてるんだ」ということをちゃんと分かっていただいて、意味があったのだ、自分もヘルシーな食事をとって、世界の誰かも食べることができているのだ、ということが見えるように報告をしています。(図10)

なぜこういうことをしているかというと、皆さんもそういうことがあると思い

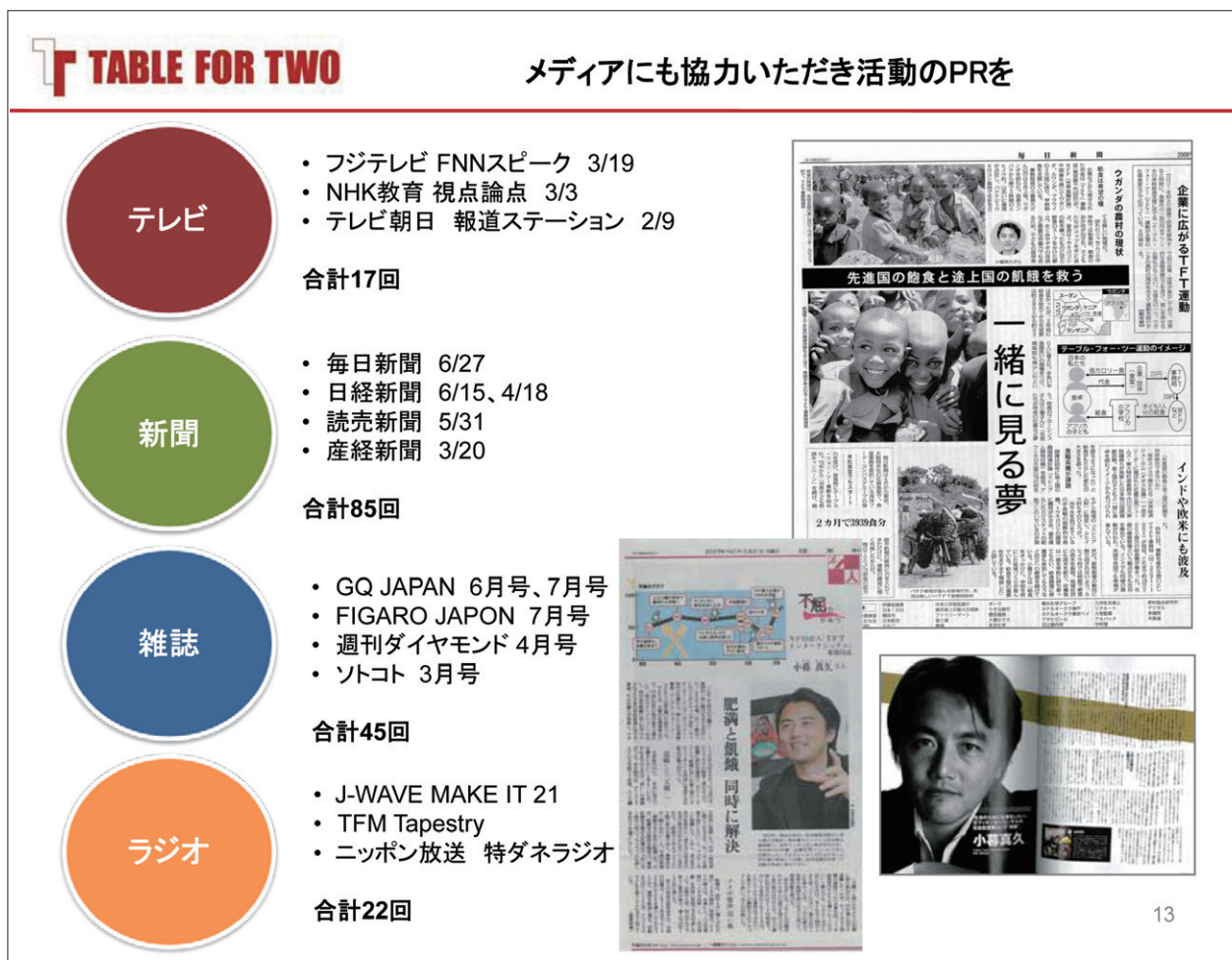


図11：メディアにも協力いただき活動のPRを

ますが、何かを寄附したときに、それがどうなったか分からない。ものすごいお金が集まりました、すごくいいことをやっていますと言われても、本当にちゃんとそのお金が行っているのかも分からないし、本当にインパクトが出ているのかも分からない。このプログラムでは、実際にスタッフをちゃんと送って、皆さんに問題点を含めてご報告しようということを最初からやっています。

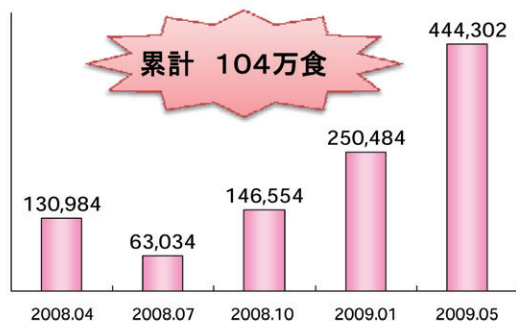
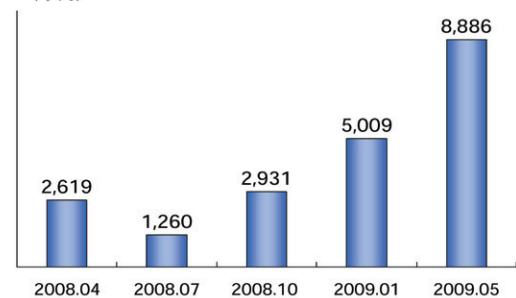
メディアがやはり非常に重要です。こういう運動を広げていくために、多くの方々に知っていただきたいし、多くの方々に参加していただきたいと思っているので、いろいろなところに取り上げていただいています。この1年間だけでも、テレビで17回ぐらい放送されました。先週もNHKという日本の一番大きなテレビ局の40分ぐらいの特集番組でTABLE FOR TWOはどういう運動なのかということで取り上げていただきました。新聞も85回、雑誌も45回、ラジオも22回ほど出ました。そういう意味では1週間に1、2回、テレビや雑誌に取材していただいています。(図11)

これまでの成果をまとめますと、150万食ぐらいが寄附されています。100万食というと、4000～5000人の学生が1年間、学校給食を食べられます。アフリカの学校はそんなに大きくないので、例えば400人の学校を10校、1年間ずっと支援できるぐらいの量です。先ほど150社を何とか1000社にしたいと申し上げ

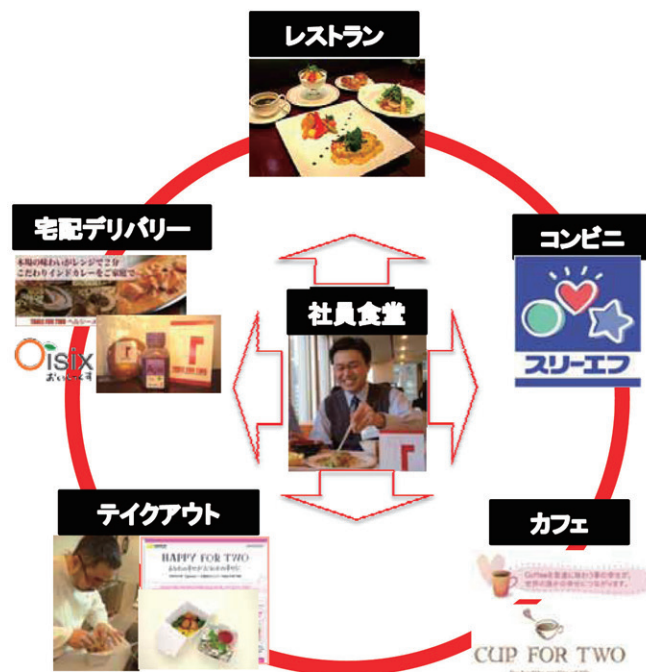
TABLE FOR TWO

これまでの活動の成果

支援給食数

支援金額
(千円)

社員食堂以外にも運動が広がる...



14

図12：これまでの活動の成果

ましたが、1000社にできると、それが10倍になるので、3年後ぐらいに1000万食（4万人分）を目標として頑張っています。支援金額も伸びています。（図12）

TABLE FOR TWOの活動の拡大

今どうやって食数を伸ばすかということにチャレンジしています。社員食堂のない会社もあるし、大学生もいつも大学で食べているわけではないので、皆さんが食べる場所全部でTABLE FOR TWOの食事を出したいと考えています。レストラン、家庭に届けるデリバリー、お店から食べ物を持ってくるテイクアウト、カフェやコンビニエンスストアなどに広げられないかということで、ほぼ全部を実験するパートナーを見つけて取り組んでいるところです。本当に広がれば、あらゆる場所で食事が出せるのではないかと期待しています。

例えば、神戸のホテルオークラというすごく古い有名なホテルのカメリアというカフェテリアで、太りたくないけれどすてきなところできちっとしたお食事が食べたいという主に女性の方々をターゲットとしたおしゃれでヘルシーな食事を

やっています。JICAというODAなどの海外経済協力をしている組織がありますが、その広尾のカフェでは、食事とドリンクを提供しています。

また、最近はインターネットで食べ物を買う人が非常に増えてきています。オイシックス（Oisix）という会社のメニューの中に、TABLE FOR TWOのロゴが付いたパンやフレッシュなジュースを出して売ってもらっています。ベーグルというパンは日本で非常に今人気がありますが、ここにはTABLE FOR TWOのベーグルとTABLE FOR TWOではないベーグルがあって、同じベーグルでもTABLE FOR TWOのベーグルの方が20円高いのです。普通に考えると、同じパンですから、安い、TABLE FOR TWOではないベーグルをみんな食べるだろうと思ったのですが、実はTABLE FOR TWOのベーグルの方がずっと売れるのです。ベストセラーの三つがTABLE FOR TWOのカレーやベーグルで、ナンバー3・4に比べて2～3倍ぐらい売れています。私もこれにはびっくりしましたが、そういうことが非常に面白いと、新聞にも「新しいタイプの消費者が生まれてきている」と書かれていました。これまでは、ただ安いものを買っていたのだけれども、何らかの形で世の中に貢献するもの、環境にいい商品を買いたい。そのために少しお金が増えても世の中のためにいいことをしたいという消費者も増えてきているということで、注目されています。

テイクアウトのお弁当は、日本ではすごく有名な三國さんというシェフに作っていただきました。ヘルシーメニューと普通のメニューがあると、普通のメニューはすごくおいしいけれどヘルシーではなくて、ヘルシーメニューはヘルシーだけれどおいしくないと思う人がとても多いのですが、「ヘルシーで、すごくおいしい食べ物ができるのだ」ということを皆さんに分かってほしいと考えました。そうすると本当においしいものを作らなくてはいけないので、おいしい食事を作ることでも有名な三國さんをお願いして、特別にTABLE FOR TWOのランチボックスを作っていただきました。これは三越というデパートで売り出していただいて、ちょっと高いお弁当なのですが、すぐに売れてしまいました。私も食べましたが、とてもおいしかったです。三國さんには、ほかのシェフとも一緒に、どうやってヘルシーでおいしいものをみんなに食べてもらうかということを考えてもらっています

最近始めたのが、陳さんの麻婆豆腐です。麻婆豆腐は日本でとても人気がある料理ですが、「陳麻婆豆腐」の中に入っているのは、豆腐ではなくておからなのです。おからはとっても栄養もあるし、ヘルシーなものなのですが、なかなか食べてもらえないので、レストランの人たちも本当にもったいないと思っていました。そこで、捨ててしまっていた非常にヘルシーなおからを使った麻婆豆腐を作ってもらいました。カロリーを通常の麻婆豆腐よりも頑張って落としてもらって、ヘルシー麻婆豆腐というのをグループ全体でやっています。これも非常に人気があって、テレビでも取り上げられました。私は麻婆豆腐がすごく好きなのですが、あまり食べると太ってしまうので、すごく心配しているのです。でも、この麻婆豆腐だったら太らないし、おからをちゃんと使えるし、かつ20円を誰かにあげられるということで、大きく広がっている例です。これだったら中国でもできますよね。

コンビニエンスストアを通して非常にたくさんの方が参加してくださっていま

す。横浜市長の中田さんに横浜市の「スリーエフ」で、いろいろなヘルシーメニューを出してもらったり、ヘルシーな飲み物のペットボトルをだしてもらったりしています。コンビニエンスストアのお弁当はあまりおいしくないものが多いのですが、三國さんにデザインしてもらいました。ヘルシーなドリンクのうち3% (4円) 寄附していただきます。日本で一つの飲み物を買ったら、アフリカで飲み物一つあげることができます。コンビニエンスストアはそれまでもヘルシーな飲み物を売っていたのですが、「これはTABLE FOR TWOの飲み物で、これを飲むと寄附できますよ」と言ったら、皆さんがそれを買ってくれて、12%売上も伸びました。お店もすごくハッピーで、もっと増やしていきましょうという相談をしています。

先ほど水の例をお話ししましたが、行ってみるとこれまで気づいていなかったことに気づきます。私たちからすると、給食代を送ったら給食を作るのではないかと思うのですが、キッチンがそもそもないのです。私たちが「キッチンで作

図13：給食室建設の支援をスタート



りましょう」と行ってみたら、「これがキッチンですか？」というような、風が吹くと倒れてしまうようなところだったのです。雨が降ると、雨がどんどん鍋の中に入ってしまっていて、衛生面で良くないし、火がなかなかつかない。すごく簡単なことなのだけれどもすごく重要だという問題がいっぱいありました。

そこで、先ほどの「何かを食べて20円を寄附する」というのとはまた別に、お金を集めて、キッチンをプレゼントするというプロジェクトを始めました。「ぼくらの給食室プレゼントプロジェクト」といっています。給食室を作ったので、これからは、お金を20円送れば、毎回ちゃんと安全で質が高い給食ができるというわけです。今年、できれば10校に給食室を作ろうということで、今一生懸命お金を集めています。(図13)

まとめ

TABLE FOR TWOの運動をどうやって広げているかということのまとめです。真ん中に社員食堂があって、そこにデリバリー、コンビニ、レストラン、テイクアウト、カフェという、みんなが食べるあらゆるところでヘルシーなものを提供していこうということです。

最初に申し上げたことで重要なのは、こういうことをどんどん広げていきたいと思いますと言うと、みんな、寄附をするためだけに広げていると思い、そこだけが注目されがちです。寄附ができることもすごくいいことなのですが、日本であれば日本人、中国であったら中国人自身が、外で食べるときにヘルシーな食べ物の選択肢があるということ自体も非常に重要です。皆さんが健康になることもすごく重要なのです。あらゆる食べるところで健康的なものを広げて、それをメディアで取り上げていただいたり、学生さんのコミュニティに応援していただいたりして、広げていきたいと思っています。

最後に一言、中国はTABLE FOR TWOとしても最も注目している国の一つです。それは、世界的な問題で中国が関係しない問題は何もありませんし、中国



図 14

で何かをしないと、世界的な問題の解決にならないと思うからです。中国の肥満問題は20年くらい前まではあまりなかったのですが、今では、アジアの中でも肥満の人が最も早く増えている国の一つです。しかも子どもの肥満が増えていると聞いているのですが、それは今後、非常に大きな問題を残すことになります。

多くの国は飢餓だけがあって肥満がないとか、またその逆の状況ですが、中国では皆さんのように都市にいらっしゃって、もしかすると肥満になってしまうかもしれない方々もいれば、場所によってはまだ栄養が完全に行き渡らない、そんなに豊かではない人もいます。中国から世界にというのがありますが、中国の国内でもこの問題を何とかすることが大切です。先ほど10億人の肥満と10億人の飢餓と申し上げましたが、肥満も飢餓も、この10億という数字が今後どうなるかというのは、中国が今後どうなるかによってもすごく影響を受けます。特に、飢餓と栄養失調はどんどん減っていますが、肥満の人が世界でこれからどれくらい増えるかというのは、中国人がどれだけ肥満になるかということにすごく影響を受けることだと思うのです。

さらに、食自体が非常に足りなくなってきました。海から魚がいなくなっているとか、水がそもそもなくなっているとか、いろいろな食の問題が取り上げられていますが、中国の方々が太るまで本当にいっぱい食べてしまうと、中国人にとっても食べ物が足りなくなってくるし、世界の人にとっても足りなくなってきました。それでみんなハッピーになるならいいのですが、それによって中国人の健康も悪くなってしまいます。世界的にも中国をどうするかというのは興味を持っているところです。TABLE FOR TWO的な考え方や、世界の両方の問題を同時に解決しようという考え方、あるいはそれをどうやって広めていくかということで、皆さんのアイデアをいただければありがたいと思います。

講師略歴

■ 近藤正晃ジェームス【こんどう まさあきら じえーむす】

【現職】

特定非営利活動法人TABLE FOR TWO International 共同代表理事

特定非営利活動法人 日本医療政策機構 副代表理事 兼 事務局長

東京大学先端科学技術研究センター 特任准教授

【略歴】1990年慶応義塾大学経済学部卒。1997年ハーバード・ビジネス・スクール修了。

マッキンゼー・アンド・カンパニーにおいて、世界各国の支社で15年間、政府の経済政策および国際企業のグローバル戦略を立案。2003年より東京大学医療政策人材養成講座の設立・運営に関わる。2004年、特定非営利活動法人日本医療政策機構を共同設立。2005年ダボス会議ヤンググローバルリーダーに選出される。各国のリーダー達と共にTABLE FOR TWOの構想を固め、2007年、特定非営利活動法人TABLE FOR TWO Internationalを設立。現在に至る。

質疑応答

北京

司会：孫 建軍

北京大学外国語学院
日本言語文化学部助教授、
SGRA 会員



司会 先生、ありがとうございました。最後のところで逆に先生から皆さんに課題をいただきましたが、いろいろな食に関する問題、あるいはこれから飢餓と肥満のバランスをどういうふうに解決していくのか、TABLE FOR TWOはまさに中国国内の大きな課題ではないかと思います。

では、皆さんから何か質問をしていただきますが、自分の所属の大学も言ってください。今日は、北京外大、日本学研究センター、東北師範大学、北京第二外大、浙江省の大学からも、先生の講演を聞きに来てくださっているようです。どんどん手を挙げて質問をしてください。中国語でも大丈夫です。

Q 1 北京外国語大学の大学院生です。今日、先生の素晴らしい講演を聞かせていただいて、どうもありがとうございました。先ほどから先生の非常に健康で元気な姿を見ていて、普段からヘルシーな食事をなさっているのだろう、もしかするとTABLE FOR TWOのおかげではないかと思いました。もしよろしければ、先生の普段の食事のメニューを教えていただけないでしょうか。

近藤 とんでもありません。そんなヘルシーなものを食べているわけではないのです。でも面白いのは、この運動を始めたとき、実はちょっと太っていたのです。

アメリカのエール大学に半年間いたのですが、アメリカはすごく食べ物が多いので、自分としてはあまり食べているつもりではなかったのですが、すごく食べてしまっていました。アメリカ人はもっと太っているのに、自分はやせているつもりで帰ってきたのですが、TABLE FOR TWOの集まりに行ったら「あなた、しばらく外に行かないでください。TABLE FOR TWOにあなたのような太った方がいると良くない」ということで、毎日走るようにスタッフに言われました。しばらく走って、体重を3~4キロ落として、また普通の姿になりました。

私自身も苦労しているので、生活習慣をちゃんと守って良くするということはやはり大変なことだと思うのです。特に年を取ってきた方は本当に大変です。私自身も甘いものが大好きなので、いつも気を付けています。

Q 2 日本学研究センターの学生ですが、先生にお聞きしたいことがあります。中国は発展途上国で貧乏な地域がまだたくさんあります。先生は、どのように中国でこのプロジェクトを広げたいと思いますか。中国はこのプロジェクトの中で、お金を出す役割を果たすのか、あるいはお金を受ける役割を果たすのでしょうか。

近藤 すごく重要なご質問です。私は、中国はそれが両方できる初めての国なのではないかと思います。お金も出せるし、支援も受けられる国ということです。実は先週のサマーダボスには皆さんの政府の代表者の方々が集まっていたのですが、その会場の中にこのTABLE FOR TWOのポスターを張っていただきました。中国のお金持ちの方というのは本当にお金持ちで、日本のお金持ちとは違うなとびっくりしたのですけれども、そういう大きな企業で、事業が非常に伸びている方々にも、寄附する側として参加していただきたいと思いますし、逆に、寄附をする先の学校もあるでしょう。

ただ、私は中国の貧しい地域でどうやったら給食を出せるかというのはあまりよく分からないのです。やりたいとすごく思うのですが、どうすれば一番効率的で、意味があって、どの地域から始めるべきなのかとかということは、皆さん方にいろいろ教えていただかなくてはならないのです。中国で両方できれば本当に素晴らしいと思うし、中国で活動できるというのは私たちにとってはすごく大きいステップですので、両方ぜひやっていただきたいと思います。

企業側の方とはある程度話をしているし、もっと話をしなくてはいけないのですが、特に私が重要だと思っているのは、中国の貧しい地域において本当にいい形でこれを継続してできる仕組みを考えることです。何かいい方法があったら後でまた教えてください。中国で立ち上げられたら本当に素晴らしいなと思っています。

司会 皆さんも、中国政府を動かすということではなく、自分が中国人としてどうすればいいかを考えてください。先生のプロジェクトにかかわって、自分のアイデアを出せれば、新しいバージョンが作れるかもしれないということです。

Q 3 日本学研究センターの学生です。先生のこういう講演を聞いて、いろいろ考え

させられました。そして一つ疑問を持っています。

先ほどの寄附金のことですが、お金を出して、そのお金をどういうふうに使ったかということは皆が関心を持っていることだと思います。先生が先ほどおっしゃった中で、4円は事務所の費用に使って、16円は子どもたちに食料を出し、新聞を発行して寄附した人に見せているということでした。でも、本当にそうでしょうか。中国では残念なことに、去年の四川の大地震でたくさんのお金が寄附されましたが、後で調べてみると、100人ぐらいはお金を自分のお財布の中に入れてしまっていました。このプロジェクトでは、自分で「私は16円出した」と言うのではなくて、第三者に財務報告などを審査してもらうことがありますか。

近藤 それもすごく重要なご質問です。今は、独立した監事を置いています。私たちの活動には、いろいろな人が間にいるのです。私たちもちろんその一部です。例えば、先ほどのコロンビア大学もありますし、Millennium Promiseもあるし、現地のスタッフもいれば、農家から食材を仕入れている方もいます。その方々全員が、お金をポケットに入れるチャンスを持ち得る人でしょうし、例えば5%のお金をチャージしているときに、本当は5%ではなくて2%でできるのか、本当に5%が適切なのかというのは非常に大きな問題だと思うのです。そこで、TABLE FOR TWOも監査役を置いています。それから、Millennium Promiseに、私たちのプロジェクトだけではなく、全体のプロジェクトを監査するためだけの人を置いています。ただ、そういう人自身が、もしも誰かからお金をもらっていたら、その人が本当のことを言っていないかもしれないということがあります。

こういう問題で私がすごく思うのは、バランスがすごく難しいということです。人を完全に信用して完全に任せてしまえば、それを監査するお金はかかりません。しかし、もしかしたらそこで不正が起こるかもしれません。一方で、私たちが今やっていることはむしろ厳しすぎるかもしれない。人を信用せずにすべての領収書をチェックして、一人ずつ検査をし続けるとしたら、たくさんの人件費がかかりますし、信頼感がなくなっていくます。例えば誰かが「5%でできます」と言っているのを、私が「いや、本当は2%でできるんじゃないか」と領収書を全部チェックしていたら、信用関係も薄らいでいきます。

コストという意味でも、本当の安全という意味でも、そのバランスをどう見極めるかということが課題ですが、はっきりしているのは、そういうことをチェックするだけですごく無駄が減ってきます。今は20%取っているのを15%くらいに持っていきたくないと申し上げましたが、日本では、本部の事務所や現地のスタッフに寄附の50%くらいを使っている組織がたくさんあるのです。もっと使っている組織もあるかもしれません。だから寄附している人は、途上国に送っていると思っているのだけれど、東京の素晴らしい事務所を維持するために、もしくは北京の素晴らしい事務所で誰かに給料を払うためにお金が使われているということはよくあります。そういうものをなくすためには、私たちも頑張って、独立した監事に入ってもらっています。どの程度やればいいのかという答えはまだ見つかっていません。本当はもう少し減らしたいと思っているのですが、でも、やり続けないと駄目なのかなとも思います。すごく重要なことです。

司会 今の質問はとても良かったと思います。あなたは日本学研究センターの方で、先生のやっている事業も含めた日本におけるNPOの研究をすると立派な日本学研究ができますし、その経験を中国に生かしていくことができます。

Q 4 北京外国語大学で勉強している日本人です。中国でこうした素晴らしい講演を聞いて、大変有意義な時間を過ごせたと思っています。本当にありがとうございました。

TABLE FOR TWOのことは、この講演を聞いて初めて知りました。これだけメディアで報道されていたり、いろいろなところで講演されたりして、結構有名なはずなのですが、なぜ自分はここで初めて知ったのかと考えてみました。当然のことながら海外の生活が多いので、日本とのかかわり合いが少なく、そういうことも要因の一つかと思ったのですが、別の理由もあるかもしれません。TABLE FOR TWOがかかわっているのはレストランやカフェ、お弁当など、既に出来上がった食事なのです。日本に帰ったとき私がどこで食事をするかというと、やはり家が中心になります。母親が、ニンジンなりピーマンなりを一から料理して作ったものを食べるわけで、そこにはTABLE FOR TWOがかかわってないので、知ることができなかったのだと思うのです。それで、私の家では生協から野菜を取ったりしていますが、ほかの家だったらスーパーで買い物したりするので、TABLE FOR TWOがスーパーや生協と提携するということは、考えられていないのでしょうか。

もう一つ、このプレゼンテーションではいいところは知ることができましたが、何か困っていることや問題点があれば、そういうことも教えていただけると幸いです。

近藤 スーパーはやりたいと思って、いろいろなところと話をしています。おっしゃるとおり、ほとんどの人は家で食べることが多いので、そこを何とかしたいと思っています。

2番目の質問の、私たちが今困っていることにも関係することですが、例えばスーパーですごく健康的な豆腐があります。「これがTABLE FOR TWOだ」と私たちが言ったとします。それを買っていったのだけれども、ほかには、おやつとアイスクリームといろいろなものを食べて、実はその人はものすごくカロリーを取っているかもしれない。そういう意味では、1個の食品をヘルシーにしても、その人の1食がヘルシーになっているかどうかは保証できないわけです。

どうしたら「ヘルシーな商品を1個食べているということ」ではなく、「本当にヘルシーな食事をしているということ」が約束できるのかと、スーパーの方から聞かれています。山のように買った中に1個ヘルシーなものが入っていたら、その人はTABLE FOR TWOに参加していると言えるのか。あるいは、同じように山のように買っていても、ある人は1週間分買っているのかもしれないし、ある人はそれを1日で食べようと思っている人かもしれないし、その辺りを今議論していることです。

問題点はたくさんあります。私自身が最も難しいと思う問題点の一つは、私に

としてはライフワーク的に大きい問題ですが、「すべての問題を政府が解決してくれると思って、自分で何かをやる人がとても少ないという状況」をすごく変えたいと思っているのです。TABLE FOR TWOというのは、そもそも私が政府と仕事をやって限界を感じて、そうでないことに取り組んでみたいということで始めました。こういう運動を私がやって、いろいろな企業に協力してくださいとか、先ほどのキッチンのプロジェクトに寄附してくださいと言うと、非常にお金を持っている方でも「そんなのは政府がやればいい」とおっしゃる方が多いのです。中国の貧しい地域での食事を出しましょうとか、栄養が足りない人がいるからどうかしましょうと言うと、「なぜ政府がそれをやらないんだ」ということがよく議論されて、「私ができることをやりましょう」とはなかなかならない。

しかし今、日本は中国と違って経済が20年間ほど伸びていなくて、すごく借金をしている国なので、政府にそんなことをやるお金がないのです。アフリカやインドの飢餓の人たちを救ってあげられるだけのお金を日本が全部出すことはもはやできない。そういうことを分かっている人が「政府がやればいい」と言うことは、結局は「何もしない」ということを意味するのです。

だから、小さいことでもみんなができることをやりたいのですが、それをどうやればいいのか。このTABLE FOR TWOという運動は、そういうことをやる一つのきっかけにしたいと思って、みんなができるだけ参加しやすいメカニズムを作っているつもりですが、もっと広がらなくてははいけません。TABLE FOR TWOを中国でやるときは、ぜひここにいらっしゃっている方々に連絡して応援していただきたいのですが、TABLE FOR TWOでなくてもいいと思うのです。環境問題でもそうですし、水の問題でも何の問題でもいいのです。何か問題があったときに、政府への提言もすごく重要です、政府がやらないとできないことも多いけれど、どうすれば自分たちでできる継続的な広がりのある運動を起こせるのか、どうやれば皆が参加できるのか、あるいは自然に広がっていくのか、ある意味では私の最大のチャレンジです。

誰かに相談に行った時に「政府がやればいい」、「私は寄付はしない」という言葉が出る。根っこには多分、今、世界にはいろいろな問題があって、みんなで取り組まなければいけないのだけれども、それを誰かが解いてくれると思っている。実際は誰も解いてないし、解いてないから今こんなに問題が多くあるのです。それで一番困るのは若い人たちです。これからの世界を生き、また作っていく人たちなので、その人たちに何かに取り組んでほしいということが、一番変えたいことです。もしかすると私は年を取りすぎてしまっていて変わりきれないし、変わるところが全く見られないので、皆さんに是非やっていただきたいと思います。

司会 今、先生がおっしゃった内容は、SGRA の目指しているところでもありますし、皆さん、SGRA のことも応援してください。

近藤 SGRA もぜひ応援してください。私を呼んでくださったのはSGRAの方です。

Q 5 近藤先生、ありがとうございます。北京第二外国語学院から参りました。私の

専攻はフランス語です。大学を受験する際に、専攻を日本語ではなくフランス語を選んでしまったことに対して現在ちょっと後悔しています。

私の両親は現在、健康と保健食品の会社に勤めていて、その会社も慈善事業に非常に興味を持っています。その会社の製品は少し特別なもので、日常の飲食とはあまり関係がないのですが、TFT（TABLE FOR TWO）は日常の飲食に非常に関係のあるものです。ですから企業にこのTFTを広める場合に、TFTが企業にどのような利益をもたらすことができるかということが企業にとっての一番の関心事ではないかと思います。

近藤 いただいた質問は、私の理解だと、TABLE FOR TWOを広めるために企業にとってのメリットをどう考えるかというご質問だったと思います。企業というのは、社員食堂でTFTに参加している企業ではなくて、実際に商品を持っている企業にとってどういうメリットがあるかというご質問ですか。

Q 6 例えば企業のイメージアップや企業の社会貢献度など、そういうところです。

近藤 企業にとって三つのことが非常に重要だと考えています。今、日本で起きている一番重要なことは従業員の健康です。ニュースでご覧になった方がいらっしゃるかどうか分かりませんが、日本ではメタボ（メタボリックシンドローム）という、ウエストがちょっと太い人が、内臓に脂肪が多いためにいろいろな生活習慣病が起きることが問題になっています。40歳以上の日本人は全員、毎年健康診断を受けて、メタボの人は何らかの指導を受けないといけなくなったのです。今、メタボというのはすごく恥ずかしいことです。毎年の健康診断で「あなたはメタボ」と言われないように、何とかみんな頑張るのです。メタボを減らすことによって健康な従業員が増えるというのが1番です。

2番目に大きいのは、今、大体の企業で社会貢献レポート（CSRレポート）を毎年出しています。この会社ではどういう社会貢献をしているかということに関心を持っている方々が多くて、このレポートに書ける、ある意味では本当に取り組んでいる活動として、このTABLE FOR TWOがあります。この活動のメカニズムを見ていただくと分かるのですが、実は企業は1円も出してない場合も多いです。社員食堂で健康的なメニューを並べて、社員が20円を払えば、企業は1円も払わないのにみんなが健康になってくれて、この企業ではこの運動に取り組んでいると言えます。企業にとって「得」な運動です。

3番目に、企業によっては無料で広報できるという面もあります。TABLE FOR TWOの取り組みがマスメディアで取り上げられ、企業名が知られ、好感度、信頼が向上するということです。

最後に、健康食品をやってらっしゃるとおっしゃったので一つ申し上げますと、この事業を実際にやることに本業が貢献できる会社も幾つかあります。例えばIBMはウェブページを作ったり、何らかのデータベースを管理したりするということに、コンピューターの面で支援しています。あるいは健康食をやってるところがTABLE FOR TWOに食材を何らかの形で協力をするといったよ

うに、さまざまな協力の形があります。ぜひご両親の会社にも入っていただいて、中国に広めていただければと思います。

Q 7 私は北京市の一般市民ですが、この講演に対し、非常に関心を持っています。ですから今日ここに参りました。飢えた子どもたちに対して行った活動に感謝しています。

私が聞きたいことは、このような援助を行っているときに、この寄附金は現地の政府を通して寄附したのか、TFTの方で、寄附金が現地の政府に悪用されたり、ほかのところに使われたりしないようにすることを、どのように保証できるのかということです。

近藤 開発援助分野では、開発途上国の中央政府と地方政府が、政府自身として、または、そこにかかわっている個人として不正に取ってしまっているお金が多いといわれています。いろいろな推計がありますが、少ない額ではなく、かなりの額がそういうことでなくなっているのではないかという議論があるのはおっしゃるとおりです。

私たちは今、現地の政府を通してはいませんが、現地の政府の協力は必要なので、国際機関に一部入っていただいています。国際機関に入ってもらうことは、現地の政府との調整をするために必要なのですが、お金の流れでは、現地の政府を通していません。紛争地域では非常に難しいので活動しないと申し上げた理由の一つは、紛争地域になると、出入りをするときに政府のコントロールが入るので、政府を通さずに何かのプログラムをやるということ自体が無理になるのです。また、入った後でも紛争地域ですと、何が実施されているかという記録をきちんと取ることが難しくなるからです。

多分、今後もよほど状況が確かだと分からない限りは、特に貧しい地域では政府を通してお金を支給することはやらないと思います。もう少し申し上げますと、TABLE FOR TWOが支援している学校ではありませんが、実は私が行ったウガンダの学校に政府によって運営されているものがありました。そこで働いている方は政府の職員ですが、先生は1週間の半分くらいしか来ないのです。行く前は、「ひどい先生だ。学校の先生なのに1週間の半分しか顔を出さないなんて、とんでもない。」と思っていたのですが、行ったら、ほとんど給料が払われていなかったのです。だからその人は、週の半分は外でアルバイトをして、家庭教師などで何とかお金を稼いで、学校ではほぼボランティアで教えていたのです。行くまではひどい人だと思っていたけれど、行って話を聞いたら、この人は本当に素晴らしい人でした。誰か上の人がそのお金を取っているから給料をもらっていないわけです。

ただ、やはり20円を出してくださった方のことを考えると、私たちはそのお金がきちっと流れる方法を取らざるを得ないので、今は政府を通していませんし、多くのところではまだそれはできないのではないかと考えています。

Q 8 先生の説得力に、すごく感心します。疑問ではなくて、アドバイスです。今は

食堂など、食事と関係ある組織と協力して寄附していますが、ヘルシーな食事だけでなく「ヘルシーな生活を過ごしましょう」というテーマにすれば、食事に関係ある組織だけではなくて、もっと多くの組織と協力できるようになって、もっといいのではないのでしょうか。

私の経験によると、ホテルやジムやお風呂、特にパチンコです。今の若者は遊んでいますよね。だからパチンコの方から20円くらいを寄附してもらったらどうでしょうか。あるいは日本のお年寄りには、毎日お風呂屋さんに通っている人がたくさんいますよね。そういう方と相談して、貧困の地域の人たちのために何かしていただいたらいいのではないですか。ヘルシーな生活をしたいという人たちは、ジムに行っているいろいろ鍛えています。そこから何かすることができるのではないのでしょうか。

近藤 ありがとうございます。貴重なアドバイスをちょうだいしたので、宿題として取り組みたいと思います。パチンコがヘルシーかということについては、私は疑問があるのですが、趣旨はすごく分かりました。

今のご質問は、私にとっては重要なテーマです。TABLE FOR TWOを「食」で始めたのは、最初に申し上げたように、自分が大学生のときに食の問題にすごく興味を持ったからです。なおかつ10億人・10億人という問題もあるし、みんなが社会的なことに取り組むきっかけを作るという意味で、みんなが食べるし、食べることは好きだし、必ず継続するので、食は入り口としてはすごくいいと思ったのです。

ただ、今おっしゃったように、食だけにこだわる必要もないし、もっと広がりがある発想だと思っています。今おっしゃったような領域もそうですし、例えば、気候変動、環境問題も全く同じ構図です。多くの先進国では一人当たりものすごい量のCO2を出していて、いろいろな問題が起きています。一方、貧しい国ではそもそもCO2は出ていないのだけれども、開発を欲しています。CO2が出ないけれども開発がないというところもあれば、開発によって公害で困っているところもあります。構図としては同じなので、環境もやりたいと思っています。

ただ、私の限られた能力と時間ではパチンコ屋までは取り組めないかもしれないので(笑)、ジムくらいまでは頑張りますが、パチンコ屋などはぜひ皆さんにやっていただきたいと思います。いろいろな分野で多くの人に取り組んでもらい、いろいろなアイデアを実行に移すことがすごく重要だと思うので、ぜひ新しいモデルを皆さんに取り組んでいただきたいです。私ができることはちゃんと取り組んでいきたいと思っています。

司会 最後の質問で、先生にアドバイスが出ましたが、今日の講演の副題は「今、私たち若者に何ができるのか」というテーマになっていますね。自分に何ができるのか、もう一回、皆さん、考えてください。先生に大きな拍手をお願いします。

上海

司会：範 建亭

上海財経大学
国際工商管理学院准教授、
SGRA 研究員

Q 1 世界経済コース M1 の者です。すごく興味深く近藤先生のご講演を聞かせていただきました。ご講演の中で、TFTのプロジェクトは日本では主として学校や会社の社員食堂で行っているとおっしゃいましたが、中国の場合、社員食堂というより、むしろ料理店でこのプロジェクトを広める方がやり易いのではないのでしょうか。というのは、中国の料理店は消費過多だと思っているからです。料理店は、お客さんにたくさん召し上がっていただきたいし、お客さんは、皆が食べきれないほど、余るようにたくさん注文するのが習慣です。また、中国でこのようなプロジェクトを広めるのは、少し難しいと思っていることがあります。もし料理店でこのプロジェクトを広める場合、まず考えなければならない問題があります。まず、シェフはカロリーの高い料理を低カロリー化しなければなりません。またせっかく作りあげた料理がどれほど消費者に買ってもらえるかも問題です。これらの問題について先生のご意見をお願いします。

近藤 貴重なアドバイスをありがとうございます。飲食店を中心にTFTを展開するというご意見をぜひ参考にさせていただきます。まず一つ目の問題ですが、確かに飲食店では食事の量を多めにお客さんに提供する習慣が日本にも多くあります。しかしながら、最近では、多くの中高年の男性が生活習慣病のために、食事の量を減らすようになってきています。また女性がどんどん社会に進出していますが、多くの方が、食べ過ぎないようにカロリーの摂取量に注意しています。このような食生活に配慮する傾向は世界的に高まっていますので、ぜひ中国の方々にも食生活の管理をしていただきたいと思います。二つ目の問題ですが、確かにあったように、メニューについてはいろいろと工夫が必要です。今はTFTに参加するシェフたちのウェブページがあり、TFTメニューを全て掲載し、参考

になるような人気メニューのデータベースを公開しています。例えば、非常に人気のあったメニューの例として「美肌ラーメン」があげられます。本当はラーメンを食べたいけれども、カロリーが高いので控える、という女性が多くいます。ある社員食堂で、「美肌ラーメン」というラーメンを作り、カロリーを低くする一方でコラーゲンを入れたところ、ヘルシーで肌もきれいになるということで、特に女性に人気だそうです。普通はレストラン間の競争のために、メニューはほとんど公開されていませんが、TFTでは健康のためにこうした情報共有がなされています。もし何かいいアイデアがありましたら、ぜひ教えてください。

Q 2 外国語学院の四年生です。すばらしいご講演を聞かせていただきまして、ありがとうございます。今、TFTプロジェクトのコアメンバーは何人ですか。ご講演の中で、コアメンバーたちは比較的安い給料をもらっているというお話しでしたが、彼らのやる気はどこからくるのでしょうか。

近藤 私は代表理事で執行の役はなく、給料をもらいませんが、他の執行コアメンバーにはきちんと支払っています。フルタイムで働いているコアメンバー、つまり給料をもらっている人は、今東京に3人います。給料をもらわない人たち、つまりボランティアは250人程います。例えば小暮事務局長は、もともと私の同僚で、前の会社では給料は何倍も高かったです。そこを辞めてTFTに来たのはどうしてでしょうか。僕の考えでは、ハッピーに仕事をするためには、二つの条件があります。一つは自分の自信を持てるものがあること、もう一つはその自信を持てる何かで人の役に立つことができることです。その二つがあると、大体の人がハッピーになると思います。そのどちらかが欠けても、人はハッピーにならないと思います。もちろんお金をもらえとか、ステータスがあるとかいろんな価値があります。TFTは新しい仕組みです。新しい自分の工夫が人に評価されることで、彼らは給料が下がっても、ハッピーになれるのではないのでしょうか。先ほど申し上げたように、僕はビジネススクールに行きましたが、僕の年では、4割の人がコンサルティング会社、4割の人が投資銀行に行きました。両方とも非常に給料がいい職場です。しかし、本当にその仕事が好きでない人は、どんなにお金があっても、どこかでアンハッピーになります。そういう意味では、お金があったほうがいいですけれども、やっぱりやりがいが一番だと思います。

Q 3 私が会う社長さんたちは、お金を儲けることに熱中している人ばかりです。そういう人たちにどう説明しようかという時に、ご講演の中で印象に残ったことが3つあります。一つ目は、例えばGMでは、会社員の医療費を会社が負担し、社員が健康になることが会社のコストを下げることに繋がるということです。二つ目は会社のマーケティング、ブランド戦略ということがありました。消費者が商品を、従業員が働く場所を選ぶ時に、社会のためになることをしているということは、消費者にとっても従業員にとっても非常に重要です。そういうことにどれだけ貢献できるか、ということです。三番目には、どうしても説得できない相手には、TFTは寄附を従業員が負担しているため、会社が出費せずに、社員

たちが健康になり、且つ社会にいいことをしているというイメージも得られるというメリットがある、と説明していることです。

最後に質問しますが、上海での講演は初めてですね。どうして復旦大学ではなく財經大学を選んだのですか。この大学の学生たちは経済を勉強しているのでケチです。近藤先生はどうやって、このようなケチの人たちも TFT に参加するように説得しますか。

■ 近藤 本当はケチであればあるほど、経済の問題を真剣に考えます。例えば環境保護の問題、医療の問題を考える時にも、環境保護のコスト、医療のコストを解決しなければなりません。ケチであるからこそ今のように小さいステップから始めるということが大変重要だと思いますので、もし財經大学の学生さんたちが皆ケチということでしたら、今回は来てよかったと思います。

■ Q 4 僕は財經大学日本語学科の4年生です。先生は、最初どうしてインドや中国ではなく、アフリカを選びましたか。先生は多分中国の北京と上海の他にまだ行っていないと思いますが、例えば中国の山の中にはアフリカと同じぐらい貧乏なところがあると思います。先生はどういうお考えですか。

■ 近藤 とても重要な問題だと思いますし、実はこの活動を始める前はかなり議論がありました。私達が興味を持っているいくつかの指標に基づいてアフリカを選びました。食事と健康は深い関係があり、栄養不良は健康指標の一つです。その他の健康指標として、例えば、水がなくて困っている子供たちの比率とか、5歳未満の子供たちがどれぐらい死んでしまうかというような指標を使いました。これらの指標から見て、やはりアフリカの方が圧倒的に問題が多いことがわかりましたので、アフリカからスタートしました。ただ、おっしゃったように、インドも中国も大きな国ですし、国内に栄養不良＝お金のない人と、肥満＝お金をたくさん持っている人が存在するということがアフリカと全く違います。やはり中国らしいやり方をしないと成功しないと思いますので、皆さんに注目していただいて、アドバイスを頂き、中国でも運動を広げたいと思います。

■ Q 5 国際貿易コースの2年生です。質問ではなくアドバイスをいくつか述べさせていただきたいです。まずは、会社でTFTを進めるために、社員が健康になるのがメリットということですが、具体的なデータで説得した方がいいと思います。次に、寄附された20円の流れについても具体的な報告書がほしいです。また、一人一人の消費者だけでなく企業の力が必要ですので、企業に対してより詳しい報告書を出した方がいいです。それに、中国人は愛国精神に関心をもっているのです、TFTを中国で進める場合は、肥満を抑えるというメリットを進める一方、貧しい子供を助けるということは愛国精神の一つだと説明したらもっと説得力が高まるのではないのでしょうか。最後に、20円は日本人にとって一回の食事代の25分の1になっているかもしれないですが、中国では、一回の食事代の4分の1になってしまうので、TFTを中国のような発展途上国でやるより、まず先進国

で広めた方がより展開し易いのではないのでしょうか。

最後に一つ質問ですが、20円というのは他の同類の商品より20円高くなるのですか、それとも他の商品と同じ値段で、そこから20円を引くという形ですか。

近藤 前者です。今いただいたアドバイスは参考にします。ありがとうございます。

Q 6 私は13年前に財経大学で勉強したことがあって、今は公益関係の仕事をしています。TFTには非常に興味を持っています。一つ聞きたいのは、20円の寄附の中から運営コスト4円をとりますが、それでTFTの運営に足りますか。もし足りなかったら、例えばTFTをより速く広めたい場合に、その足りない部分のお金はどこからもらうのですか。

近藤 経済関係の方ならではのご質問だと思います。4円の運営コストでは、現在の規模では、運営費の2割程度しか集まりません。しかし、TFTの規模が大きくなればなるほど、運営費も増えます。実は最初の2年間、運営費の不足分は理事の方々から寄附をいただいていた。3年間経ったら寄附がいなくなり、自立運営になると説明をしました。このような形で運営しています。

Q 7 近藤先生はハーバード大学のビジネススクールを卒業されています。それでは、当初TFTを設立する時に、NPOではなく社会企業の形で進めて、社会企業で得られた利潤でTFTの運営を保障するというように考えたことがありますか。特にTFTは食品にすごく関係ありますので、社会企業でしたら、例えば食材の配送とか、メニューのデザインとかいろいろTFTに役立つことができます。これらは全部利潤を得られます。どうしてNPOの形を取ったのですか。また、TFTの規模が大きくなった時、TFTのもとで何か社会企業を設立する考えがありますか。ご存じのように、NPOが寄付を募ることがますます困難になりますから。

近藤 すごく重要な質問です。私達がNPOを選んだ理由は二つありました。一つは、最初の3年間は寄附が必要だったのですが、もし社会企業にしたら、彼らは株主になります。私達はある特定の株主のためではなく、もっと広い、つまりPUBLICのために、公益活動をやりたかったのです。例えばもし私も投資したら、私のための会社になってしまうので、NPOを選びました。ただ、将来TFTをもっと広めるために、TFTの下で社会企業を設立することに反対する理由はありません。十分、検討に値すると思います。

Q 8 一つ補足したいのですが、私が言っている社会企業がその利益をTFTの運営にだけ使うのでしたら、近藤先生の趣旨とは矛盾していないと思いますが、先生はどうお考えですか。

近藤 おっしゃるとおりです。ただ、現実的には株主たちが登場するので、社会企業

を運営するにはその株主たちの意向が働きますから、私としては、設立当時はそうしなかった。でもおっしゃるように、社会企業の形で完璧に両立することもできるはずです。むしろこれからはそういうような社会企業が増えると思います。

Q 9 TFTが肥満と飢餓という二つの問題を同時に解決していることに感心しました。今社会にはこの二つの問題を別々に解決する組織はたくさんあります。TFTが具体的に問題を解決するのではなく、これらの組織と連携することによって、彼らの力を借りて二つの問題を同時に解決できるよう、力を入れるおつもりはありますか。例えば、現地の給食室設備の問題とか、メニュー作りなどの問題は、もっと専門的な組織の力でやってもらうのはどうですか。

近藤 すごく良い質問です。やはり何かをやる時に、自分の強みを生かすのが一番大事だと思います。ただ、現実的にはこういう専門的な組織はまだまだ少ないと思います。例えば学校給食において、低カロリーというのはどれぐらいのカロリーか、などということは科学的な数値が必要です。これらのことは、今はTFTが監督しています。

Q 10 今は貧しい子供たちの食糧問題に力を入れている組織がたくさんありますが、TFTはこれらの組織と連携するつもりがありますか。

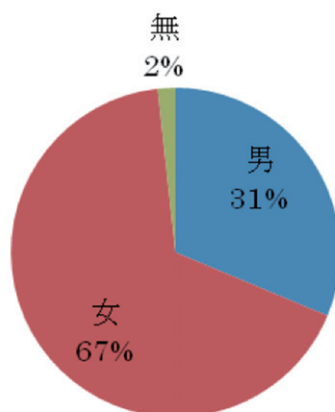
近藤 はい、連絡をとっています。例えばウガンダで学校給食の支援をする際に、アメリカの食糧問題に取り組んでいる組織に一人一食16円を支給して、学校給食の給付を担当してもらっています。

司会 残念ながら、時間がきましたので、近藤先生のご講演はここでお開きにしたいと思います。もしまた質問がありましたら、講演の後で先生と個人的に交流してください。先生、ありがとうございました。

アンケート

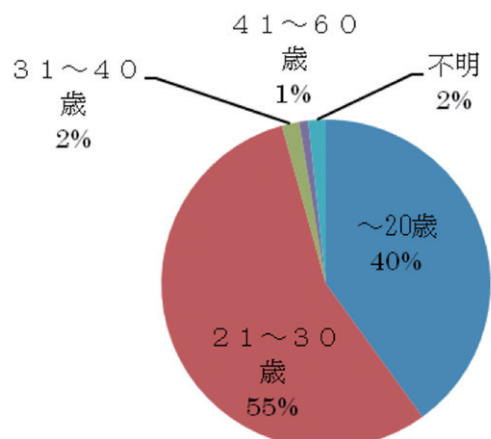
回答者の性別

男	36
女	77
無	2



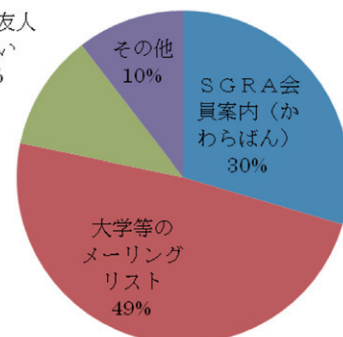
回答者の年齢

～20歳	46
21～30歳	64
31～40歳	2
41～60歳	1
不明	2



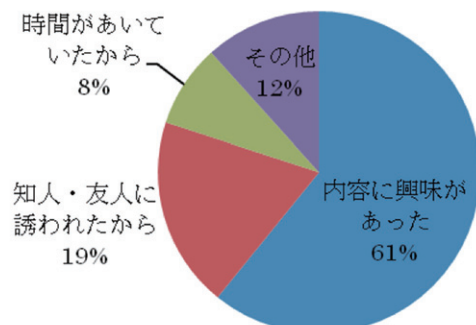
(1) 今回のフォーラムを何でお知りになりましたか。

SGRA会員案内（かわらばん）	34	知人・友人の誘い 11%
大学等のメーリングリスト	56	
知人・友人の誘い	13	
その他	12	



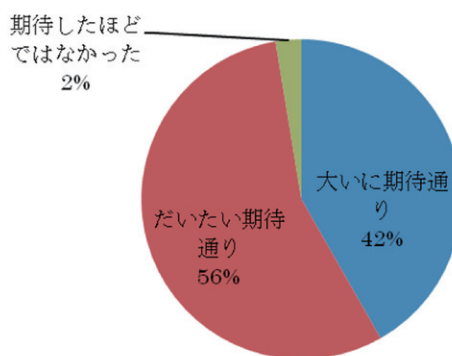
(2) あなたは、何故このフォーラムに参加しましたか？

内容に興味があった	73
知人・友人に誘われたから	23
時間があいていたから	10
その他	14
*重複あり	



(3) このフォーラムは期待通りでしたか？

大いに期待通り 48
 だいたい期待通り 64
 期待したほどではなかった 3



日本で話題になっていることとささやかなことでありながらも他人にとって力になれること

公益事業に関して新鮮な発想を知った

NPOを知った

TFT プロジェクトに大賛成；できればこの事業に参加したい

自分の考えている問題はもう日本でやっていることは、感服

生の日本語と SGRA の活動を知った

観点は新鮮；金銭のためのほかに、社会に対する責任も重視すべき

青年の就職選択及び世界問題を知った

日本の NPO のような組織を中国でやりたい

いろいろ考えさせられた

有意義な課題である

NPO 組織を運営する知恵を近藤先生の講演で知った

肥満と貧困問題を一緒に解決できるなんてすごい

うまく運営できるかどうかちょっと心配

公益活動のすばらしさを実感した

オリジナリティのある発想

中国でやりたい

美しい発想を実際の企業にさせる力に感心

世界問題を知った

NPO の運営システム

うまく理解できないところもある

社会企業の責任とボランティアの価値を実感した

公益活動を知った

TFT を通して世界の健康問題と食品問題を知ってよかった

ささやかな力でも人をしあわせにさせられることを知った

他人のために何かをやりたいと思うようになった

TFT プロジェクトを知った 3

今まで、これについての内容を政府のウェブで探さなかったが、TFT を知ってよかった

TFT はすごい！

日本学者と TFT を知った

社会企業の運営システムを知った

ヒアリングを練習した

視野を広めた

この前、低カロリー食品を作ったことがあるが、貧困状態にある人を助けることと関係して考えるのは、非常にいい発想である

ずっと前から TFT プロジェクトに関心を持っていた

新鮮な発想を知った

消費で社会に貢献できることを知った

TFT のシステムと社会的価値を知った

一つのことで二つの問題を解決する方法を知った

世界の新しい情勢を知った

新しいことがわかった

勉強になった

視野が広がり、いろいろなことを考えさせられた

TFT の活動と、その意義を理解できた

TFT の活動は「世界の愛」のもとで、社会貢献していてとてもよかった

非常に意味のあるプロジェクトで、世界平和に大きな貢献をすると思う

非常にグローバルな問題で、関心をそそられた

(4) SGRA では、今後も中国の大学で、民間の公益活動を紹介するフォーラムを開催していきたいと思っています。あなたは、今後どんなテーマの話を聞きたいと思いますか？

NPOについて 5	貧困状態にある人を助ける話題
簡単にだれでもできる公益活動 5	貧困状態にある児童への救援
TFTについて 5	経済発展と環境保護問題
大学生のTFTへの参加について 4	中国経済の発展問題
中国でTFTをどう広めるか 3	社会問題
政治情勢及び平和問題	社会企業の関連知識を知りたい
留学	農村における教育問題 2
健康問題 2	中国の民工の子供たちをどう助けるか
日本企業の中国市場進出	中国西部地区貧困児童の教育問題
中国における SGRA の活動情報	教育の平等問題 3
学生に関係ある活動	発展途上国の教育 2
日本文化；旅行；日本語学習	日本の文化習慣及び世界問題
日本の教育	学校援助
日本経済	日本文化及び日本民衆思想と NPO の関係
食品安全問題 2	社会問題と一人一人との関係
教育、文化	日本の特色
資源問題 2	社会性問題；飢餓、貧困、貧富問題を解決する方法
世界範囲で今解決しなければならない問題	世界各国の経済スタイル
簡単にだれでもできる公益活動 5	人口問題
社会的テーマなら、何でもいけると思う	世界の発展問題
都市生活のストレス	世界問題を解決する新たな方法と発想
医療問題 2	子供への寄付
社会企業の運営システム	若者のできること
貧富の格差 5	日本の若者の中国に対するイメージをあげられる活動
実生活に関する社会問題	若者の心理・健康
高級商品の消費問題	子供の教育
日本の礼儀、文化	グローバル化のもとでの青年の交流、青年の負うストレス
大学生はどうすればうまく社会に進出できるか	日本の中小企業、あるいはアジアでの中小企業への支援活動
英語で講座をやってほしい 2	

(5) SGRA へのメッセージがありましたら、お書きください。

次のフォーラムも上海財政大学でやってください！

大学の中でもっとアピールしてほしい 9

内容をもっと充実させてほしい 3

これからも TFT に関する情報を知りたい

TFT のスタッフがますます増える中の運営方法

PPT を日英語バージョンにしてほしい

日本以外の国のデータを知りたい

皆さんからの問題をまず選んで、代表的な問題だけを講演者に聞くべき

VTR で説明してほしい

もっと聞きたい！

もっともっと頑張してほしい

中国語訳のついている PPT をほしい 2

ちょっといい設備で講演してほしい 2

英語で講演してほしい 2

中国でこのような講演をもっとやってほしい

中国でこのようなプロジェクトをやる難しさ

プロジェクトの宣伝にもっと力を入れてほしい

私たちが TFT のためにできることは？

講座の準備をもっとやってほしい

印象はそんなに深くない

具体的なデータで説明してほしい

このような講座をもっとここでやってください

中国語、英語、日本語三ヶ国語で講演をやってほしい

このすばらしい発想をもっとたくさんの人々に知られるように頑張してほしい

英語の資料を見たい

中国の現実と関係ある TFT を紹介してほしい

世界各地での実施情報を具体的に紹介してほしい

あ
と
が
き

第4回チャイナ・フォーラムを終えて

SGRA 代表 今西淳子

初めての上海虹橋→東京羽田のシャトル便は極めてスムーズで、今回使った全ての便と同様、満席でした。東アジアの人の交流はますます盛んになってきていると旅行する度に感じます。そして、いつものように、中国の発展のパワーとエネルギーに圧倒されました。

フォーラム前の南開大学の国際シンポジウム「グローバル化時代における東アジアの制度変革」へのオブザーバー参加から、フォーラム後の上海万博の工事現場見学まで、とても充実した一週間でした。南開大学の楊棟梁先生、宋志勇先生、上海設計学院の潘政威先生をはじめ、ご支援ご協力いただきました皆さまに、心から御礼申し上げます。

宋剛さんと範建亭さんのご尽力のおかげで、北京と上海で開催した今年のチャイナ・フォーラムも無事盛会裡に終わりました。今年の講師の近藤さんは、参加者と年齢も近く、トピックも現代的で、聴く人を惹きつける力をもっていたので、両会場とも大変良い雰囲気での交流ができたと思います。上海財経大学では、社会起業ということ自体に関心のある学生さんが自分達の活動レポートを配布し、若者の間でグローバル化の潮流が伝わるスピードの早さに驚きました。SGRA チャイナ・フォーラムは、来年も9月に、北京とフフホトで開催したいと思っています。みなさん是非ご予約ください。

北京

北京外国語大学/SGRA 宋 剛

第4回チャイナ・フォーラム（北京）は体の丈夫そうな宋剛君の強力かつ情熱的な勧めで、9月16日に北京外国語大学の日本学研究センター三階の多目的ホールにて開催された。2006年に北京大学で開催したパネルディスカッション「若者の未来と日本語」、2007年に北京大学と新疆大学で開催した緑の地球ネットワーク高見邦雄事務局長の講演「黄土高原緑化協力の15年：無理解と失敗から相互理解と信頼へ」、2008年に北京大学と延辺大学で開催したアジア学生文化協会工藤正司常務理事の講演「一燈やがて万燈となる如く～アジアの留学生と生活を共にした協会の50年～」に引き続き第4回目であった。今回のテーマは「TABLE FOR TWO ～世界的課題に向けていま若者ができること～」で、講演者は特定非営利活動法人TABLE FOR TWO Internationalの近藤正晃ジェームス共同代表理事だった。

9月16日午後4時、フォーラムは定刻どおり開始し、SGRA代表の今西淳子さんと国際交流基金北京日本文化センターの小島寛之副所長の開会挨拶の後、司会の孫健軍さん（北京大学/SGRA）は、フロアにいる70名近くの入場者に近藤

正晃ジェームスさんを紹介した。近藤さんは、世界の死亡・病気の原因のトップ2は肥満と飢餓だと説明し、その同時解消に取り組もうというTABLE FOR TWO(TFT)の創立趣旨を紹介し、近年の活動成果および数多くの興味深い事例を生々しく語った。

具体的には、2007年2月に日本で始まったTFT活動は、2009年6月時点では鹿島建設を含む130の企業、衆参両議院をはじめとする多くの官公庁や、地方自治体、大学、病院など200以上の事業所における実施協力を得たという。活動の内容は、日本などの先進国において、実施団体に所属する人々の一食分のカロリーを減らすと約20円程度が節約でき、それをTFT事務局を通してアフリカなどの発展途上国の学校に寄付し、子供たちの給食にするというシステムだそうだ。さらに、事例としては、ウガンダ、ルワンダ、マラウイの三カ国における実施を通じて、子供たちの「栄養状態は改善、健康増進につながる」、「給食導入後の半年から一年で生徒数が2倍近くに増加」、「最終学年の50人のうち、42人が高等教育への進学試験に合格」といった成果を収め、これまでの累計支援定食数は104万食を超えているという。さらに、レストラン、宅配、コンビニなど業界への活動拡大も着々と進めており、地球範囲での実施を今後の課題として視野に入れていると近藤さんは抱負を語った。

近藤さんの目を見張らせる志とTFT活動の成果の一つであるその健康ぶりと若さに驚いた参加者から、「カロリーオフのメニュー」、「TFT活動の運営システムと監督規制」、「中国企業との連携可能性」など、多岐に渡って数多くの質問が出され、会場ではインターアクションのムードが高まり、予定を延長して6時15分、李恩民さん（桜美林大学/SGRA）の閉会挨拶で第4回チャイナ・フォーラムは幕を下ろした。懇親会は北外賓館のレストランで行い、自由参加で学生さんを中心に40人程度が集まった。宴会中、今回のフォーラムの北京担当の宋剛君は熱で耳鳴りがしていたが、「近藤さんは行動的だ、援助金でご馳走してくれたね、早く北京で活動拡大してほしい」という参加者の声が聞こえた。今後の北京の立場と今夜の宴会の勘定者を間違えられたが、とりあえずTFTという活動を中国で初めて知ってもらえたことで、宋君の熱がだいぶ下がったようだった。

上海

上海財経大学/SGRA 範 建亭

9月17日夕方、SGRA上海フォーラムは上海財経大学にて開催された。テーマは「Table For Two」で、前日北京フォーラムと同じ内容であった。北京の講演には70名の学生が参加したことを知って、本学ではどのぐらいの学生が集まるのかとても不安であった。というのは、上海財経大学は規模が小さく、経済や経営関連の分野を専攻している学生が大半であり、日本語学科の学生は一学年に一クラスしかないから、日本のことや社会貢献、ボランティアなどにどれほど興

味を持つのか分からないからだ。さらに、その日はあいにく天気が悪く、朝から大雨が続いていたので、一層学生の出足を心配した。

ところが、講演の20分前までがらがらだった教室は、定刻の6時になると、学生さんが次々と入り、教室の大半を埋めた。結局、100人近くの学生が出席してくれた。翌日学生さんに確認したところ、参加者には学部2年生と3年生が多かったが、1年生と4年生もいる。また、修士課程の学生も何人かいた。日本語学科の学生は全体の三分の一に過ぎなかった。

スクリーンに映されたPPTは日本語のもので、講師の近藤さんも日本語でスピーチをしていたが、北京大学/SGRAの劉健さんの素晴らしい逐次通訳によって、講演はスムーズに進んでいた。質疑の時間に入ると、学生さんから沢山の質問が出された。中には、講師に日本語で直接質問した人も何人かいたが、その場合も通訳が必要なので、結構時間がかかった。講演終了後も近藤さんを囲んでさらに質問する学生もいた。その熱心ぶりに感服したが、終了時間は予定より1時間も延長された。

逐次通訳の講演は効率が落ちることを覚悟していたが、3時間になるとは思わなかった。また、会場は普通の教室だったので、臨時に増加したマイクの調子も良くなかったなど、改善すべき点もいくつかあった。とはいえ、講演は概ね成功したといえる。経済学専攻の学生さんからは日本語専攻者とは違った質問が出たと近藤さんが言う。実際、今回のフォーラムが成功裏に終わった主な要因は、何より講師の近藤さんの素晴らしいスピーチである。その話し方はとても魅力的で、大学の先生よりも上手だなあと感心した。

回収されたフォーラムに対するアンケート調査を見ると、参加者のほとんどがフォーラムの主旨を理解し、収穫を得たと回答した。講演を通じて、日本から発した民間人によるグローバルな社会貢献運動を中国人学生に伝え、彼らや彼女たちの視野を広げることができたと思う。これからは、貧困や環境汚染といった世界共通の問題を真剣に考え、TFTのような社会貢献運動に取り組んでいくことを中国の若者に期待したい。

第四届 SGRA 中国论坛

面对世界性课题、 当代青年的可能性

—Table For Two—

■ 研讨会宗旨

本届论坛是继 2006 年于北京大学进行的以“青年的未来与日语”为主题的研讨会、2007 年于北京大学及新疆大学进行的绿色地球网事务局长高见邦夫先生的讲演“黄土高原绿化合作的 15 年——从隔阂与失败到相互理解与信赖”、2008 年于延边大学及北京大学由亚洲学生文化协会常务理事工藤政司先生主讲的“星星之火可以燎原～同亚洲留学生一同走过的协会 50 年”之后，在中国举办的第四届论坛。

本届论坛邀请到诞生于日本的社会贡献活动 TABLE FOR TWO 的创始人近藤正晃 James 先生主讲。近藤先生同时致力于研究发展中国家的粮食不足问题及先进国家的肥胖症等生活习惯病问题，而 TABLE FOR TWO 指的是将先进国家的餐桌上的美食变为发展中国家的学校饭桌上的伙食。这项活动始于 2007 年，之后协助企业不断增加，多数日本媒体也对此进行了报道。论坛提供中日同声传译服务。SGRA 今后将一如既往地在中国各地高校不断召开论坛，介绍由民间团体进行的公益活动。

何为 SGRA?

SGRA 是以长期留学日本并在日本的大学获得博士学位的来自世界各国研究人员为中心组建的，其研究宗旨在于为勇于挑战全球化的个人或组织制定方针和战略时提供有益的帮助，为解决问题建言献策，并将其研究成果以论坛、报告书、网页等形式，广泛公诸于社会。对于每个研究课题，都分别由多国籍跨学科跨领域的研究人员组成研究小组，凝聚多门科学智慧，构建跨领域网络，从多方面的数据入手，展开分析和考察。SGRA 不以特定的学科或某一群专家为对象，而是以整个社会为对象，展开领域广泛，跨学科、跨国界的研究活动。为实现优秀地球公民做出贡献乃是 SGRA 的基本目标。

面对世界性课题、 当代青年的可能性

—Table For Two—

日期・会场	2009年9月16日（周三）下午4点～6点 北京外国语大学日本学研究中心三楼多功能厅 2009年9月17日（周四）下午6点～8点 上海财经大学梯一教室（国定路777号）
主办	日本关口全球研究会（SGRA）
协办	特定非营利活动法人TABLE FOR TWO International
赞助	国际交流基金北京日本文化中心、（财）渥美国际交流奖学财团

讲演

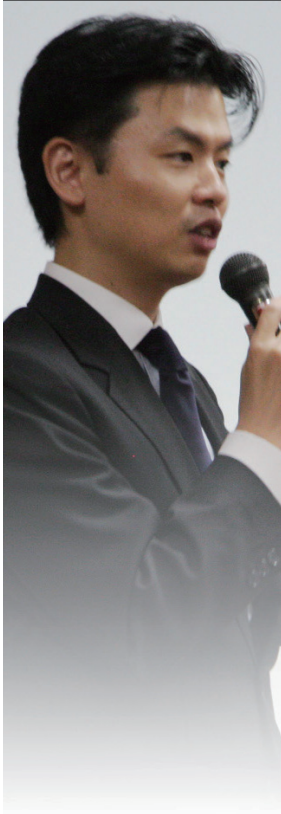
46

近藤正晃 James 特定非营利活动法人 TABLE FOR TWO International 共同代表理事

讲演概要

在全世界的60亿人之中，有大约10亿人受到饥饿煎熬，还有大约10亿人苦于肥胖症等生活习惯病。而人类死亡及疾病的原因中，第一位是肥胖，第二位是饥饿。这两项课题的重要性要远远大于战争、事故、传染病等。TABLE FOR TWO（TFT）的宗旨就是同时解决饥饿与肥胖！在加入TFT的企业食堂、餐厅及酒店中，只要点一份餐，在发展中国家挨饿的孩子在学校里就会吃到一份饭。一个人享用美食的时候，世界的另一端也有一个人摆脱了饥饿。因此，这项活动名为TFT。这样，我们在日常生活中就可以感到与世界连在了一起，虽然是举手之劳，却能挽救对方。或许您对社会活动家的坎坷道路感兴趣，或许您关心饮食与健康，或许您想在中国推广TFT，我衷心期待着能与各界人士广泛地交流意见。

答疑	63
北京	63
上海	70
有关论坛的问卷	75
后记	79

讲
演面对世界性课题、
当代青年的可能性

—Table For Two—

近藤正晃 JAMES

特定非营利活动法人 TABLE FOR TWO International 共同代表理事

大家好。能有机会和大家交流，我感到非常荣幸。

在进入 TABLE FOR TWO 这个话题之前，我想先说明一下为什么我会对这个活动感兴趣。在同在座的各位差不多年纪的时候，我去美国的布朗大学留学，在三年级的时候，听我的老师说起世界上的粮食总量虽然很充足，但是却依然有很多人处于饥饿状态。所以从那个时候开始我开始考虑如何解决这个问题。

现在同学们当中四年级的同学肯定也在考虑就业的问题，那个时候我也针对如何就业这个问题听取了很多意见。当时听说有一种工作叫做“经营顾问”，这种工作究竟是什么样的工作呢？经过打听后得知这个工作主要是策划解决各种问题的经营管理公司。

由于粮食充裕和饥饿状态并存是一个很大的世界性问题，我也十分想解决这个问题，所以就在 1990 年加入了名字叫做麦肯锡的公司，一直工作了 15 年。最初，大部分客人都是各个企业。例如，帮助美国饮料公司如何扩大在中国市场橙汁销售量的问题。或者是某个公司同时经营音响设备和 CD，如何将两项事业作为一个整体走向国际市场等较大的问题。后来，我们公司开始帮助策划跨国集团今后如何发展等设计企业整体的问题。我进入公司后一开始的 6-7 年主要从事的就是这些工作。

正好这个时候，在美国的华盛顿 DC，麦肯锡成立了涉及世界经济整体的智囊团，聘请美国麻省理工学院（MIT）诺贝尔奖得主经济学家索罗先生担任所长。这个智囊团的特别之处在于他们并不收取费用。如果哪个国家产生了新的总统或首相，如果他真的有推进改革的意愿的话，智囊团会免费为之服务一年。顾问这项工作薪金其实很高，如果一年免费服务的话，相当于送给了对方

大约 10 亿日元，折合 7000 万人民币左右。作为免费的条件，麦肯锡公司可以自由地发表服务的结果。

最初的服务对象是 1999 年上台的英国布莱尔首相。我也在智囊团里工作了一年左右，帮助英国现任首相，时任财政部长的戈登·布朗进行国家预算工作。之后普京就任俄罗斯总统之后我又去俄罗斯工作了一年半。叶利钦辞职普京就任总统的时候，整个俄罗斯通货膨胀严重，经济状况不容乐观。于是我们主要帮助解决如何能让俄罗斯经济快速复苏的工作。在此之后我还作为经济政策小组的一员，去过波兰和韩国等国家，2000 年回到日本。

无论去哪个国家，都可以帮助这个国家的领导者制定一些政策，但是有关医疗问题，却总也找不到好的方法。刚才介绍到的索罗先生也曾经讲过，医疗和教育是两个相当难的领域，不好区分什么才是正确的成果。例如，如果是汽车制造业的话，只要能够用较少的劳动者制造出价格较低性能较高的产品就可以算是达到目的，但是就医疗制度来说，即使在中国也是一个很难的课题，专家们会有不同的见解。究竟是实现有钱人能够接受较好的医疗诊治好，还是实现国民平等接受医疗诊治比较好，或者是从政策上给予支援，集中解决贫困人口的医疗问题比较好。这些问题在不同的国家，或者不同的时代，答案也会不同，因此相应的政策也会不同，政策的结果也会相应发生变化。我深刻感受到医疗是一个难以攻克的课题。

我们在讨论这个问题的时候，听说东京大学计划成立医疗政策中心，于是我们在 6 年前成立了一个研究小组，随后不久成立了日本医疗政策机构，研究解决日本整体的医疗政策。这个机构以东京大学、庆应大学和京都大学为中心，是一个囊括了经济界和医学界专家在内的智囊团体。

“TABLE FOR TWO”就是在这种讨论下应运而生的。我大学毕业已经 20 个年头，这 20 年间主要从事的就是政策问题，但是我感到健康问题，远远不是仅仅出台政策能够解决的。

肥胖问题在现今中国也是一个大问题，在全世界范围内也是最大的一个问题。现在世界上大约生活着 67 亿人，其中大约 10 亿人都被肥胖或是因肥胖引起的各种疾病而困扰着。世界各国都在出台各种政策致力于改善生活习惯病问题。可能在座的各位都会了解如何治疗生活习惯病。只要不过吃太多并且进行运动就可以。所以各国政府几十年来都在拼命张贴各种标语：“不过量摄取食物”，“进行一定的身体锻炼”等等。虽然我们都明白，但是实行起来却很难。也就是说，政府在这一问题上的力量有限，必须社会中的每一个人都实际加入进来，否则解决生活习惯病问题将难以实现。我在从事政策制定的工作中，深刻体会到了这一点。

上周我参加了在大连举行的新一届达沃斯论坛。这个论坛主要是为大家讨论世界性问题提供一个平台。相对于大家来说他们可能并不年轻，但是论坛刚刚设立的时候参加者中的大部分是 40 岁以下的“年轻人”，其中的 50-100 人，

是当选当年度“青年国际领袖”的任务。大约5年前，我也有幸被选中，负责健康小组的课题。

健康小组成立的时候，我就如何解决肥胖和生活习惯病问题进行了强烈的呼吁，但是其中一位来自非洲的与会者说，“你认为解决肥胖问题很重要，但是我们非洲却是出于饥饿状态。我认为应该首先解决饥饿问题。”致力于解决肥胖问题的小组提出的是“即使饭菜很多也不暴饮暴食，可以剩在盘子里”“大量饮食之后应该通过跑步消耗掉多余的热量”等等不太珍惜粮食的方案。我们不太明白这种方案的有利之处究竟在何方，但是在先进国家确实有很多类似的现象：吃很大的汉堡，喝大量的可乐，然后再跑步两小时。这种做法我认为是非常浪费能源的。

刚才我介绍了大约有10亿人存在肥胖问题，其实处于饥饿、营养失调的人口也刚好是10亿人（图1）。在此之前我也没有注意到，世界67亿人口中，受到肥胖和饥饿困扰的人口都是10亿人。这体现了世界上的一种矛盾：富有的人由于摄取营养过量而苦恼，同时又有人因为营养不足的痛苦。两种状态的人口合计20亿人，也就是说世界上大约有3分之1的人口是出于苦恼之中的。

这两个问题能否同时解决呢？大家能否一起来考虑如何解决世界上这个贫穷和富有的人口之间所存在的巨大不平等问题呢？“TABLE FOR TWO”就是在这一基础上形成的。

图 1: 世界粮食不均衡现象与严重的健康问题

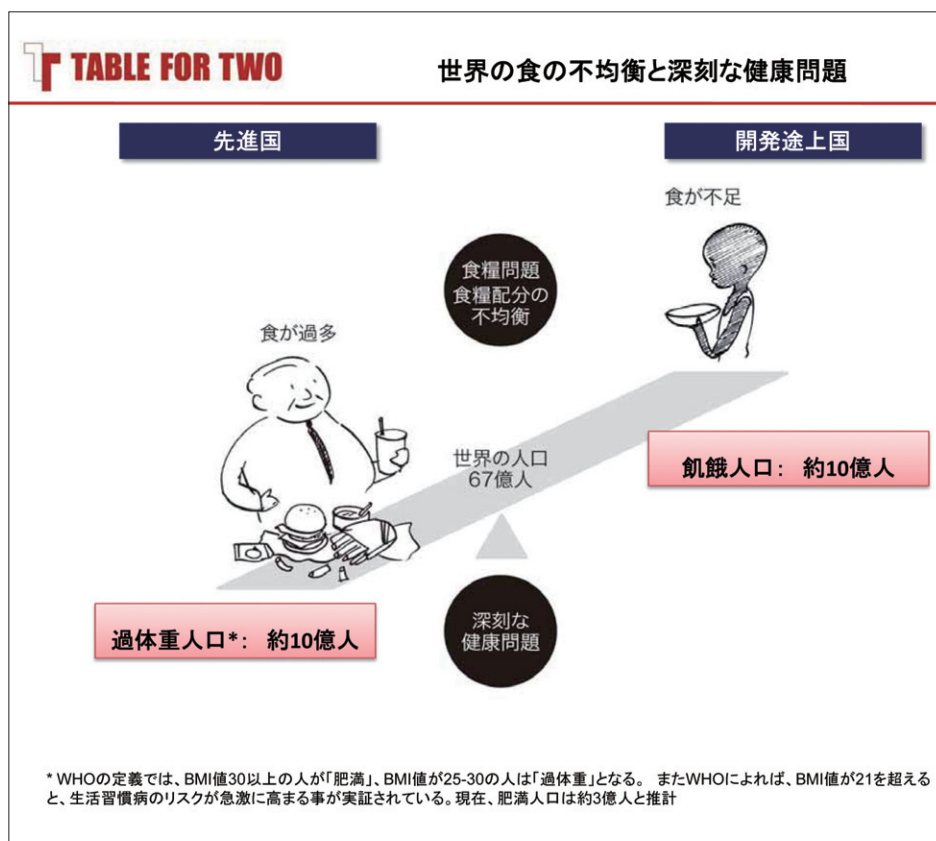
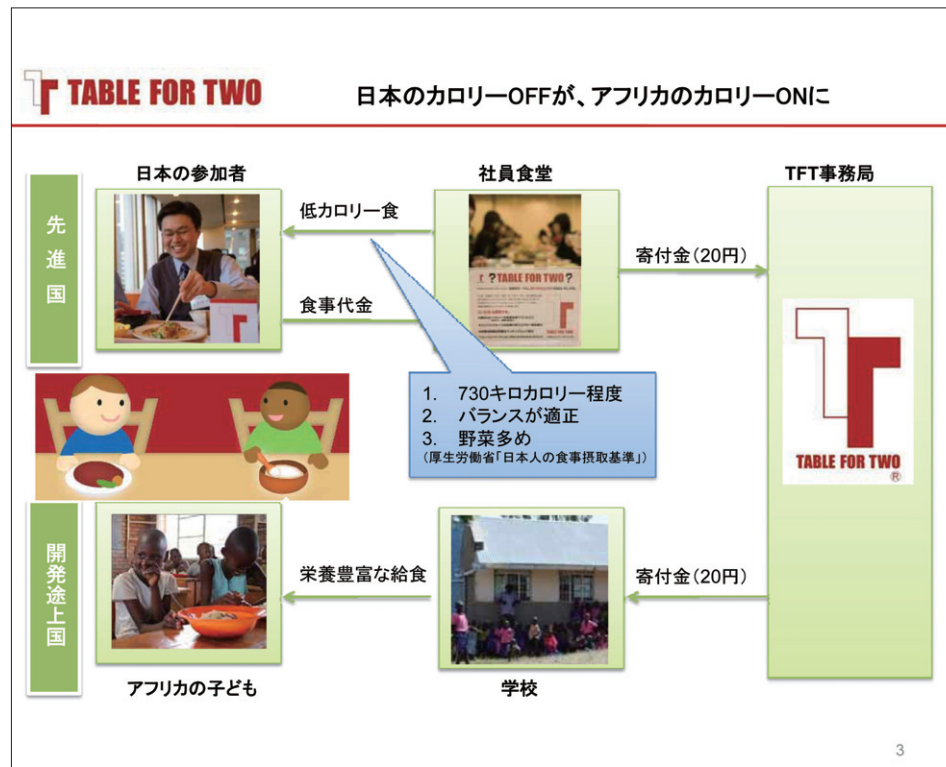


TABLE FOR TWO 的组织构成

图 2: 将日本卡路里节省量
变成非洲的卡路里增加量



这是一个非常质朴的计划。图2中写着“发达国家”，其实我们也十分希望中国能够加入进来。因为中国是一个富裕人口很多的国家。我们希望这些有钱人能够吃到健康的食品。希望在这些国家的公司员工食堂、大学食堂和街上的餐馆、咖啡厅制作提供一餐低于730卡路里的TABLE FOR TWO食品（TABLE FOR TWO meals）。

企业制作提供热量为730kcal，营养均衡并且蔬菜充足的饭菜，职员每消费一份这样的饭菜，就由职员本人或者是公司或者以双方共同承担的方式为TABLE FOR TWO捐款20日元。在日本，员工食堂每一餐饭的价格在400-600日元左右，所以每一餐价格高出20日元也不会产生太大影响。为了健康要减少卡路里的摄入，就要减少食物。从原本很多的一餐饭中拿掉一部分，这部分大体相当于20日元，我们就是基于这样一个简单的理念。这样大家就比较容易参加这个活动。

“TABLE FOR TWO”将这些20日元收集起来，捐赠给发展中国家用于饮食补助。现在大部分都捐献给了非洲，为小学和中学的孩子们提供一餐午饭。因为在非洲，20日元左右正好是一顿午餐的价格。TABLE FOR TWO的本意就是“两个人的餐桌”，两个人共进午餐的意思。TABLE FOR TWO提供的健康餐饮可以同时供自己和另外一个人共同享用。“TABLE FOR TWO”希望大家在享用美食的时候还能够感受到因为自己的参与而有另一个贫穷的儿童能够和自己共进午餐的美好感觉。

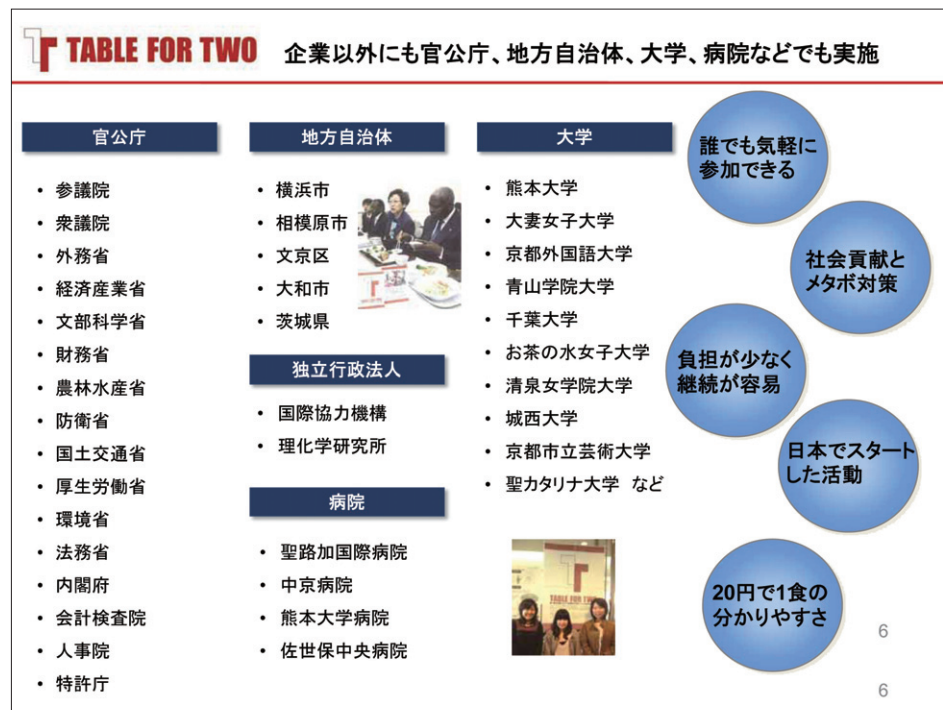
在此之前，也已经有了很多类似的慈善机构。很多机构都是采取将自己这部分财富的一部分捐赠给非洲，为他们提供健康的食品的形式。但是我们想要做的是，让捐赠这一行为对我们自身也产生有益效果。我们可以享用到健康食品本身的很多好处，同时还可以救济非洲的饥饿人口，有双赢的效果。因为经济富裕的人口很多患有生活习惯病和肥胖等疾病，所以与其单纯为别人做贡献，不如让他们在进行自身管理减少疾病的同时帮助别人实现幸福更有积极意义。



50

IBM, Google 等企业在世界各地都有分支，我们在考虑如何将这些分社都利用起来，充分发挥企业间的关系网，推进我们的活动在世界范围内扩大影响力。

图 4：活动在除企业之外的政府部门、地方自治体、大学、医院等食堂开展



因为我们计划在企业以外的领域也开展这项活动，所以我们希望全部的省厅食堂都加入进来。在中国是什么情况我不太清楚，在日本，只要政府积极参与，就会有人觉得放心，所以我们希望政府部门也参加进来。在地方自治体地区，我们日本第二大城市横浜市也导入了这项活动。

除此之外，是独立行政法人和医院等部门。虽说是得病之后必须要吃得健康，但是在很多医院的自助食堂里经常会有不健康的食品出现。所以我们致力于让来医院的患者都能够吃到健康的食品。最近又增加了 5 家医院，我们还在积极推动几所大学食堂的加入。

“TABLE FOR TWO”是一个人人都能轻松参与的活动。因为饭菜人人都能够接受，并且菜谱对于餐馆来说也不是很难。而且对于日本或者是世界上的很多企业来说，意味着通过这项活动他们对社会做了贡献。因为一个企业不仅仅是要盈利，还要考虑为社会做点什么，也希望自己的职员能够更加健康。

在美国，肥胖人群增势不减。例如，我们用一个比较有意思的数据进行说明。通用公司职员的医疗费用比该公司用来制造汽车所消耗的铁的成本还要高。机动车因为由铁构成所以铁皮成本是很高的，但是职员的医疗费用更高。所以让职员变得健康起来对于通用公司来说是维持其竞争力的重要因素。正是由于这种意义，很多的企业都愿意参与到这项活动中来。

20 日元这个金额可以根据国别不同而稍有变化，重要的是要让捐赠者感到并不是什么负担。在中国是什么状况我不太清楚，在日本，认为捐赠或者是

TABLE FOR TWO

衆議院、参議院の食堂でもスタート！



7

图 5：在众议院、参议院食堂也开始了！

做社会贡献是有钱人应该从事的事业这种观念还十分的根深蒂固。如果问到某人为什么 not 捐赠，为什么 not 作社会贡献，他会回答说“如果我有更多的钱我就会作，但是现在的状况是我还希望有人能够捐赠给我一点”。但是，如果只有 20 日元，并且只需要每周参加一次或者是每月参加一次，人人都可以轻松参与，而且可以轻松的多次参与。

这项活动虽然与日本的政治无关，但是很多政治家也支持并参加了进来。在日本有自民党和民主党两大政党，我们希望两大政党都能够参加进来，就邀请了自民党的原外务大臣川口先生担任参议院方面的会长，邀请民主党的鳩山先生担任众议院方面的会长。TABLE FOR TWO 的会长日后成为了日本的首相，我非常高兴。

这一位是驻非洲乌干达的大使，我们也在寻求非洲方面相关人士的支持。

在日本的大学生中间有一个叫做“TABLE FOR TWO 大学生协会”的组织，因为很多大学生都有在自己的学校引进这项活动的意向，所以很多学校的食堂



大学生による「TABLE FOR TWO大学連合」

目的

活動内容

幹事

- プログラムの普及
各大学の学生食堂へのTABLE FOR TWO導入
- 学生の意識改革
世界の抱える食料問題、自分たちの健康、
開発途上国の現状について学生の意識を高める



- 月に一度のミーティング : 学食への導入方法や告知方法などの相談、情報交換
- 定期的なイベント開催 : 意識改革のための勉強会、講演会等を企画

• 代表	浜中 吾郎	(千葉大)
• 副代表	澤木 一真	(青山学院大)
	中村 麻衣子	(専修大)
• 書記	西内 祐介	(早稲田大)

現在、約100名の学生が活動中



(大学連合 ポスター案) 8

图 6: 大学生中的 TABLE FOR TWO 大学生协会

都在实施。同时，为了能够让更多学生接触了解这项活动，我们还在举行学习会。通过放映短片，让同学们了解肥胖和饥饿是否为世界性的两大重要问题，然后举行会议座谈。而且这种学习会不仅仅在一所学校，而是在多所学校举办，这里写着 100 所，我昨天确认了一下最新数据，一共有 250 名不同大学的学生加入了 TABLE FOR TWO 大学生协会。我希望在今后能够进一步扩大这个协会组织。

重要的是每一个个体都要参加到这项活动中来。我认为年轻人更能理解为什么这项活动不能仅仅依靠政府，而是需要我们每一个人努力。我希望比我年轻的一代都能够自己考虑解决某些世界性的问题。当然我希望中国的年轻人也这么做。

那么，我们收集来的 20 日元都去了什么地方呢？我们现在主要支援的是非洲的乌干达，卢旺达和马拉维这三个国家。之所以选择这三个国家，有三个理由。

第一是我们要选择存在严重贫困问题，在世界上属于最贫穷一类的国家。

图 7: 20 日元所能够提供的学校午餐是什么？



第二是要政权稳定。我们曾经在几个政情不是很稳定的国家进行过这项活动，但是由于没有军队我们就无法进入，或者由于当地学校教育全部停止，导致我们无法将饭菜如期送达。第三是当地我们能够找到有可以合作的伙伴，帮助我们顺利完成这项活动。如果捐赠者们好不容易捐赠的 20 日元在中途被挪作他用而完全没有报告，捐赠者也会非常失望，所以我们基于这三个理由来选择接受支援的国家。

饭菜的菜谱中，比如说有加入了粗玉米粉，大豆和蔬菜的汤。粗玉米粉在非洲是比较常见的主食，是将土豆粉做成土豆泥状的一种食物。从营养均衡角度来说是非常健康的食品。这些孩子中有多一天只有这一餐饭，如果我们不能提供，那么他们就有可能一天都没有饭吃。

世界上有 10 亿人苦于营养失调和饥饿，当然这其中也包括年老的人和儿童。之所以我们选择给学校支援午餐，基于下述三个理由。

第一是比较直接的理由。如果儿童不能营养均衡，之后会带来一系列的问题。比如说会因为小时候营养失调而患难以治愈的疾病，一生都身体虚弱，甚至容易夭折，所以我们把保证儿童的营养均衡当做首要目标。

第二个理由是，由于我们支援的国家都非常贫穷，家庭全员都要生存下去是件非常困难的事情。这样一来，即使父母想把孩子送到学校，也会为了生存而让子女从事农活或者是帮助家里干家务。例如，只让家里最大的孩子上学，较小的孩子只能留在家里，或者是只让男孩儿去上学而不让女孩子去学校。从家长的角度来说，如果能够让孩子免费吃上饭，他们一定会把子女送到学校。如果仅仅是去学校上学，他们可能会为难，但是如果在上学的时候还能够得到健康的身体，他们就会把子女送去学校。

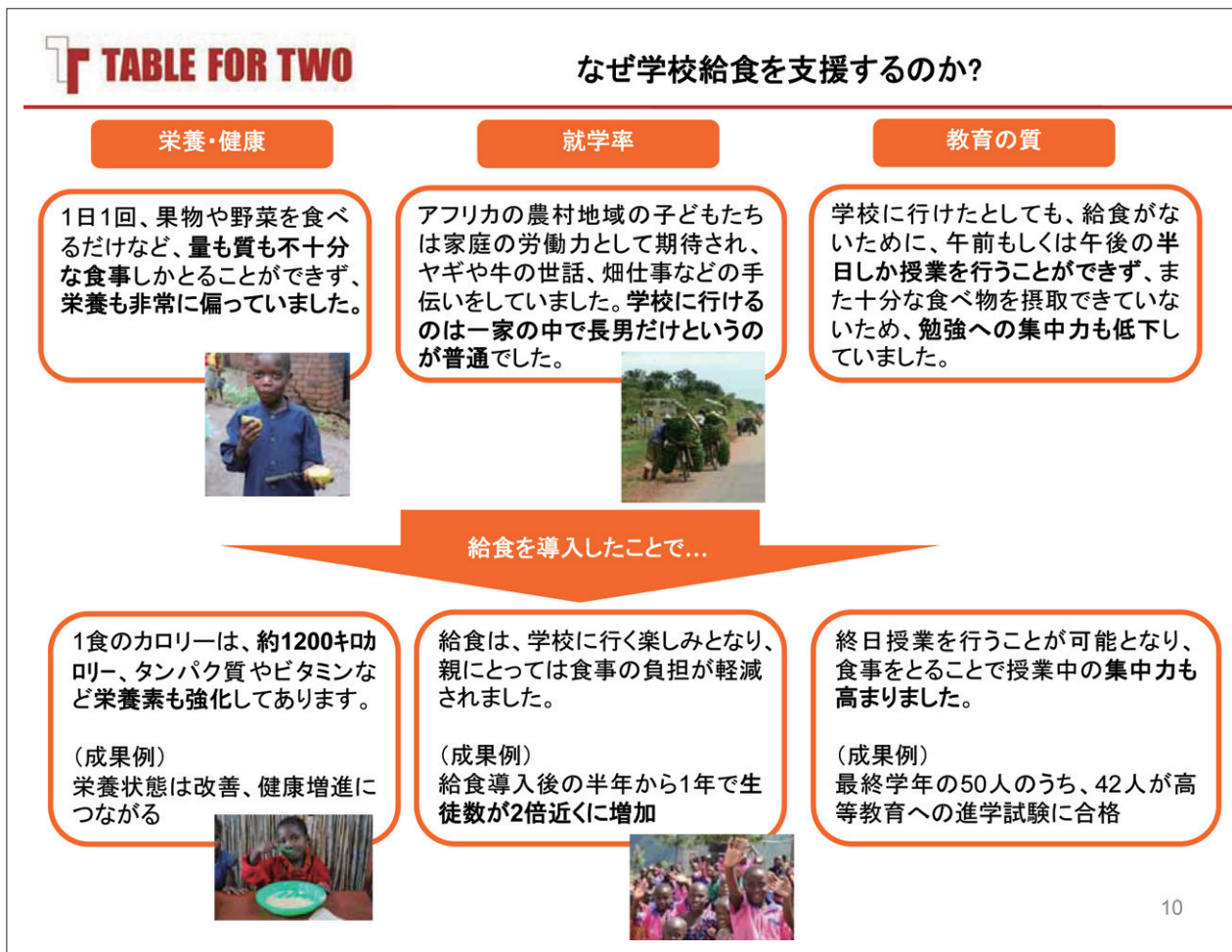


图 8: 为什么要给学校支援午餐？

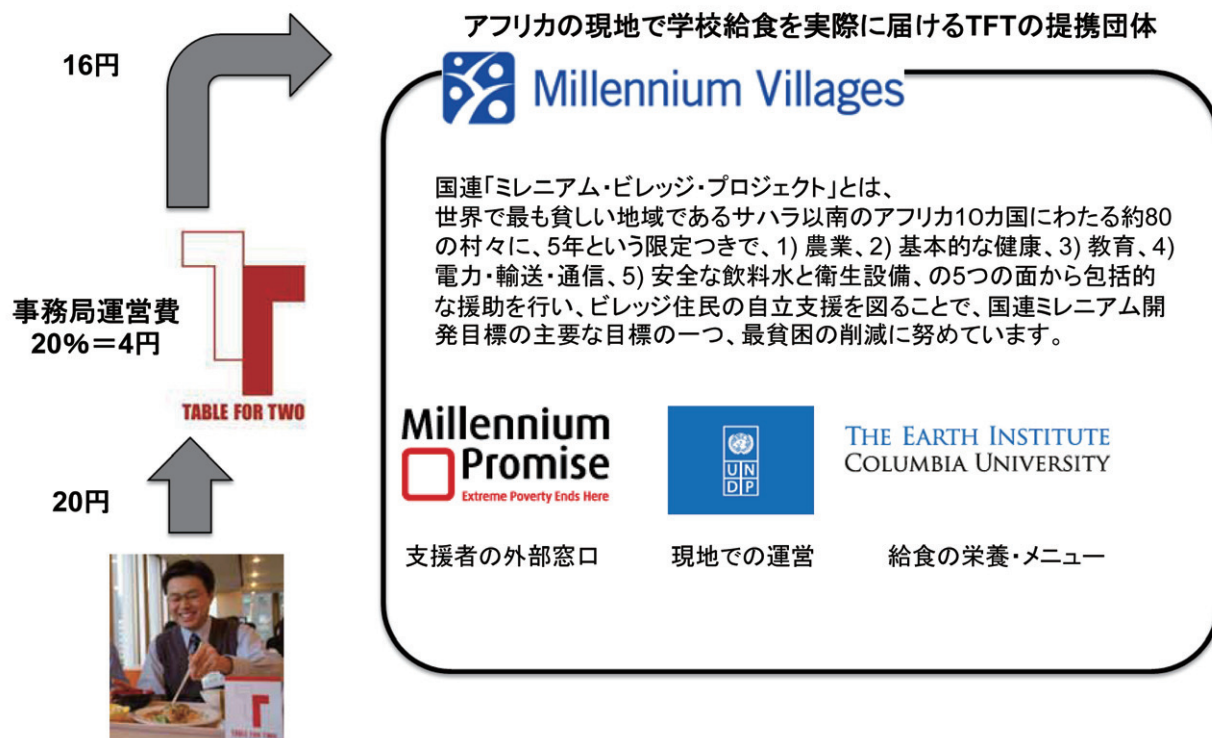
第三个理由是，如果孩子们不吃午饭，到了下午肚子就会很饿，注意力无法集中。在我们支援他们午餐之前，他们或者不上下午课，或者根本无法学习。有趣的是，一开始我们提供午餐，孩子们吃了午餐就都回家了。学校下午也是有课的，孩子们只是想吃午餐所以饭后就散了，但是后来我们在下午三点的时候再为他们提供一杯好喝的茶水，他们就会在学校一直学习到3点。这样一来，如果我们为他们提供午餐，不仅能够保证孩子们的营养和健康，还能够保证孩子们按时来学校，并且保证他们好好学习，是一箭三雕的事情。基于这些原因，我们决定首先支援学校的午餐。

下面我来解释一下我们以什么形式来运作。要运作这样一个项目，如果仅仅依靠我们自己的力量是不行的，因为我们既有自己擅长的地方，也有自己的弱点。我们开始的时候，有两项工作非常擅长的。其一是，例如将解决困扰非常肥胖的人和饥饿的人的问题同时解决。其二是，我们动员了很多企业来加入进来，有很多事情可以直接跟企业商量。由于我一直在民营企业内工作，所以十分清楚企业能够为我们提供什么。

但是，之前在非洲，将来有可能在印度开展的这项午餐支援活动，曾经并

TABLE FOR TWO

20円の寄付金の流れは？



11

图 9: 20 日元的流向是什么？

不是我们所擅长的。而且当时我们并没有能够保证活动顺利进行所需要的物流和饭菜设计制作人员。而且这些人员和物流我们需要在全世界运作。所以，我们选择了一些合作伙伴。其中最主要的合作伙伴是 Millennium Promise。这是一个将我们的活动向全世界推广的团队。然后，哥伦比亚大学专门研究地球规模世界性问题的 THE EARTH INSTITUTE 研究所为我们收集世界上最贫困地区的相关数据，知道我们在某一个地区提供何种午餐最合适，是我们的学术合作团队。物流方面一直是联合国的 UNDP 组织（联合国开发计划）在与我们合作。

我们说将 20 日元捐献给非洲的学校，那么成本是多少呢？实际上，我们希望将这 20 日元全部捐献给当地的孩子们，也肯定有很多人认为我们为他们提供了价值 20 日元的午餐。刚刚开始的时候我们也是这样做的。帮我们调查、搬运物流，给予我们各种帮助的人当初的想法也是跟我们一样的。但是，当项目越来越大，需要的人手越来越多的时候，全部免费来运营已经变得不切实际。作为 TABLE FOR TWO，我是理事会的代表并不领取报酬，但是这个团队里有很多专职的工作人员。最开始的时候大家都说要坚持努力，但是到了后来，大家认为如果没有报酬，他们也无法生存，更不能工作。所以，即使我们不能给工



图 10: 每 3 个月视察一次被支援的地区, 报告结果

作人员提供高额薪水，至少要让他们吃饱饭。基于这一点，我们把 20 日元中的 20%，也就是 4 日元作为工作人员的报酬，也就是说，我们提供的午餐的成本是 16 日元，否则我们的工作将无法继续扩大。实际上 4 日元也很难维持运营。但是，如果我们能够把这项事业做得更大，其实我们可以在将来把抽取的报酬降为 15~10%。TABLE FOR TWO 是非营利团体而不是企业，所以我们在努力思考能够让这项事业永远运转的方法。

TABLE FOR TWO 的事务局长 (President) 作为代表, 每一年会出 4 份报告。

真的做到提供免费午餐了吗？当地的孩子们真的变得健康起来了吗？在实际运作期间，我们还是碰到了很多问题。我们曾经去过乌干达。孩子们吃饭后刷盘子的情景给我留下了深刻的印象。由于他们刷碗的地方什么都洗，所以并不干净。我在能否把盘子刷得更干净呢？

如果我有这样的疑问，就会有人对我说“那么近藤先生，你再提供一些干净的水不就可以了吗？”开始我并不了解情况，便问他们附近哪儿有水，得到的答案是离山顶 40 分钟路程的山下。这 40 分钟的路程，下山很容易，但是如果从那里打了水再回到山上，就要花费 2 个小时左右的时间。如果不下山去打

水，那么位于山丘高处的这所学校就不会有清水。由于做饭，洗刷都需要水，所以关键问题就在于如何将干净的水送到这所学校。我们正在讨论这个问题。

参与这项活动的伙伴们都会就上述情况进行极具透明性的报告汇总。这些活动简报会张贴在所有参与这项活动的餐馆里。购买这种午餐的顾客看到这些简报之后，会知道自己午餐费中的 20 日元具体用在何处。我们希望通过这种方式让顾客们知道，即使不清楚自己到底瘦了多少，至少因为自己的参与有人从饿肚子到吃上饭了，这是一件十分有意义的事情。

我们之所以这样做，是因为很多捐款人都不清楚捐款的去向。虽然被告知募捐了很多钱，做了很多有意义的事情，但是捐款人无法得知捐款的具体流向，也不知道具体的效果。我们这个活动，则是从一开始就派遣工作人员向大家报告各种具体情况，包括大家有疑问的地方。

媒体是非常重要的。为了推广我们的事业，我们需要让更多的人了解并参与进来。在最近的一年时间里，电视媒体一共报道了 17 次。上周日本最大的电视台 NHK 还就我们的活动进行了大约 40 分钟的特别报道。我们被报纸报道了 85 次，被杂志报道了 45 次，被收音机报道了 22 次。从这种意义上来说，每周我们要接受各种媒体采访 1-2 次。

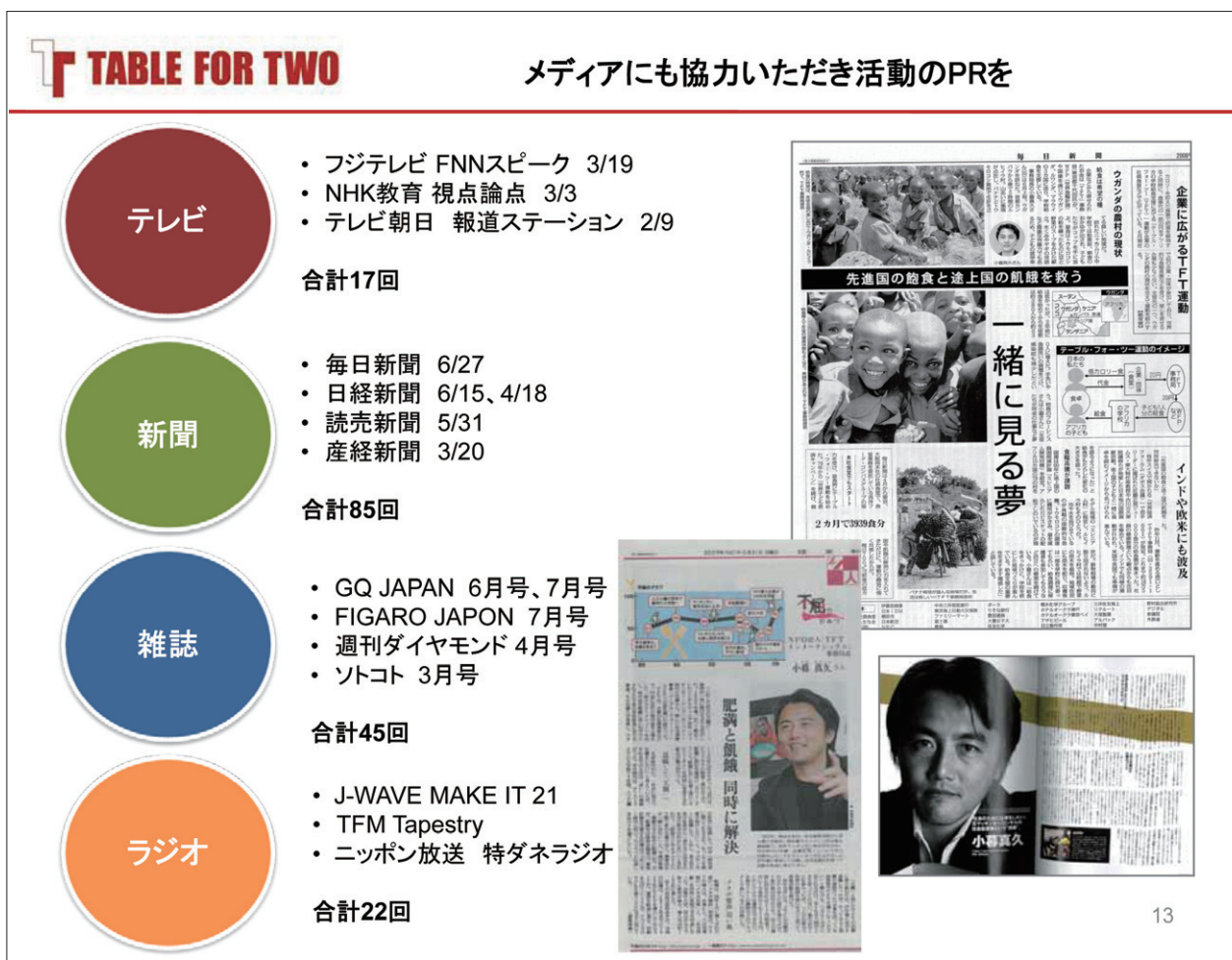
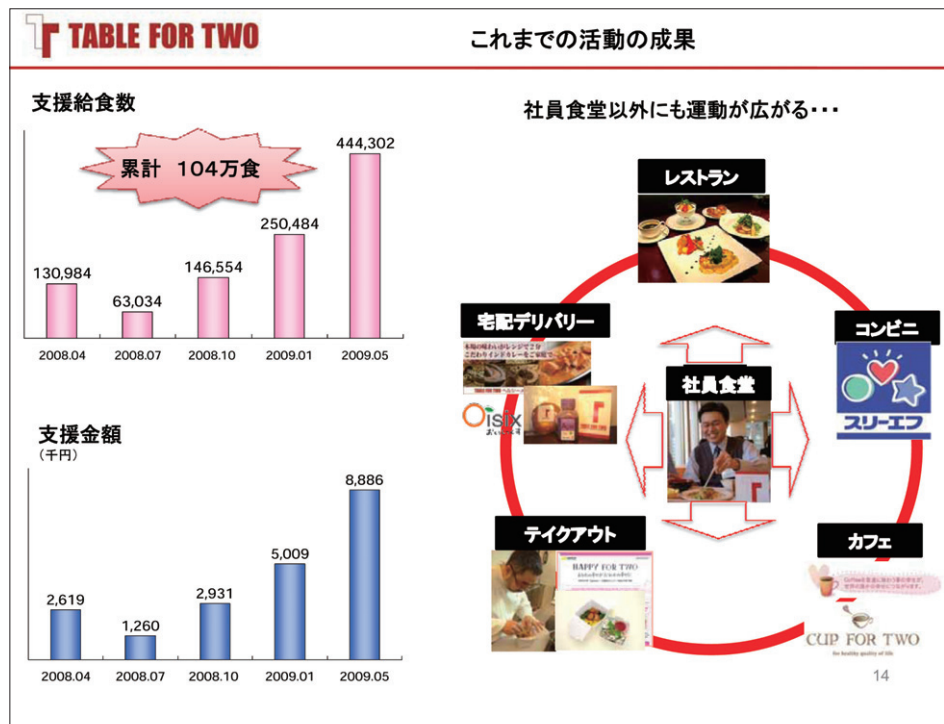


图 11: 借助媒体推广

图 12: 目前取得的成果



到目前为止，我们一共为贫困地区的儿童提供了大约 150 万餐饭。100 万餐饭的概念，就是 4000-5000 个学生一年的午餐数量。因为非洲的学校都没有那么大，所以这个数量基本上相当于可以支援 10 所 400 人学校一年的午餐。刚才我说想把目前参与这项活动的 150 家公司发展到 1000 家，如果能够有 1000 家公司，那么我们的力量就会扩大 10 倍，我们希望在 3 年后能够达到提供 1000 万餐饭（4 万人的分量），我们也希望能够再提高一下支援的金额。

TABLE FOR TWO 事业的扩展

我们现在正在探索如何能够扩展我们的事业。因为也有没有食堂的公司，而且大学生也不可能每顿饭都在学校的食堂里吃，所以我们希望能够在大家吃饭的所有地方都能够提供 TABLE FOR TWO 的饭菜。我们寻找了很多合作伙伴，希望能够在餐馆、外卖、咖啡店和便利店等地方开展我们的事业。实际上我们希望能够在所有提供饭菜的地方都展开我们的活动。

例如，神户著名的的欧克拉宾馆中有一家餐饮店，主要为那些希望不想长胖又想吃到美味餐饮的女性提供各种健康餐饮。ODA 组织所支援的 JICA 经营的餐饮店，也是提供这样的饭菜和饮料。

最近有很多人都喜欢在网上购买食物。Oisix 这家网上公司的菜谱当中，也有贴有 TABLE FOR TWO 标志的面包的鲜榨果汁。百吉圈面包在日本非常受欢迎。在这家店中有 TABLE FOR TWO 的百吉圈面包和普通的百吉圈面包，前者的

价格要高出 20 日元。如果按照普通的想法，同样的面包，大家会买那种普通的百吉圈面包，但是出乎意料的是，TABLE FOR TWO 的百吉圈面包卖得更好。这家店热卖的前三位，都是 TABLE FOR TWO 的食品。第三位与第四位的销售额差距有三四倍之多。我本人也非常吃惊。在报纸上也报道说是产生了一种新的消费模式。在此之前，大家都是选择便宜的东西，但是其实消费者还是倾向于购买其中包含对社会对环境有所贡献元素的商品。因此，即使价钱稍微高一点，只要对社会有所贡献，还是会受到消费者关注的。

我们邀请到了在日本非常有名的叫三国的厨师来制作外卖的便当。有关健康菜单和普通菜单，大家普遍的观点是普通菜单很好吃但是不健康，而健康菜单虽然对身体好但是却不好吃。但是我们考虑的是让大家知道其实可以做到既健康又好吃的饭餐。所以我们特别邀请了著名的三国先生来为我们制作既营养又美味的饭菜。这些盒饭在三越商场出售，虽然价格稍贵，但是一售而空。我也品尝过，的确非常好吃。我们正在继续向三国先生和其他厨师请教如何能够做出更多好吃又健康的盒饭。

最近我们推出的是陈麻婆豆腐。麻婆豆腐在日本非常受欢迎，但是陈麻婆豆腐中加入的，不是豆腐而是豆腐渣。豆腐渣非常有营养，而且非常健康，但是大多数情况下人们却不吃这些东西。餐馆经营者也认为把这些东西扔掉太可惜了。所以我们请厨师用这些平时被扔掉的豆腐渣做了麻婆豆腐。而且我们力争把卡路里值也尽量地减低。这款麻婆豆腐非常受欢迎，并且得到了电视媒体的报道。我本人也很喜欢麻婆豆腐，但是因为吃多了会发胖，所以又有点担心。但是这种麻婆豆腐不会让人发胖，又使用了豆腐渣，还可以向别人捐赠 20 日元，

图 13: 开始支援建设厨房



所以大受欢迎。这种食品在中国肯定也会受欢迎。

很多顾客通过便利店参与进了这项活动。横滨市长中田先生在横滨市的“3F”向市民推出了各种各样的健康菜单和饮料。便利店里有些盒饭并不好吃，所以我们请三国先生进行了改进。健康饮品的3%（4日元）作为捐赠款。在日本购买一瓶这样的饮料，捐款就能够在非洲捐赠一瓶饮料。便利店之前也在出售这种健康饮料，但是当我们想顾客说明这是TABLE FOR TWO的饮料，购买之后可以捐善款之后，很多客人都来购买，销售额增长了12%。店方也非常高兴，希望能够更多的进货。

刚才我们说到了水源，我们去现场看了一下发现了很多之前并没有注意到的问题。从我们的角度来说，原本以为只要把捐款给当地，就会有午餐送给孩子们，但是实际情况是，当地根本连厨房都没有。我们想去看看当地的厨房，可是看到的却是一间一阵风就能吹倒的简陋草房。如果下雨的话，雨水会直接落入锅中，既不利于营养，还不容易生火。我们遇到了很多这种看似简单却非常重要的问题。

所以我们决定另外筹集资金，帮助当地先建造一间厨房。项目的名称叫做“大家的厨房捐赠计划”，只要有了厨房，我们捐赠的20日元就会被做出一顿安全高质量的午餐。可能的话，我们想今年建10间厨房，现在我们正在努力筹集资金。

总结

我们一开始就提出扩大事业，也许大家首先想到的是只要增加捐款的额度就能完成这个目标。确实能够得到捐款是很好的事情，但是无论是日本人还是中国人，在外吃饭的时候能够选择健康低卡路里的食物也是非常重要的。大家变得越来越健康才是最重要的事情。我们希望能够通过在所有吃饭的地方推广我们的健康食品，得到媒体宣传和学生的合作来扩展我们的事业。

最后，中国也是我们TABLE FOR TWO计划比较关注的国家之一。因为如果中国不行动的话，那么世界上很多的问题都不能很好地解决。20年之前，肥胖问题在中国还很少存在，而现在，中国是亚洲肥胖人群增长最快的国家。而且儿童的肥胖问题尤为突出，将来会发展成为一个严重的问题。

世界上的很多国家都是只有饥饿问题或者是只有肥胖问题，但是在中国，既有像在座的各位一样生活在大都市，有患肥胖疾病的人，也有营养不足的贫穷的人。世界上存在着各种各样的问题，但是在中国国内本身就存在很多问题，有必要在中国国内首先解决这些问题。刚才我讲过世界上肥胖的患者和遭受饥饿的人都有10亿，中国今后如何处理这个问题，与这两个问题的最终解决息息相关。特别是，虽然饥饿和营养失调问题慢慢得到解决，但是中国国人的肥

图 14



胖人数增加的程度，也直接关系到世界上肥胖问题的走向。

另外，现在粮食也是越来越不足，从海里能够捕获到的鱼越来越少，水资源也慢慢变少。如果中国国民都过量摄入食物和营养，对中国人来说，这本身也会发展成粮食不足问题，那世界更会陷入粮食危机。所以我对中国如何解决这一问题非常感兴趣。我希望在如何同时解决饥饿和肥胖问题上能够得到大家的建议。

主讲人简历

■ 近藤正晃 James (Masaakira James Kondo)

现任：

特定非营利活动法人 TABLE FOR TWO International 共同代表理事
 特定非营利活动法人 日本医疗政策机构 副代表理事 兼 事务局长
 东京大学先端科学技术研究中心 特聘副教授

简历：

1990年毕业于庆应义塾大学经济学部。1997年毕业于 Harvard Business School。进入 McKinsey & Company 后，先后在世界各国的分公司工作15年，其间主要从事政府的经济政策及跨国企业的国际战略方面的咨询工作。2003年开始参与创建运营东京大学医疗政策人才培养讲座。2004年参与创建特定非营利活动法人日本医疗政策机构。2005年的达沃斯世界经济论坛上被评为“全球青年领袖”，并与各国的“青年领袖”们共同确立 TABLE FOR TWO 的构想。2007年设立特定非营利活动法人 TABLE FOR TWO International，活动至今。

答疑

北京

主持人：孙建军

北京大学外国语学院
日本语言文化系副教授、
SGRA 会员



主持人

谢谢近藤先生。最后近藤先生又留给了在座的各位一些课题，让我觉得首先我们解决中国国内的粮食问题，或者是协调好饥饿和肥胖的平衡问题等等也十分重要。

下面，请大家提问题，提问之前请先说明所属的学校。今天来听近藤先生讲演的，有来自北京外国语大学，北京日本学研究中心，东北师范大学，北京第二外国语学院，浙江省一些大学的学生。请大家踊跃举手发言。

Q1

我是北京外国语大学的研究生。十分感谢近藤先生为我们做的精彩演讲。我看近藤先生非常健康，身材保持得也很好，我就想是不是先生平时也是食用这些 TABLE FOR TWO 的健康食品呢？如何可能的话，能不能请教一下 TABLE FOR TWO 的菜谱？

近藤

您过奖了。我并没有食用这些食品，但是有意思的是，在开始这个活动的时候，我还是有点胖的。我在美国的耶鲁大学的半年时间里，由于美国有各种

各样的食物，所以我自己虽然没有觉得吃了多少东西，还是越吃越多。因为美国人更胖，所以当时我还觉得自己属于比较瘦的。但是回国之后去参加 TABLE FOR TWO 的活动，大家却让我最好最近不要参加活动，因为我太胖了，像我这样身材的人去主持活动是不合适的，还让我每天都坚持跑步。我跑了一段时间之后，体重减轻了 3-4 公斤，恢复了原来的身材。

我自身也觉得很辛苦，要长期保持健康的生活习惯是很不容易的，特别是对于上了年纪的老年人来说更难。因为我本人其实也很喜欢甜食，所以不得不多加注意。

Q2 我是北京日本学研究中心的学生，想向近藤先生请教一个问题。中国作为一个发展中国家，还有很多特别贫困的地区。先生打算在中国推广这项事业？中国是作为捐赠方合适呢，还是作为接受捐赠方更合适？

近藤 这是一个非常重要的问题。我认为中国是首个能够同时解决这两个问题的国家。也就是说中国是一个既捐资，又接受支援的国家。贵国政府的代表也参加了上周的夏季达沃斯论坛，在会场里我们张贴了 TABLE FOR TWO 的海报。中国有很多有钱人，并且这些人所拥有的财富甚至是日本的有钱人所无法比拟的，我们希望这些大企业的领导者可以参与到我们的活动中来。同时，中国也存在着很多等待捐助的学校。

只是，我目前还不太清楚应该采取什么样的形式在中国的贫困地区提供午餐。虽然非常想开展这项活动，但是却不知道哪一种形式最有效，最有意义，也不太清楚应该从哪一个地区开始这项活动。在这一点上希望能够得到大家的指点。如果能在在中国同时解决这两个问题将是非常了不起的，同时在中国开展这项事业也将是我们迈出的重要一步，所以衷心希望能够顺利进行。

在中国的贫困地区应该采取何种形式开展这项事业我认为是非常重要的问题，以前也曾经跟企业方面探讨过，但是有必要进一步协商。如果大家有什么好的意见，也请一定要告诉我。如果能在在中国开展，将是一项了不起的事业。

主持人 大家在思考这个问题的时候也是尽量不要从争取改变政策为出发点，而是应该思考作为一个普通的中国人应该做出点什么。如果就近藤先生的事业框架大家能够提出新的看法的话，说不定会形成一个新的发展走向。

Q3 我是北京日本学研究中心的学生，听了先生的演讲，让我思考了很多问题。我有一个疑问。

刚才您提到了捐款，我觉得大家都比较关心那些捐款都被如何利用的问题。刚才先生说其中的 4 日元被抽取出来用作事务所的费用了，另外的 16 日元捐献给孩子们，或者是用于印刷材料向捐赠人进行汇报说明。那么实际情况

是按照这样进行的吗？非常遗憾的是在中国去年四川大地震之后收到了很多捐款，但是事后经过调查，大约有 100 名官员将一部分钱款装入了自己的腰包。在您的事业当中，有没有采取第三方监管的形式呢？

近藤

这是一个非常重要的问题。现在我们已经设置了来自外部的监察体系。在我们这项事业中，有很多人加入，当然我们也是其中的一员。例如，其中包括刚刚提到的哥伦比亚大学，Millennium Promise 和当地的一些工作人员以及从农家收集食材的工作人员。这些人都有可能将捐款放进自己的腰包，例如实际上我们并不需要抽取 5% 而是 2% 就足够的话，那么之前我们提出的 5% 就是不合适的，这是一个非常重要的问题。所以我们设置了 TABLE FOR TWO 的监察官。对于 Millennium Promise，不仅我们这一项计划要受到监察，整个事业运营都要收到监察。只是我们还有一点担心，就是监察官本人在遇到有人私吞欠款的情况时能否说出实话，从严监察。

在这个问题上我感觉到最难的事情就是平衡各方面的情况。如果完全信任我们的工作人员，那么是完全没有必要花钱用于监察。但是如果这样的话有可能出现贪污事件。另一方面，我们现在做的监察也许过于严格，我们不是去信任我们的工作人员而是要检查所有的购物小票，如果这样继续下去的话，那么将会花费大量的钱财，而且还会让我们的团队失去信任感。例如如果有工作人员说抽取 5% 可以完成任务而我说只要 2% 就可以的话，就必须对这个工作人员的所有购物小票重新检查，并且我们之间的信任关系也会越来越淡薄。

无论是从成本的角度说，还是从安全的角度说，都是要平衡两者的关系，降低浪费。刚才我说要将抽取的费用从 20% 降低到 15%，在日本，有很多事务所和工作人员将捐款的 50% 用作了事务费。也许还有团体用的更多。所以捐赠人都认为钱款都用到了受捐人那边，但实际上有一部分钱都被用于维持在东京的豪华事务所或者是在北京的事务所。为了努力减少这些现象的产生，我们引入了外部监察官制度。现在我还无法回答监察做到何种程度最好，但是很明显如果这项制度不继续下去，之前的一切努力都会半途而废。这是非常重要的。

主持人

我认为刚才的问题非常好。你是日本学研究中心的学生，那么如果对包括近藤先生事业在内的日本 NPO 进行考察分析，将会是一篇很好的日本研究，而且还能将日本的经验用于中国。

Q4

我是在听了您的演讲之后才知道 TABLE FOR TWO 这项事业的。我在思考为什么媒体报道如此之多，又经常在各种地方进行讲演的非常有名的团体，我到如今才知道。当然我常年生活在海外，不能及时了解日本国内的动向是其中的一个原因，但是也许还有其他的理由。TABLE FOR TWO 所涉及的是餐馆或者是咖啡店，便当店等已经做好的食物。那么回到日本之后我觉得我大部分时间还

是会在家里吃饭。我吃的是妈妈用胡萝卜呀辣椒等做出的饭，这些都跟 TABLE FOR TWO 没有关系，所以我才对 TABLE FOR TWO 不太了解。我们家一般从生活协会购买蔬菜，其他家庭也许会从超市购买，所以我想问一下 TABLE FOR TWO 有没有考虑能够与生活协会或者是超市合作？

还有一个问题是，我们已经知道了您事业的有益之处，那么能否告诉我一下您事业中遇到的难点或者是问题点？

近藤

我也希望能够跟超市合作，而且正在跟多家超市商讨。正像您说的，大部分人还是在家里吃饭，所以我也希望能够在这一方面有所突破。

您的第 2 个问题是关于我们现在的困难，例如说在超市中有非常健康的豆腐。假如我们说“这是 TABLE FOR TWO 的”。假如有顾客购买了我们这款豆腐，但是如果这名顾客又购买了零食、冰激凌等商品，那么他还是摄入了很高的卡路里。从这个角度来说，我们能保证一款商品健康，但是却不能保证顾客一餐饭都很健康。

超市方曾经问过我们如何能够保证顾客吃到的不是一个健康的食品而是一顿健康的菜肴这个问题。如果在一名顾客购买的众多的商品中只有一个 TABLE FOR TWO 的商品，那么能算是参与了 TABLE FOR TWO 的活动吗？还有一种情况是，同样是买了很多的东西，有的顾客可能是购买了一周的量，而有的顾客是准备一天消耗掉的，我们现在正在根据上述情况进行讨论。

问题点有很多，我个人感觉比较困难的现在有一个，这个问题也是事关我这一生的重大问题，那就是我希望能够尽快改变大家认为所有的问题都依靠政府来解决的这样一种想法。之所以开展 TABLE FOR TWO 这项事业，就是因为我在政府部门日常的工作中感觉到了其中的限制性，希望开从另一种全新的角度对问题加以解决。如果我跟很多企业等部门协作，还是会有人认为这些事情政府部门完全可以解决。如果我们想要在中国的贫困地区支援孩子们午餐或者是解决当地群众营养不足的问题，还是会有人认为为什么政府不来解决，而不会想到我们每一个个体都参与进来。

但是现在，日本与中国不同，过去的 20 年时间经济形势都非常低迷，是一个借款大国，政府也没有资金去解决这些问题。日本政府没有能力拿出相应的资金去支援非洲和印度的饥饿人口。如果明白这些事情的人再说依靠政府解决，那么结果只能意味着什么也不能做。

大家能够做这样一些小的事情，但是怎么做才好呢？我希望能够以这次 TABLE FOR TWO 为契机，给大家创造一个可以援助爱心的平台，能够让每一个人都轻松的加入进来，并将这项事业加以推广。将来我们在中国推广 TABLE FOR TWO 的时候，希望在座的各位都能够伸出您的援助之手，当然，也不仅限于支援 TABLE FOR TWO 活动，无论是环境保护问题，还是粮食问题，大家都可

以积极参与进来。在出现某些问题的时候，向政府提出建议非常重要，但是政府能力也常常有限，这时候就需要我们思考如何能够让我们大家都参与进来，如何能够使我们的事业持续、自然、健康发展。从某种意义上说，这对于我们也是一个巨大的挑战。

在与企业商谈的时候他们会说这些事情政府做就可以，希望企业捐款，他们就会说做不了这样的事情，总之会出现各种各样的问题。我想根本在于虽然世界上存在着很多问题，需要我们大家都积极参与，但是大家却想着总会有人来做这些事情。实际上是谁也没有来解决，所以最终留下了如此多的问题。最苦恼的是年轻人，因为他们是创造未来的，所以我希望他们能够改变想法，积极参与到慈善事业中去。也许我这个年龄已经难以改变，但是我希望在座的各位能够这样做。

主持人 刚刚近藤先生演讲的内容也是 SGRA 的目标之一，所以也希望大家能够支持 SGRA 的活动。

近藤 对，希望大家一定支持 SGRA 的活动。邀请我来讲演的正式 SGRA。

Q5 谢谢近藤先生。我来自北京第二外国语学院。我的专业是法语。我现在还十分后悔高考的时候报考的专业没有选择日语而是报考了法语。

我的父母现在就在一家健康保健品公司工作，这家公司对社会慈善事业也非常感兴趣。但是那家公司的产品有些特别，跟日常的饮食没有什么关系，而 TFT (TABLE FOR TWO) 是与我们的日常饮食有着密切关系的。我认为在向企业推荐 TFT 事业的时候，可能企业比较关心的是这能够给企业带来什么样的利益。

近藤 我认为您的问题可以理解为推广 TFT 对于企业来说有什么有利之处。请问您指的不是参加 TFT 的企业，而是实际上制造 TFT 产品的企业吗？对后者有什么有利之处？

Q6 例如说会不会提高企业的知名度或者是提高企业的社会贡献程度？

近藤 对企业来说一共有三点非常重要。现在日本最热点的问题就是从业人员的健康问题。不知道各位有没有在看过报纸上的相关报道，在日本很多人患有一种叫做内脏肥胖病的生活习惯病，也就是腰围稍微有点粗但是内脏中积攒了大量的脂肪。日本人 40 岁以上每年都要接受健康检查，患有内脏肥胖病的患者必须要接受相关的指导治疗。为了在健康检查时不要被查出患有内脏肥胖病，大家都在努力减肥。减少一名内脏肥胖病患者，社会上就会多一名健康的从业人员。这是最重要的一点。

第二点比较重要的问题是，现在很多企业每年都会撰写社会贡献报告（CSR REPORT）。很多人士都会关心某个企业为社会做了多少贡献。在这些报告中就会有我们的 TABLR FOR TWO 活动。但是如果看一下我们的活动机制就会发现，其实企业是没有捐献 1 日元的。在企业的职工食堂中，员工只要花费 20 日元参加 TABLR FOR TWO，那么就意味着企业没有花 1 日元也参加了 TABLR FOR TWO 的活动。

第三点是，有的企业也进行了捐款，可以借助捐款得到免费的宣传。

最后，刚才您提到您父母所在的公司是生产健康食品的，所以我想多说一句。有一些企业本身的产品就可以为我们的活动作贡献。例如因为 IBM 从事网页制作和数据管理的业务，所以可以在软件方面支持我们。或者有的公司因为生产健康食品，可以用多种方式为 TABLE FOR TWO 提供食材。希望您父母所在的公司也加入到我们的活动中来，以便在中国推广我们的 TABLE FOR TWO。

Q7

我是北京市的一名普通市民。对您的演讲我非常感兴趣。感谢您对支援贫困儿童所付出的努力。我想问的是，在您进行这些援助活动的时候，是通过当地政府来进行捐助的吗？如果是这样的话，您怎样保证当地政府不会把这些善款挪作他用？

近藤

正如您所说，现在很多人都在议论这个问题，无论是中央政府还是地方政府，都会发生集体或者是个人挪用公款的情况。发生这种情况的几率也比较多。

我们的活动现在虽然不需要通过当地政府，但是却需要当地政府和国际机构的协助。这些国际机构也会收取一定的费用。引进国际机构的原因也是在于调整与当地政府的关系，所以我们的捐款并不经过当地政府。我们之所以不在有战争的地区进行支援活动，就是因为要进出这些地区都要受当地政府控制，想要不通过政府部门来进行某些活动是不可能的。另外，就算我们能够顺利进入战争地区，要想对我们的活动进行清晰的记录也是很难的。

也许，今后在不清楚当地的确切情况时，我们还是暂时不会在那些特别贫困的地方开展我们的活动。我对这样的处理方式也有些意见，例如在乌干达当地的学校本身就是由政府来运营的。在学校里工作的都是政府的职员，老师们一周只来大约半周的时间。在去这所学校之前我还认为这些学校的老师很过分，为什么每周只有一半的时间来学校，但是去了之后才知道，这些老师其实是没有报酬的。所以这些老师在一周的其他时间都出去做家教来赚取生活费，而在学校都是义务劳动。打听之后发现这些老师都非常的了不起。由于上级的贪污导致他们拿不到薪水，但是他们却没有因此而耽误工作，制造麻烦。

但是，考虑到捐款人的心情，我们还是希望这些善款可以全部用到实处，所以现在的活动都尽量不通过当地政府，所以很多地方还没有开展我们的 TFT 活动。

Q8 我很佩服近藤先生的说服能力。我没有疑问，只有一条建议。我觉得现在 TFT 只是与食堂等跟饭菜有关的组织，如果目标不仅仅是健康食品而是健康的生活，那么就可以得到更多组织的协助。

根据我的经验，特别是一些旅馆，温泉或者是游戏厅，这些地方都有很多的年轻人。那么可否让这些在游戏厅玩儿的人也捐 20 日元呢？或者是在日本的老年人当中，有很多人每天都会去泡温泉，可否跟这些人探讨一下支援贫困地区人口的问题？注重身体健康的人，还会去健身中心，那么能否让这些人也为 TFT 做点什么呢？

近藤 谢谢，我会将你的提议当成作业以后慢慢完成的。在游戏厅打游戏是否健康我还心有疑问，但是我明白你的意思了。

您刚才的提议，对我来说非常重要。之所以 TABLE FOR TWO 从食品开始做起，就是因为像刚才我说到的，是因为我在大学的时候对食品问题非常感兴趣。而且贫困和肥胖人口都是 10 亿人，从大家互相帮助的意义上来说，从食品行业入手，让大家都能够吃的健康，吃得好，是非常有意义的。

但是，正像您刚才说的，我们也没有必要拘泥于食品，可以有更多的发展空间，例如气候变化，环境保护问题等都可以采取这样的运营机制。很多先进国家人均二氧化碳的排放量都很高，造成很多环境问题。由于不排放二氧化碳就不能取得文明进步，但是由于排放二氧化碳也带来一系列的问题。由于体系相同，我们还想将来开展环境保护活动。

只是，由于我们能力有限可能还暂时不能涉及游戏厅。我们希望能够与健身中心合作，如果在座的各位有兴趣，可以在将来与游戏厅探讨。因为我们的事业希望得到更多伙伴的帮助，也希望能够开发出多种模式，所以也希望各位能够多提宝贵意见。

主持人 最后的这个问题是向近藤先生提出的建议。因为我们今天讲演的副题是年轻人可以做什么，所以请大家一定考虑一下每一个人能够贡献的力量。下面请大家鼓掌感谢近藤先生演讲。

上海

主持人：范建亭

上海财经大学
国际工商管理学院副教授、
SGRA 会员



Q1

我是世界经济专业研一的学生。我一直对这种事业很感兴趣，今天来听您的讲演，感到非常的荣幸和激动。在近藤先生的演讲中我了解到，TFT 主要在学校或者是公司的食堂中开展，但是在中国，浪费现象更多的出现在一些酒店和饭店。在中国的很多饭店和酒店，很多菜动都没有怎么动就都倒掉了，确实非常的浪费。但是另一方面，我又感觉在中国推广您的这项活动似乎并不那么容易。首先，饭店的目的是为了多盈利，那么店方会尽量推荐比较高价的饭菜，让客人多消费，而作为消费方，一般是在饭店招待亲朋好友，自然会多点一些。再有一个问题是，如果要在酒店开展 TFT，对于酒店方来说并没有效益可言。首先酒店要引入 TFT 系统，是需要一定成本的，如果酒店提供 TFT 食物，那么就需要厨房另外开发食谱，这需要另外一种成本。在需要成本的情况下，如何让酒店有积极性去参与到 TFT 中来呢？

近藤

首先回答您如何在酒店树立 TFT 理念的问题。在日本，很多老年的男性由于在年轻的时候没有一种正确的健康理念，上了年纪之后就会患上各种各样的疾病。另外大家都知道，现在日本的女性越来越多的活跃在社会上，而日本的女性十分注意自己的身材，严格的控制每一餐饭的卡路里量。并且这种健康理念已经在世界上的很多国家形成热潮，所以希望中国的年轻人也能够建立这样的健康理念。您的第二个问题是厨师设计的饭菜能否为大家所接受的问题。在日本现在的情况是所有加入 TFT 活动的厨师所提供的菜谱都会在网上加以公示，把公众点击量或者是投票率较高的饭菜优先推广到 TFT 计划中。通过这样一种方式来解决您的第二个问题。比如说，大家知道日本的拉面很好吃，但是

同时拉面的卡路里较高，因而很多日本的女性都在忍受着拉面的诱惑，尽量不去吃。但是最近有一家拉面馆推出了一款“美肌”拉面，在降低了卡路里的同时加入了丰富的胶原蛋白，所以很多女性都会慕名而来，反而提高了这家面馆的销售量。在日本的拉面馆之间为了竞争，是不会公开自己面馆的配方的，如果您还有什么好的方法的话，也请一定告诉我。

Q2 我是外语学院四年级的学生。一共有三个问题。第一个问题是参与 TFT 的人员有多少，规模有多大。如果大家都是以志愿者的身份参与进来的话，那么近藤先生是否拿薪水呢？如果大家都不拿薪水，那么这些工作人员的干劲儿又是从哪里来的呢？

近藤 我是不领取薪水的，但是其他的人会有一些报酬。刚才演讲中提到的三个人他们虽然会拿薪水，但是薪水也不是很高。比如说演讲中提到的小暮真久先生，他在麦肯锡工作时候的薪水应该是现在的几倍或者是几十倍。之所以小暮先生辞去麦肯锡的工作而来 TFT 做全职，我觉得有两点原因。其中最大的原因是他能从这项工作中获得一种愉悦感。而获得愉悦感的前提有两个，一是对这项工作你要有自信，二是你的工作要得到大家的认可。TFT 是一项全新的事业，小暮先生通过他本人的努力，得到了大家的认可，他是非常快乐的。所以 TFT 核心成员的薪水虽然很低但是干劲儿十足，原因也在于此。在我们当年毕业的学生当中有 40% 的人都进了麦肯锡公司，另外 40% 的人进了当地的城市银行，这 80% 的毕业生薪水都是非常高的，但是其中却有些人感觉到不幸福。也就是说，虽然他们薪水很高，却没有从工作中获得一种愉悦感，而小暮先生等人通过在 TFT 工作，恰恰获得了这种愉悦感。

Q3 我的第二个问题是，在您的演讲中我了解到，TFT 最初推广的中心是一些企业的职工食堂，那么在与该企业社长进行交涉时，如果对方提出金钱的要求，您会怎么说服对方呢？

近藤 我打过交道的社长，大部分都是热衷于获取利益的，像我刚刚在演讲中提到的，如果公司不注重员工的健康情况，那么将会有很大的支出用于员工的疾病治疗，所以我首先用这一点来说服对方。第二个用该说服对方的方法，是告诉对方参加 TFT 计划对于该企业的品牌是非常重要的，而且能够通过参与这项活动来得到消费者和本企业职员的认可。如果以上两点还不能说服对方，那么我就告诉他，其实这 20 日元是由职员来出的，企业不用出一分钱，既能获得职员的健康，又能树立企业形象来更多的占有市场，是有百益而无一害的。所以，我通过上述三点来说服对方。

Q4 我的最后一个问题是，您是第一次来上海，为什么没有选择复旦大学而是在财经大学来进行您的演讲呢？财经大学的学生非常擅长精打细算的，那么近藤先生您将如何说服我们这些精打细算的学生也拿出 20 日元来参与这项活动呢？

近藤 将来如果在世界上推广 TFT，或者是更大一些的计划，比如说环境保护计划，医疗计划等等，这些都需要一定的成本，这就需要像在座的各位一样善于精打细算，甚至是“小气”的人来操作，没有这些人才，各种计划是无论如何不能推广的。如果在座的各位都是擅长精打细算的人才的话，我就来对了。

Q5 我是财经大学日语系 4 年级的学生。TFT 当初推广的时候为什么选择的是非洲而不是印度或者是中国。您可能除了北京和上海之外也没有去过中国其他的一些地方。而在中国西部的一些山区，存在着一些比非洲更为贫穷的地区。

近藤 您的问题非常重要。确实，在 TFT 计划刚刚开始的时候，确实曾经有过很多的争论。我们制定了几个指标。首先是食物的不满足率。也就是整个国家有多少人口缺少食物。第二个指标是看水源的缺乏率。第三个指标是不满 5 岁儿童的死亡率。通过这三个指标来对比中国，印度和非洲，最终选择了非洲。以上是科学量化的根据。另外，印度和中国人口众多，同时存在着肥胖和饥饿两种人群。所以我希望在这两个国家中能够找到一种办法，在这两个国家中同时解决这两个问题。如果在座的各位能够有好的想法来解决这些问题，希望请各位一定告诉我。

Q6 我是国际贸易专业二年级的学生。我想提几点建议。第一，是刚才您提到了通过加入 TFT 计划能够使职员获得健康，那么可以将一些具体的数据量化分析，我认为量化的数据比语言更具有说服力。第二，既然每个参与者都捐出了 20 日元钱，那么最好也把这 20 日元的去向也调查清楚，形成报告。捐赠者看到这些报告之后，应该更有积极性参与这项计划。第三，这项计划主要还是依靠企业，所以应该向企业提供更为详尽的数据。第四，因为中国人都具有强烈的爱国心，那么在中国推广这项计划的时候，可以加入爱国元素，会在中国更易于推广。最后，20 日元对于日本人来说只相当于一餐饭的 25 分之 1，而 20 日元在中国却相当于普通人一餐饭的 5 分之 1，所以可能在一些先进国家开展这项计划更有实际意义。另外我还有一个问题，比如说 TFT 的一餐午饭是 500 日元，那么是向员工收取 520 日元呢，还是从这 500 日元中抽取 20 日元作为捐款呢？

近藤 TFT 的午餐价格中已经包含了 20 日元，会比其他的午餐高 20 日元，不用

消费者再另外支付。刚才您的建议非常重要，并且其中的几条已经在实施，在今后的活动推广中会继续参考你的建议。

Q7 您好，我是 13 年之前在财大学习过的学生，时间已经过去很久了，我现在在慈善公益领域工作。我对 TFT 这个想法非常的感兴趣。我想问一下，近藤先生他们从 20 日元中抽取的 4 日元是否足以支撑 TFT 的运营，因为他有三个核心人员还有一大批志愿者，那么如果他想快速扩大他的 TFT 事业的时候，这部分费用能否够用？

近藤 谢谢，这是一个只有学经济的人才会提出的问题。从 20 日元中提取 4 日元作为成本，那么如果要扩大 TFT 事业，我们需要 5 倍的成本。当然，如果 TFT 更加扩大，我们提取的成本也会越来越多。是相辅相成的关系。在最初的两年中，这些钱肯定是不够的。除此之外，我们说服参加 TFT 的企业社长对 TFT 事业进行捐款，承诺是只需要他们捐款 3 年时间。

Q8 我注意到近藤先生毕业于哈佛的经济学院，那么我想问一下当初在创建 TFT 的时候，有没有考虑过不采用 NPO 的形式而是采取一种社会企业的形式？用社会企业产生的利润来推动 TFT 的推行。尤其是您从事的是有关食品的公益事业，那么社会企业可以提供相关的配餐服务或者是菜单的设计等工作，这些工作都会产生一定的利润。那么在当初您为什么没有采取社会企业的形式？另外，现在 TFT 已经有了一定的规模，那么您有没有考虑在 TFT 旗下设立社会企业来产生利润，支持 TFT 的运营？因为我们知道现在 NPO 筹款越来越困难，那么开办社会企业会不会是您将来的一个发展的方向？

近藤 这个问题当初我们也考虑了很多，也曾经考虑过设立社会企业。之所以没有设立社会企业，理由有两个。其一是，当初我们也可以不让这些企业捐款三年而是让他们以股东的形式加入。但是这样一来，我们的 TFT 就会成为为了这些股东而工作而不是为了 PUBLIC（大众）服务。我们的理念从一开始就是为了一般的大众，所以没有以社会企业的形式来运营 TFT。我本人也并不反对将来在 TFT 旗下设立一些社会企业。

Q9（Q9）我补充一下。我所说的社会企业，也指的是用商业的运作来支持 TFT 的运营，产生的利润也只能用于 TFT 的再扩大，这与近藤先生的主旨并不矛盾。（近藤）是的。但是既然有股东的加入，就不可能不考虑到股东的要求，所以企业会或多或少的受股东的影响，所以没有采取社会企业的形式。

Q10 TFT 能够同时解决肥胖和饥饿这两个问题，我感到很佩服。因为现在有多

人从事的是解决其中一个问题。在世界有大大小小的团体致力于解决这两个问题中的一个。那么近藤先生有没有考虑过与这些团体建立一定的联系。比如说解决当地的厨房问题，设计菜谱等等，都需要一些具体的团体来解决，TFT 有没有考虑过只要做好其中的连接就可以了呢？

■ 近藤 我认为这个问题很好，在发展自己的事业的时候，较好地发展自己的长处，借用别人的力量是非常重要的。但是现在的状况是，还没有特别专业的机构来解决这样的世界性问题。例如说向当地的学校提供午餐，那么什么样的饭菜才是最营养卡路里最低的，这些都需要具体的数据分析，这些都是由 TFT 来具体监督。

■ Q11 现在有一些慈善机构致力于解决贫困儿童的粮食问题，那么 TFT 有没有考虑与这些机构合作呢？

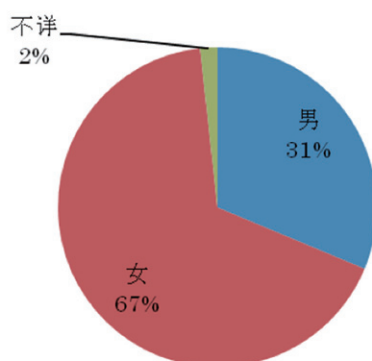
■ 近藤 也有联络。因为我们不光通过职工食堂来获得捐款，同时还会寻求与美国一些慈善机构合作，让这些慈善机构按照每位儿童 20 日元的标准捐款，我们把其中的 16 日元捐赠给当地的贫困儿童。

■ 主持人 由于时间关系，如果大家还有问题的话，请在会后与近藤先生单独交流。十分感谢近藤先生给我们做了精彩的演讲。

有关论坛的问卷

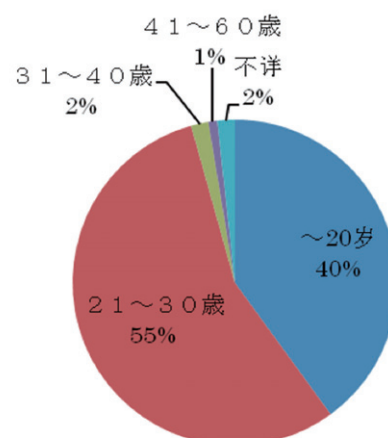
答卷者性别

男 36
女 77
不详 2



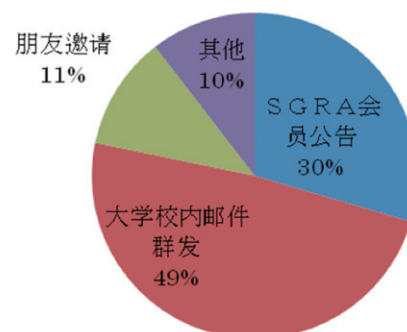
答卷者年龄

~ 20 岁 46
21 ~ 30 岁 64
31 ~ 40 岁 2
41 ~ 60 岁 1
不详 2



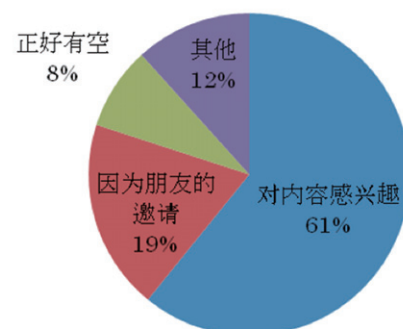
(1) 从何种途径得知此次论坛。

SGRA 会员公告 34
大学校内邮件群发 56
朋友邀请 13
其他 12



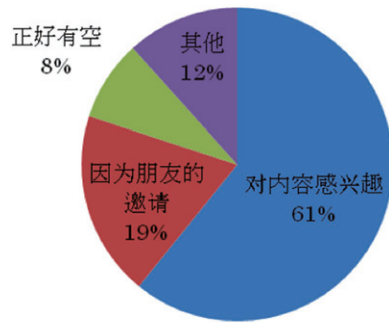
(2) 您为什么要参加这次论坛?

对内容感兴趣 73
因为朋友的邀请 23
正好有空 10
其他 14
* 有重复



(3) 这次论坛内容是否达到您的预期?

超出预期 48
基本符合预期 64
没有达到预期 3



在日本大家比较关注的小事情也能够对他人有帮助

知道了有关公益事业的新想法

了解了 NPO

非常赞成 TFT 计划, 如果可能希望也能加入

感服感慨于自己平时思考的问题在日本国内已经得到实施

了解了地道的日语和 SGRA 活动

观点新颖; 企业除了重视利益之外还应该重视对社会的责任

了解了年轻人的就业选择和世界问题

希望能在中国发起像日本的 NPO 类似的组织

让我思考了很多

是一个非常有意义的课题

通过近藤先生的讲演了解了运营 NPO 组织需要的智慧

能够同时解决肥胖和贫困问题非常了不起

有点担心是否能够顺利运营

实际感受到了公益活动的伟大之处

想法非常独特

希望在中国也开展这样的活动

感慨于能够将美好的愿望付诸于行动

了解了世界性问题

了解了 NPO 的运营机制

有些地方不是很明白

感受到了社会企业的责任和志愿者的价值

了解了公益活动

通过 TFT 了解了世界的健康问题和食品问题

知道了很小的力量也能够为别人带来幸福

开始思考为了别人自己能做些什么

了解了 TFT 计划 3

在此之前, 公益事业的相关信息只能通过官方网站查询, 现在知道了 TFT, 非常好

TFT 很棒!

了解了日本的学者和 TFT

了解了社会企业的运营机制

练习了听力

开阔了视野

之前我曾经做过地卡路里的食品, 但是能够将这项工作和帮助贫困人口结合起来, 非常有创意。

从很久以前我就对 TFT 非常感兴趣

了解到了新鲜的想法

了解了消费也能够为社会作贡献

知道了 TFT 系统的社会价值

知道了用一件事解决两个问题的方法

知道了世界的新动向

明白了新鲜事物

增长了见识

开拓了视野, 让我思考了很多

理解了 TFT 活动及其社会意义

TFT 在“世界大爱”的前提下为社会做出了贡献, 很了不起

是一个很有意义的计划, 为世界和平做出了巨大贡献

这是一个全球性问题, 我被深深吸引

(4) SGRA 今后将继续在中国的大学中开展介绍民间公益活动的论坛，你希望今后听到什么样的内容？

环境问题 1 5	希望能够用英语讲座 2
有关 NPO 5	有关帮助贫困人口的话题
能够简单参与的公益活动 5	贫困儿童的救援
有关 T F T 5	经济发展和环境保护问题
有关大学生参与 TFT 的信息 4	中国经济的发展问题
在中国如何推广 TFT 3	社会问题
政治情势和和平问题	想了解社会企业的相关知识
留学	农村教育问题 2
健康问题 2	如何帮助农民工子女
日本企业在中国市场的发展	中国西部地区贫困儿童的教育问题
SGRA 在中国的活动动态	教育公平问题 3
与学生有关的活动	发展中国的教育问题 2
日本文化；旅行；日语学习	日本的文化习惯和世界问题
日本的教育	学校援助
日本经济	日本文化和日本民众思想与 NPO 的关系
食品安全问题 2	社会问题和每一个公民的关系
教育、文化	日本的特色
资源问题 2	社会性问题；解决饥饿、贫困、贫富问题的方法
世界范围内现在急需解决的问题	世界各国的经济模式
人人都能够轻松参与的公益活动 5	人口问题
我认为只要是社会题目，都能够推广开来	世界发展问题
城市生活的压力	解决世界问题的新想法
医疗问题 2	给儿童的捐款问题
社会企业的运营机制	年轻人能够做的事情
贫富差距 5	反映日本年轻人对中国印象的活动
有关现实生活的社会问题	年轻人的心理健康
高级商品的消费问题	儿童教育
日本的礼仪、文化	经济全球化形势下青年的交流和青年人的压力
大学生如何能够顺利融入社会	对日本或亚洲中小企业的支援活动

(5) 如果方便, 请您写出对 SGRA 的期望。

下次论坛也希望在上海财经大学召开!

希望能够在大学中进行宣传 9

希望内容更加充实 3

希望今后能够持续得到 TFT 的相关信息

TFT 工作人员不断增加过程中的运营方法

希望能够将 PPT 做成日英双语版面

希望了解日本之外的数据

应该将大家的问题归纳之后, 再将其中有代表性的问题向演讲者提问

希望能够用 VTR 进行说明

还想继续听这样的演讲

希望今后继续努力

希望看到有中文解释的 PPT 2

希望今后能够完善演讲设备 2

希望能够用英语讲座 2

希望在中国多举办这样的论坛

希望了解在中国开展这种活动的困难

希望能够加大活动的宣传力度

我们能够为了 TFT 做什么?

希望完善讲座设备

演讲后印象不是很深刻

希望能够用具体数据进行说明

希望能够在上海财大举办这样的论坛

希望能够用中文、英语、日语三国语言进行演讲

希望继续努力, 将这样了不起的想法让更多的人了解

希望看到英文的资料

希望能够介绍一下与中国显示相关的 TFT 计划

希望能够具体介绍一下世界各地的实施情况

后
记

第4届 SGRA 中国论坛

“TABLE FOR TWO” 活动报告书

首次搭乘从上海到东京羽田机场的班机非常顺利，和这次乘坐的其他班机一样都是座无虚席。每次旅行都让我感到了东南亚人民的交流是越来越频繁，而且和以往一样，我被中国发展的动力和能量所折服。

从旁听论坛之前的“全球化时代下的制度变革”南开大学国际研讨会，到论坛结束后去上海世博会建筑工地参观，让我度过了十分充实的一周。在这里，向南开大学的杨栋梁先生、宋志勇先生和上海设计学院的潘政威先生和其他所有给予支持和帮助的各位人士表示由衷的感谢。

承蒙宋刚先生和范建亭先生的大力支持，使得在北京和上海召开的中国论坛得以圆满闭幕。今年的演讲者近藤先生和参加者年龄相近，加上话题具有时代感，所以容易唤起听众的共鸣，也使得两场会议在轻松友好的氛围下增进了交流。在上海财经大学，关心社会创业的学生还分发了自己组织的活动报告和说明，年轻人之间所传播的全球化浪潮之快确实让人惊叹。SGRA 中国论坛打算于明年九月在北京和呼和浩特召开，希望大家届时光临。

（SGRA 代表 今西淳子）

【北京】

第4届中国论坛于今年9月16日在北京外国语大学日本学研究中心3层的多功能厅盛大召开。这是继2006年北京大学召开的讨论会“青年的未来与日语”、2007年北京大学及新疆大学举办绿色地球网络事务局长高见邦夫先生的演讲“黄土高原绿化合作15年：从不理解与失败到相互理解与信任”、2008年北京大学及延边大学举办的亚洲学生文化协会常务理事工藤正司先生的演讲“星星之火可以燎原～同亚洲留学生一起走过的协会50年”之后的第4次论坛。此次论坛的题目是“TABLE FOR TWO ～面对世界性课题、当代青年的可能性～”，由特定非营利活动法人 TABLE FOR TWO International 共同代表理事近藤正晃 James 先生进行了精彩演讲。

9月16日下午4点，论坛准时召开，在今西淳子代表和国际交流基金会北京事务所副所长小岛宽之先生致辞后，主持人孙建军先生向会场近70名听众介绍了近藤正晃 James 先生。

近藤先生告诉我们，目前世界上死亡及生病的两大原因分别是肥胖和饥

饿，而力图将这两大因素同时消灭正是 TABLE FOR TWO(TFT) 的目的所在。其后，近藤先生又生动地给在场听众讲述了该组织今年的活动成果及事例。

具体说来，TFT 活动在日本于 2007 年 2 月开始展开，到 2009 年 6 月为止，就已有包括鹿岛建设在内的 130 余公司团体、200 余个事业所参加，并得到了以参议院、众议院为首的多数官厅公共机关、地方政府、大学、医院等的协力配合。活动内容主要是在日本等先进国家，通过减少从业人员一餐的热量节约 20 日元，再将该费用通过 TFT 事务局捐献到非洲等发展中国家的学校，从而成为孩子们饭桌上的伙食。通过活动的展开，在乌干达、卢旺达、马拉维 3 个国家取得了显著的成效，孩子们的“营养状态得到了改善、进而促进了他们的健康成长”，“从引入供给伙食制度后的半年到 1 年的时间里，学生人数增加了近两倍”，“毕业班级的 50 人中，有 42 人通过了中考”。到目前为止，TFT 累计援助伙食已超过 104 万份，并且该组织正在逐步地在餐饮、物流、便利店等产业开拓活动空间。在演讲的最后，近藤先生向听众谈起了他的抱负，那就是今后将要在全球范围内开展此项活动。

听了近藤先生精彩的演讲，会场里的气氛也格外活跃，听众就“近藤先生自身的减肥菜单”、“TFT 活动的运营体系与监督体制”、“与中国企业合作的可能性”等许多问题，与近藤先生交换了意见。在延时 15 分钟后，6 点 15 分，由李恩民教授致闭幕词，第 4 届中国论坛落下了帷幕。

交流晚宴在北外宾馆的餐厅举行，由于是自由出席，有近 40 人参加了晚宴。通过这次论坛，TFT 在中国国内首次得以认知，并获得了热烈反响，成为了 TFT 活动向日本以外的国家发展的一个良好契机。

（文責：宋剛）

【上海】

9 月 7 日晚，SGRA 上海论坛在上海财经大学召开。主题为“TABLE FOR TWO”，内容和前几日在北京外国语大学举办的北京论坛内容相同。当我知道北京论坛的演讲有 70 名学生参加后，对于上海财经大学会有多少人来听倍感不安。原因是上海财经大学规模小，与财经有关的专业学生占了大半，而日语专业的学生每届也只有两个班，他们对于日本的情况以及社会公益和志愿者等抱有多大兴趣我都不甚清楚。再者，当天的天气不好，从一早就开始下雨，这就更加剧了我的担心。

不过到了既定的时间，演讲前二十分钟还空荡荡的教室不断有学生陆续进入，坐满了大半个教室，最后有将近 100 个学生来听讲座。第二天向学生确认后得知二年级和三年级的学生占大多数，一年级、四年级学生以及硕士研究生也有人参加，其中日语专业学生约占三分之一。

尽管投影仪上所放的 PPT 是日语写成的，演讲者近藤先生也用日语做演讲，但

是在北京大学博士生刘健（SGRA 研究员）高水平的翻译下，演讲得以顺利进行。到了问答环节，学生们提出了很多问题，演讲结束后还有人围着近藤先生继续提问，这些都让我感到很欣慰。这其中尽管有人直接用日语发问，但还是有必要进行翻译，所以花费了一定的时间，结束时间也比预计晚了一个小时。

虽说逐句口译的演讲效率不高，但是全程长达三个小时还是让我感到意外。此外，由于会场是普通的教室，临时增加的话筒效果也不是很好，这些都是有待进一步改进之处。尽管如此，演讲总体上还是成功的。近藤先生提到，学经济的和学日语的学生提的问题就大不一样。而实际上这次论坛能够成功举办的主要原因还是近藤先生精彩的演讲，其颇具魅力的讲话方式可以说比大学老师还出色。

从回收上来的关于此次论坛的问卷调查结果来看，大部分参加者认为能够理解论坛的主旨，并有所收获。我认为，通过此次演讲，不仅向中国学生传递了来自日本民间的全球性社会贡献运动，也能够拓宽他们的视野。贫穷和环境污染等世界性问题值得认真考虑，也期待中国青年能够加入像 TFT 这样致力于社会贡献的公益性活动。

（文责：上海财经大学 /SGRA 范建亭）

SGRA レポート バックナンバーのご案内

- SGRA レポート 01 設立記念講演録 「21世紀の日本とアジア」 船橋洋一 2001. 1. 30 発行
- SGRA レポート 02 CISV 国際シンポジウム講演録 「グローバル化への挑戦：多様性の中に調和を求めて」
今西淳子、高 偉俊、F.マキト、金 雄熙、李 來賛 2001. 1. 15 発行
- SGRA レポート 03 渥美奨学生の集い講演録 「技術の創造」 畑村洋太郎 2001. 3. 15 発行
- SGRA レポート 04 第1回フォーラム講演録 「地球市民への皆さんへ」 関 啓子、L.ビッヒラー、高 熙卓 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート 05 第2回フォーラム講演録 「グローバル化のなかの新しい東アジア：経済協力をどう考えるべきか」
平川 均、F.マキト、李 鋼哲 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート 06 投稿 「今日の留学」「はじめの一步」 工藤正司 今西淳子 2001. 8. 30 発行
- SGRA レポート 07 第3回フォーラム講演録 「共生時代のエネルギーを考える：ライフスタイルからの工夫」
木村建一、D.パート、高 偉俊 2001. 10. 10 発行
- SGRA レポート 08 第4回フォーラム講演録 「IT教育革命：ITは教育をどう変えるか」
臼井建彦、西野篤夫、V.コストプ、F.マキト、J.スリスマンティオ、蔣 恵玲、楊 接期、李 來賛、
斎藤信男 2002. 1. 20 発行
- SGRA レポート 09 第5回フォーラム講演録 「グローバル化と民族主義：対話と共生をキーワードに」
ペマ・ギャルポ、林 泉忠 2002. 2. 28 発行
- SGRA レポート 10 第6回フォーラム講演録 「日本とイスラーム：文明間の対話のために」
S.ギュレチ、板垣雄三 2002. 6. 15 発行
- SGRA レポート 11 投稿 「中国はなぜWTOに加盟したのか」 金香海 2002. 7. 8 発行
- SGRA レポート 12 第7回フォーラム講演録 「地球環境診断：地球の砂漠化を考える」
建石隆太郎、B.ブレンサイン 2002. 10. 25 発行
- SGRA レポート 13 投稿 「経済特区：フィリピンの視点から」 F.マキト 2002. 12. 12 発行
- SGRA レポート 14 第8回フォーラム講演録 「グローバル化の中の新しい東アジア」
+宮澤喜元総理大臣をお迎えしてフリーディスカッション
平川 均、李 鎮奎、ガト・アルヤ・プートゥラ、孟 健軍、B.ヴィリエガス
日本語版2003. 1. 31 発行、韓国語版2003. 3. 31 発行、中国語版2003. 5. 30 発行、英語版2003. 3. 6 発行
- SGRA レポート 15 投稿 「中国における行政訴訟—請求と処理状況に対する考察—」 呉東鎬 2003. 1. 31 発行
- SGRA レポート 16 第9回フォーラム講演録 「情報化と教育」 苑 復傑、遊間和子 2003. 5. 30 発行
- SGRA レポート 17 第10回フォーラム講演録 「21世紀の世界安全保障と東アジア」
白石 隆、南 基正、李 恩民、村田晃嗣 日本語版2003. 3. 30 発行、英語版2003. 6. 6 発行
- SGRA レポート 18 第11回フォーラム講演録 「地球市民研究：国境を越える取り組み」
高橋 甫、貫戸朋子 2003.8.30 発行
- SGRA レポート 19 投稿 「海軍の誕生と近代日本—幕末期海軍建設の再検討と『海軍革命』の仮説」
朴 榮濬 2003.12.4 発行
- SGRA レポート 20 第12回フォーラム講演録 「環境問題と国際協力：C O P 3の目標は実現可能か」
外岡豊、李海峰、鄭成春、高偉俊 2004. 3. 10 発行
- SGRA レポート 21 日韓アジア未来フォーラム 「アジア共同体構築に向けての日本及び韓国の役割について」 2004. 6. 30 発行
- SGRA レポート 22 渥美奨学生の集い講演録 「民族紛争—どうして起こるのか どう解決するか」 明石康 2004. 4. 20 発行
- SGRA レポート 23 第13回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか」
宮島喬、イコ・プラムティオノ 2004.2.25 発行
- SGRA レポート 24 投稿 「1945年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助：その評価の歴史」 フスレ 2004. 10. 25 発行
- SGRA レポート 25 第14回フォーラム講演録「国境を越えるE-Learning」
斎藤信男、福田収一、渡辺吉鎔、F.マキト、金 雄熙 2005. 3. 31 発行
- SGRA レポート 26 第15回フォーラム講演録「この夏、東京の電気は大丈夫？」 中上英俊、高 偉俊 2005.1.24 発行
- SGRA レポート 27 第16回フォーラム講演録「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」
竹田いさみ、R.エルドリッヂ、朴 榮濬、渡辺 剛、伊藤裕子 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート 28 第17回フォーラム講演録「日本は外国人をどう受け入れるべきか-地球市民の義務教育-」
宮島 喬、ヤマグチ・アナ・エリーザ、朴 校熙、小林宏美 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート 29 第18回フォーラム・第4回日韓アジア未来フォーラム講演録「韓流・日流：東アジア地域協力におけるソ
フトパワー」 李 鎮奎、林 夏生、金 智龍、道上尚史、木宮正史、李 元徳、金 雄熙 2005. 5. 20 発行

- SGRA レポート 30 第19回フォーラム講演録 「東アジア文化再考－自由と市民社会をキーワードに－」
宮崎法子、東島 誠 2005. 12. 20 発行
- SGRA レポート 31 第20回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合：雁はまだ飛んでいるか」
平川 均、渡辺利夫、トラン・ヴァン・トウ、範 建亭、白 寅秀、エンクバヤル・シャグダル、F.マキト
2006. 2. 20 発行
- SGRA レポート 32 第21回フォーラム講演録 「日本人は外国人をどう受け入れるべきか－留学生－」
横田雅弘、白石勝己、鄭仁豪、カンピラパーブ・スネート、王雪萍、黒田一雄、大塚晶、徐向東、角田英一
2006. 4. 10 発行
- SGRA レポート 33 第22回フォーラム講演録 「戦後和解プロセスの研究」 小菅信子、李 恩民 2006. 7. 10 発行
- SGRA レポート 34 第23回フォーラム講演録 「日本人と宗教：宗教って何なの？」
島蘭 進、ノルマン・ヘイヴンズ、ランジャナ・ムコパディヤヤー、ミラ・ゾンターク、セリム・ユジェル・ギュレチ
2006. 11. 10 発行
- SGRA レポート 35 第24回フォーラム講演録 「ごみ処理と国境を越える資源循環～私が分別したごみはどこへ行くの？～」
鈴木進一、間宮 尚、李 海峰、中西 徹、外岡 豊 2007. 3. 20 発行
- SGRA レポート 36 第25回フォーラム講演録 「ITは教育を強化できるか」
高橋富士信、藤谷哲、楊接期、江蘇蘇 2007. 4. 20 発行
- SGRA レポート 37 第1回チャイナ・フォーラム in 北京 「パネルディスカッション『若者の未来と日本語』」
池崎美代子、武田春仁、張 潤北、徐 向東、孫 建軍、朴 貞姫 2007. 6. 10 発行
- SGRA レポート 38 第6回日韓フォーラム in 葉山講演録「親日・反日・克日：多様化する韓国の対日観」
金 範洙、趙 寛子、玄 大松、小針 進、南 基正 2007. 8. 31 発行
- SGRA レポート 39 第26回フォーラム講演録「東アジアにおける日本思想史～私たちの出会いと将来～」
黒住 真、韓 東育、趙 寛子、林 少陽、孫 軍悦 2007. 11. 30 発行
- SGRA レポート 40 第27回フォーラム講演録「アジアにおける外来種問題～ひとの生活との関わりを考える～」
多紀保彦、加納光樹、プラチャヤー・ムシカシントーン、今西淳子 2008. 5. 30 発行
- SGRA レポート 41 第28回フォーラム講演録「いのちの尊厳と宗教の役割」
島蘭進、秋葉悦子、井上ウイマラ、大谷いづみ、ランジャナ・ムコパディヤヤー 2008. 3. 15 発行
- SGRA レポート 42 第2回チャイナ・フォーラム in 北京&新疆講演録「黄土高原緑化協力の15年－無理解と失敗から相互理
解と信頼へ－」 高見邦雄 日本語版、中国語版2008. 1. 30 発行
- SGRA レポート 43 渥美奨学生の集い講演録 「鹿島守之助とパン・アジア主義」 平川均 2008. 3. 1 発行
- SGRA レポート 44 第29回フォーラム講演録「広告と社会の複雑な関係」
関沢 英彦、徐 向東、オリガ・ホメンコ 2008. 6. 25 発行
- SGRA レポート 45 第30回フォーラム講演録「教育における『負け組』をどう考えるか～日本、中国、シンガポール～」
佐藤香、山口真美、シム・チュン・キャット 2008. 9. 20 発行
- SGRA レポート 46 第31回フォーラム講演録「水田から油田へ：日本のエネルギー供給、食糧安全と地域の活性化」
東城清秀、田村啓二、外岡 豊 2009. 1. 10 発行
- SGRA レポート 47 第32回フォーラム講演録「オリンピックと東アジアの平和繁栄」
清水諭、池田慎太郎、朴榮濬、劉傑、南基正 2008. 8. 8 発行
- SGRA レポート 48 第3回チャイナ・フォーラム in 延辺&北京講演録「一燈やがて万燈となる如く－アジアの留学生と生活を
共にした協会の50年」 工藤正司 日本語版、中国語版2009. 4. 15 発行
- SGRA レポート 49 第33回フォーラム講演録「東アジアの経済統合が格差を縮めるか」
東 茂樹、平川 均、ド・マン・ホーン、フェルディナンド・C・マキト 2009. 6. 30 発行
- SGRA レポート 50 第8回日韓アジア未来フォーラム講演録「日韓の東アジア地域構想と中国観」
平川 均、孫 洵、川島 真、金 湘培、李 鋼哲 日本語版、韓国語Web版 2009. 9. 25 発行
- SGRA レポート 51 第35回フォーラム講演録「テレビゲームが子どもの成長に与える影響を考える」
大多和直樹、佐々木 敏、渋谷明子、ユ・ティ・ルイン、江 蘇蘇 2009. 11. 15 発行
- SGRA レポート 52 第36回フォーラム講演録「東アジアの市民社会と21世紀の課題」
宮島 喬、都築 勉、高 熙卓、中西 徹、林 泉忠、ブ・ティ・ミン・チィ、劉 傑、孫 軍悦 2010. 3. 25 発行

SGRAレポート No. 0053

第4回SGRAチャイナ・フォーラム

世界的課題に向けていま若者ができること
—Table For Two—

編集・発行 関口グローバル研究会(SGRA)

〒112-0014 東京都文京区関口3-5-8 (財)渥美国際交流奨学財団内

Tel: 03-3943-7612 Fax: 03-3943-1512

SGRA ホームページ: <http://www.aisf.or.jp/sgra/>

電子メール: sgra-office@aisf.or.jp

発行日 2010年4月30日

発行責任者 今西淳子

印刷 藤印刷